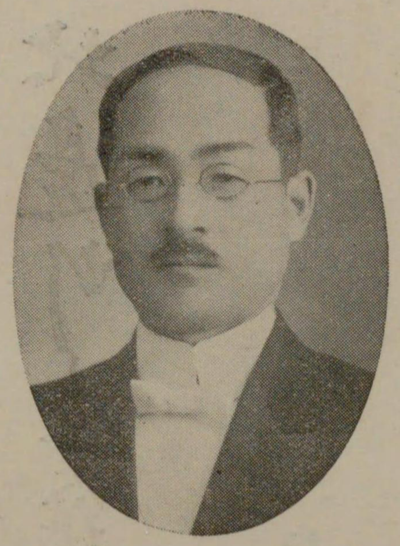
639-19
1200501565914
539
19

21686

北邊叫樺太北海道めぐり

文學士　越川彌榮著

昭和八・三・一・帝國圖書館



著者

639-18

小序

× × ×

本書に於て、北邊と稱するのは、主としてカラフト及び北海道をいふのであります。

カラフトや北海道などといふと、今でも寒いところ、雪の國、熊の住む森、或は不毛の荒野などのみと、思ふものもあります。しかし其の實我が北邊地方は、歐洲の一流文明國と、殆ど其の緯度を同じくし、山野河海は、無限の寶庫であるといふことも出來ます。それにまだ〳〵開發の餘地が多く、彼の地の人々は、一生懸命に、內地人の來ることを、歡迎しつゝあります。いやだ、好かぬと嫌はれる北米などは固より、或はたとへ好かれても、招かれても、遠い〳〵ブラジルなどよりも、まづ〳〵此處にと、彼等は一生懸命に、私共を呼んでゐます。然るに所謂內地の人々は、すぐ間近な我が北邊地方に、餘りにも冷淡であり、無理解であります。

現在北邊文化は、非常に進み、十分便利な生活が出來、特に北邊情調には、一種愉快な氣分を味はうことが出來ます。此處も亦我等の活動し得る天地、そして遺憾なく樂しみ得るところでもあり

ます。

× × ×

本書は、私のカラフト及び北海道地方の、旅行記錄であります。私はこの旅行に於て、大體三つのことに注意しました。

一、主要なるところは、悉く視察するやうつとめること。

二、視察は、出來るだけ、其の地方的要點を把握すること。

三、特に、北邊地方に關する一般國人の無理解なる方面に念を入れること。

そして私は、大體に於て、私の豫期したところを、達することが出來たと思つて居ます。從つて本書は、旅行記といつてもたゞ自分の好めるままに、見て來た遊覽記ではないことを、誇としてゐます。まづこれだけ、視察すれば、北邊地方を理解するに、大なる不足はあるまいと、自分では密に考へてゐます。

× × ×

次に記述に際しては、次の如き注意が拂はれてゐます。

一、地理的特質、地方的風尙は、出來るだけ精叙すること。

二、歷史的經過にも注意し、現狀を理解するに必要なる程度に、常に其の過去をも尋ねること。

三、北邊地方の開發發展上に、必要なる氣分を聊かなりとも、讀者に與へんとしたること。

四、學的要求に對しても、出來るだけ、滿足を與へるやう注意したること。

五、あまり堅苦しくならず、ゆつたりした氣分で、讀むことが出來るやう、期待したること。

六、たゞ一編の讀物としての目的にも、出來るだけ副へ得るやう、趣味的材料をも入れ、且つ文體にも注意したること。

七、北邊旅行者に對して、案內記たる任務をも、相當に果すことの出來るやうにしたること。

しかしいよ〳〵出來て見ると、隨所に不滿なところがあり、誠に慚愧にたへぬものがあります。それでも、北邊地方の地理教育上の參考書としては、從來にあまりない事實と體裁とを、具へることが出來たとは、思つて居ます。

私はまた特に青年諸君が、幸に一讀せられて、我が國北邊地方を、正しく理解する一助とせられ、進んで其の開發に當る實際的意氣をも示されんことを、切に希ふものであります。

× × ×

私の旅行は、嘗て全國師範學校長會議の爲めに、札幌に出張した機會に、行はれたものであります。其の會議の要點は、便宜卷末に載錄することにしました。

私の旅行に際しては、各地に於て、いろ〳〵の方々から、樣々の御好意をいたゞき、爲めに愉快に有益に、終へることが出來たことを、此に感謝いたします。

昭和七年十二月

伏見桃山の寓居に於て

越川彌榮

しるす

北邊行—樺太北海道めぐり

目次

一、北へ〳〵（上）……一
出立、靈泉寺溫泉、新潟、村上、秋田、

二、北へ〳〵（下）……三
秋田美人、秋田市、林檎畑、秋田杉、碇關、弘前市、

三、函館まで……六
青森、鳳翔丸、津輕海峽、函館港、

四、函館大觀（上）……八
棧橋驛、ハコタテの意義、函館市、高等女學校、函館山、圖書館、

五、函館大觀（下）……一〇
詩人啄木、五稜廓、

六、小樽まで……一三
大沼公園、駒ケ岳、八雲、長萬部、マツカリヌプリ、倶知安、余市、
七、小樽の名勝……一四
オタルの意義、小樽の發展、追分節、天狗山、花園公園、港、手宮公園、
マツカツ文字、綠ケ丘、
八、追分節……一七
オショロ、高嶋、歌棄、磯谷、松前江差、つばなの濱、オカムイさま、
九、札幌のぞき（一）……二一
師範學校長會議、サッポロの意義、札幌平野、豐平川、札幌市の發展、
一〇、札幌のぞき（二）……二三
札幌神社、サッポロビール、北海道大學、いろ〳〵の蟲、蚕の壽命、かげらうの長命法、
一一、札幌のぞき（三）……二七
製麻會社、植物園、原生林、博物館、恐ろしい熊の話、
一二、定山溪の一夜……二九
一三、札幌のぞき（四）……三三
中島公園、拓殖館、月寒、
一四、札幌のぞき（五）……三四
豐平館、札幌市勢大觀、氣候、產物、追分節、
一五、旭川まで……四〇
岩見澤、瀧川、おいしい蕎麥屋、奥へ〳〵、神居古潭、
一六、アイヌ人……四一
近文部落、アイヌ民族、
一七、旭川大觀……四三
上川平原、ベニウンゲル、チュプベツ、鈴木龜藏、村上掃頭左衛門、間宮林宗、
旭川市勢、全道第一の米產地、
一八、旭川名勝めぐり（上）……四六
神樂ケ丘、上川神社、旭山公園、東旭川村、美ましき富力、特殊の村相、
米の出來るまで、
一九、旭川名勝めぐり（下）……四八

旭川師範學校、春光臺、アイヌの別嬪、熊の噂、
二〇、稚内まで……五〇
開拓苦心談、特殊の開墾法、オトヰネツプ、ナヨロ、稚内、
二一、カラフト航路……五三
稚内町、三つの航路、
二二、カラフト渡り……五四
壹岐丸、宗谷岬と納沙布岬、利尻富士、名物の霧來る、アニワ灣、
二三、歌のカラフト……五六
インノサ節、エンヤラヤ節、其の他、
二四、大泊大觀（一）……六四
緯度、氣候、大泊の發展、道路が泥か、製紙會社、
二五、大泊大觀（二）……六七
大泊市勢大觀、人口、產業、築港、珍らしい養狐場、
二六、大泊大觀（三）……六九
世界一、發展史の一瞥、岡本監輔、ロシアの南侵、コルサコフ、樺太討伐軍、
大泊の市勢、
二七、大泊大觀（四）……七二
立派な文化設備、小學校、中等學校、神社、神道、佛教、キリスト教、圖書館、
劇場、活動館、
二八、樺太名稱考（一）……七四
種々なる名稱、德川時代、明治以後、支那、西洋、
二九、樺太名稱考（二）……七六
樺太のよみかたと其の歷史、
三〇、樺太名稱考（三）……七八
カラフトの意義、井上頼圀の說、前田夏蔭の說、小川運平の說、松浦北海の說、
栗本鞄庵の說、高橋景保の說、
三一、樺太名稱考（四）……八〇
サガレン考、魯語說、アイヌ語說、滿洲語說、ツングース語說、
三二、樺太名稱考（五）……八二

流鬼國、大長島、魚皮島、黑龍嶼、エレウテポーゼ、

三三、小沼農場の一瞥（上）……八四
中央農業試驗場、カラフト畜産大觀、有望な牛馬羊、トナカヒと狐、面白い狐の國民性、

三四、小沼農場の一瞥（下）……八六
農業試驗一般、農場巡視、今後の問題、

三五、知取まで……八八
落合、富士製紙會社、農耕と炭田、大森林、

三六、奥へ〳〵……九一
知取町、眞夏の寒冷、知取神社、製紙會社、自動車行、原始林、泊岸、帝國大學實習林、內路、偉大な大森林、磯波蹴りつゝ進む自動車、土人小屋、

三七、千古の森林……九三
自然大森林、樹種、森林監理史、

三八、恐ろしい山火……九五
森林主事、山火の豫防、山火の原因、ごまかし、大慘害、火の越年、

三九、毛蟲の威力……九八
松毛蟲、大慘害、自然の猛威、天地の妙用、木材飢饉、

四〇、敷香から（一）……一〇〇
意外の大市街、シスカかシクカか、幌內川、無數の大魚、ギリヤークとオロツコの漁業、

四一、カラフトの土人……一〇二
アイヌ、ギリヤーク、オロツコ、キーリン、

四二、ツンドラ（一）……一〇五
ツンドラの特質、厚さ、ツンドラ地帶の植物、

四三、ツンドラ（二）……一〇七
ツンドラ地帶の動物、食用植物、ツンドラ分布、

四四、敷香から（二）……一〇九
敷香小學校、濃霧來、眞夏のストーヴ、

四五、敷香から（三）……一一二
一年の氣溫、極寒のたのしみ、

四六、犬と獨木舟……一一四
敷香支廳管轄範圍、カラフト山脈、敷香嶽、交通機關、獨木舟、犬、其の操縱法、
四七、馴鹿の話……一一六
四八、海豹島奇聞（上）……一一八
海豹島、世界三大オットセイ棲息地、國際獵獲監理、一夫多妻主義、
四九、海豹島奇聞（下）……一二一
あはれな弱者、女性の貞操、親子の愛、一年獲獵高、ロッペン鳥、
五〇、日露國境……一二三
國境線、天測點、界標、
五一、道すがら……一二五
たのしいカラフト生活、
五二、カラフトの石炭石油……一二八
川上炭山、石炭埋藏量、封鎖炭田、問題の石油、其他の鑛物、
五三、豐原の一瞥……一三一

鈴谷平原、豐原市勢、樺太神社、博物館、中學校、小學校、カラフト廳、
五四、カラフトの教育……一三四
カラフト教育の五大綱領、中等學校、小學校、
五五、カラフトの横斷……一三七
山火憂憺、ループ式鐵道、
五六、眞岡の印象……一三九
眞岡町、近郊の風景、眞岡節、中學校、
五七、西岸めぐり……一四〇
野田、樂磨の水產試驗場、唯一の不凍港本斗、大蕗のこと、
五八、水產問題（上）……一四三
オットセイ、ロッペン鳥、ラッコ、海草類、
五九、水產問題（下）……一四四
タラバカニ、サケ、日露漁業問題、
六〇、カラフトを顧みつゝ……一四七

六一、カラフト探檢史の一瞥（一）……一四九
阿部比羅夫、鎌倉時代、日持上人、源義經、松前慶眞、山口鐵五郎、大石逸平、
高橋寛光、最上德內、松平忠明、中村意積、高橋一貫、
六二、カラフト探檢史の一瞥（二）……一五一
露人の侵入、松田傳十郎、間宮林藏、間宮海峽、
六三、カラフト探檢史の一瞥（三）……一五三
松浦武四郎、岡本監輔、
六四、カラフト移民觀……一五五
人待つカラフト、移民史一端、樺太驅移民優遇法、
六五、稚內をあとにして……一五八
寒い夏、拔海、勇知、利尻富士の雄姿、天鹽平野、オホツク海岸、
六六、網走から……一六〇
珍らいし町、町勢一端、名所のぞき、天都山、三眺山、網走湖、可愛い熊の子、
六七、屈斜路湖畔を指して……一六二
オホツク海岸、斜里岳、網走富士）、移民の風象、札鶴、大森林、
六八、幽邃無比のクッチヤロ湖……一六四
川湯溫泉、屈斜路湖、アトサヌプリ、雄阿寒岳、雌阿寒岳、
六九、釧路の一瞥……一六七
弟子屈、摩周湖、釧路平野、釧路中學校、釧路市大觀、ハルトリアイヌ、
官立小學校、ポロチヤシ、魚市場、
七〇、根室にて（一）……一六九
辨天島、根室市勢大觀、ニムオロの義、水產第一、貝柱罐詰工場、
七一、根室にて（二）……一七一
金刀比羅社、落石無電局、根室高等女學校、アイヌの反亂史、
七二、帶廣まで……一七四
冬の樂園、捕鯨、原岸灣、帶廣、トカチの由來、シヤンルル、
七三、帶廣の古今……一七六
史上の十勝、オビヒロの義、其の開拓史、依田勉三、鈴木銃太郎、

七四、十勝の富力（一）……一七七
帶廣の將來、十勝平野の生産力、農家の收益、グラポー氏の模範農場、
七五、十勝の富力（二）……一七九
甜菜、牧場適地、森林、工業、鑛業、
七六、ナンセンス……一八〇
七七、十勝ローマンス……一八一
チヨマトーとシカラー・トフ
七八、狩勝峠の大觀……一八五
新日本八景の一、天下の壯觀、ゆかしい處女性、
七九、層雲峽まで……一八七
狩勝展望所、落合、山部、夕張山脈、石狩山脈、下富良野、十勝火山の慘害、
八〇、天下の奇勝層雲峽（一）……一八九
再び上川盆地を通る、旭川、上川驛、石狩の奇流、大森林、兩岸の峯巒、鹽谷溫泉、
層雲閣、師團溫泉療養所、
八一、天下の奇勝層雲峽（二）……一九一
詩人桂月、天下の奇勝、清流、男瀧女瀧、岸壁、岩相、大箱小箱、大雪山彙、
八二、苫小牧まで……一九四
日高膽振の平野、苫小牧町、王子製紙會社、
八三、支笏湖往來（一）……一九六
危險な輕便列車、すごい注意、果然故障、
八四、支笏湖往來（二）……一九八
支笏湖、鱒の養殖、公立休泊所、おいしい御馳走、天下太平、
八五、支笏湖往來（三）……二〇〇
熊に出あつた話、子供を食つた熊の話、短い夏の日、
八六、白老アイヌ部落（一）……二〇三
シラオイの義、小學校、アイヌ部落、酋長熊坂運之丞、不思議な最敬禮、
八七、白老アイヌ部落（二）……二〇五
アイヌ研究者、熊狩の名人宮本イカシマトクの大氣焰、

八八、白老アイヌ部落（三）……一〇七
アイヌの義、アイヌ民族、アイヌの女子、世界第一、
八九、アイヌの話（一）……一〇九
アイヌの民性、
九〇、アイヌの話（二）……二一一
アイヌの風俗、衣服、植物、狩漁、氣質、
九一、アイヌの話（三）……二一三
寶物、アイヌの家屋の構造、
九二、アイヌの話（四）……二一五
主婦の死、入墨、あはれな姙婦、慘酷な安產祈禱、
九三、アイヌの話（五）……二一七
宗教、婚姻、葬式、主なる神々、
九四、アイヌの話（六）……二一九
アイヌ文字の問題、アイヌ語の例、

九五、アイヌの話（七）……二二一
アイヌ語の俗謠、アイヌ古來の歌、
九六、義經ローマンス……二二三
ヨシツネカムイ、義經とアイヌ娘、奇々怪々の魔法爭、文字を盜まる、
九七、アイヌの保護（一）……二二五
世界の人種、アイヌの過去、我が國人の愛護、北海道土人保護法、
九八、アイヌの保護（二）……二二七
アイヌの教育、衛生思想、病患治療、特別地の給與、
九九、仙境登別溫泉（一）……二二八
白老から登別まで、登別溫泉の由來、其の性質、
一〇〇、仙境登別溫泉（二）……二三〇
三つの特色、榎本武揚の詩、溫泉市街、地獄谷、大湯谷、日和山其の他、
一〇一、室蘭と洞爺湖……二三三
天與の良港、交通の要路、市勢大觀、日本製鋼所、捕鯨會社、湖畔の溫泉、

北邊行—樺太北海道めぐり（目次）
北海道のさかさ富士、艷麗第一、　一六

附錄

全國師範學校長會議要錄（札幌師範學校內開會）……
文部省諮問案協議答申協議題協議立案
師範教育改善案要綱　改正師範學校學科課程案要綱……三六

—〔目次終〕—

北邊行—樺太・北海道めぐり

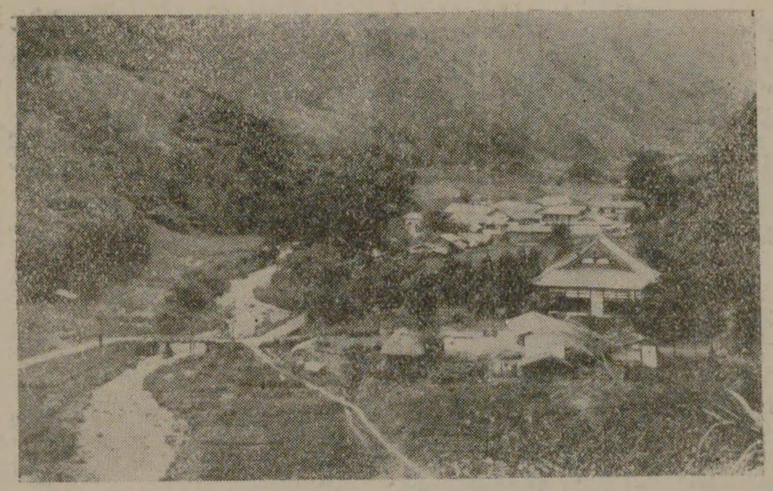
文學士　越川彌榮著

一、北へ〳〵（上）

日本の文化は、西南から東北へと進んで行く。三千年來の歴史の過程は實にそれであつた。そして北邊には、今日も猶、人類未到の奥地があり、晝猶暗き原始林が茂り、さながら太古のまゝの生活を爲すところの、人類が住んで居るといふから面白い。

國防、或は地理、或は産業などと、むつかしい理論は考へなくとも、かうした興味は、常に私をそゝりて、北邊探勝の機會を窺はしめたのであつた。

幸ひにも、六月下旬、全國師範學校長會が、札幌において開會せられることになつた。私は歐米旅行のあと始末が、まだ十分出來なかつたけれども、それでもこの好機を、逸することは出來なか



靈泉寺の溫泉

つた。

關西地方から、北邊諸國に行くには、大阪から青森直通の急行に乘るのが、距離も近く、時間も早い。私は北海道の尖端、稚內までの切符を求めて、これを利用することにした。千五百粁以上はいくら遠くても、途中下車たつた五回といふ規則は、國內における長距離旅行には、いささかこまる。殊に九州から、樺太の端まで行くものにとつては、隨分問題となるが止むを得ない。

そはとまれ、六月二十日大分を發した私は、信濃の國なる靈泉寺の溫泉に一浴し、俗塵を洗つてひたぱしりに北へ〳〵。

北邊旅行の興味は、新潟縣あたりから、次第に深くなる。あの限りも知れぬ水田の中を進み、北方遙に佐渡ケ島を望む頃から、窓外の風景は段々面白くなつて來る。

村上といふところを過ぎてから、間もなく列車は時々海岸に沿ふて走り、刻々千變萬化の風景が展開するが、それでも人家は、めつたに見えなくなる。のみならず折から日沒、やがて次第々々に、夕暗が襲ふて來ると、不思議な淋しさが、こみあげて來る。此處でさへこれだ。これから山形、秋田、青森の諸縣を經、更に海を越えて北海道、それからカラフトは、まだ容易でない。我が國の中とはいへ、隨分遠い。たゞ一人長途の旅の夕暮ほど、遊子を惱ますものはない。

併し、いよ〳〵暮れてしまへば何處も同じ黑暗々。秋田といふ聲に驚くと、時は既に十二時、全く知るべもないところ、汽車から下りてウロ〳〵してゐると、田舍ものと見込んでか、頻に宿引男がついて來る。なるほどこの眞夜中、ついてくれるも有難いと、導かれるまゝさる旅館に入る。これはしたり、三流五流のものらしい。部屋は汚ない、女中は下品、下男は無作法。一體秋田はこんなところかと、神經過敏になつてゐるものは、一以て直に萬事を推す。それでもさすがに北國、初夏の今日此頃、めつたに蚊の居らぬのは嬉しかつた。

二、北へ〳〵（下）

秋田といふと、人は直に蕗と美人を思ふ。それでも、誰れも皆美人でもあるまい。チムバもあれば目つかちもあらう。併し男も女も、一般に色が白く體格がよく、脊の高いことは事實の樣である。惜しいことには表情が足りぬと、誰かゞいつた。それに言葉が悪いのは東北並のこと。チヤンと坐らしておくだけならば、秋田人は實に日本第一だといふものもあるが、果していかゞにや。

秋田ふきの

秋田市は、人口五萬餘、雄物川の支流旭川に副ひ、廣漠たる耕地の眞ッたゞ中にある。その昔を尋ねると、慶長の頃佐竹義宣が、常陸から遷つたところ。その居城は神明山にあつた。

維新當時においては、東北列藩中に孤立して、たゞひとり勤王の美名を、輝かしたものであつた。

市の名勝は、何と云つても千秋公園が第一であらう。佐竹氏の舊城址で、市の東北に蟠る丘陵地がそれである。惜しいことには、昔ながらの城樓の、見るべきものはないが、それでも歴史を語る樣々のものが多い。

それのみでない。秋田全市を脚下一眸にあつめ、遠くは土埼港の方まで望むことが出來るといふ大觀もある。國學の大人平田篤胤の墳墓も、市外近くにあるといふが、僅々數時間の市内大觀にとゞめて私は弘前にと急いだ。

東北は、なるほど人口稀薄であらう。車上から見ゆる人家の影も、極めて少い。時々望む杉の大森林、所謂秋田杉の原産地であらうか、關西九州の地においては、容易に見られぬ壯觀である。

林檎畑の、限りもなく續いて居る姿も珍らしい。相馬大作の故事で、有名な碇ケ關を越えると、間もなく弘前につく。

弘前市は、津輕氏の舊城地、その城は、これもまた慶長の頃とか、津輕信牧の築いたところ、日本七名城の一として名高い。その城樓の一部は、今日猶嚴然として、その威容を示して居る。

城址から、津輕富士を望むのは實に大觀である。今日は、これもまた公園となつて居る。

南本町といふところにある、大圓寺の古塔は、高さ十七間の五重の塔、今では特別保護建造物になつて居る。古色蒼然、また一瞥すべきものである。

こゝもまたあはたゞしくかけめぐつて、私は次に青森へ向つた。

三、函館まで

いよ〳〵青森に來た。これが本州の最北端と思ふと、様々の好奇心も起るが、時既に午後の十時止むなくボッネンと、待合に過ごして居る。偏地に來たといふ淋しさと、船で渡るといふ多少の不安さとで、不思議な氣分も起る。漸く零時半といふ眞夜中に、連絡船は出帆した。

船は翔鳳丸といふ。その名もいかめしいが、實際三千五百トンの巨船である。然もこれは、珍らしい特殊の設備を有して居る。

船の下層のデッキには、貨物を滿載した貨車二十輛を、そのまゝ積んで、航海が出來る様になつて居る。

私は嘗てドイツからデムマークに、それからまたスキーデンに渡るために、汽車に乘つたまゝ、船上の人となつて、數時間の航海をしたことがある。その時、その珍らしい設備を、非常に面白く思つたが、我がこの津輕海峽にも、既にかうした巨船のあらうとは、夢にも考へぬことであつた。

この姉妹船には、飛鸞丸、松前丸、津輕丸といふ四隻があり、日々三往復して居るといふことである。

客室の設備も、ほとんど申分がない。僅一圓を投じて寢臺を利用すると、華胥の境にゆつくりとやすらふことが出來る。何等の不快も不安もない。

青森函館間は、約一百十キロメートル、四時間半で達するといふ。海上とはいへ、その大部分は青森灣内、殊に夏日の航海は、極めて安樂である。もつとも時に北海特有の濃霧が、來襲することがある。この時こそ、多少の警戒を要するとかいふが、それにしても、眞に一葦帶水である。

明くれば船は、既に函館灣内に入つてゐる。正に午前五時。先づ目につくは函館山、それから海岸近く立並んでゐる、大小様々の家々、それが遠くなるにつれて、次第々々に高くなり、山の中腹にまで及んでゐる。その有様、おもむろに香港を聯想させる。然し香港においては、海岸一帶に、五階六階の大厦が、行儀よく、あたかも水上に浮かんでゐるかの様に、立並んでゐるが、函館にはそれがないのは淋しい。

然し小高き處には、或は白く、或は赤く、色とり〳〵の家々が、あたかも繪の様に、山の端森かげなど、適當に配置されてゐるのは、蓋し北邊第一の風光であらう。

四、函館大觀（上）　（六月二十四日）

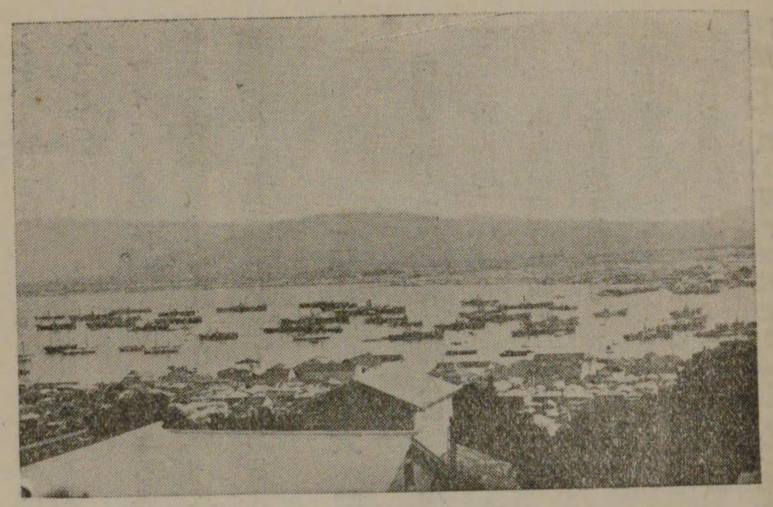
函館に上陸するなら、棧橋驛からせよと、かねて誰からかの注意があつた。別に函館驛といふ堂々たる名のものがあるのにと思ふと、それは下車回數を、一回もうける爲めの親切とある。有難い。棧橋驛といふのは船車連絡の長距離旅客に限つて、昇降させるところ、そして下車に數へないといふ。函館からの人は、こゝからは乘せないといふことである。

仰せの如く特權を活用して下車、勝田旅館に少憩して、市中の大觀に向ふ。

先づ問はん、函館とは如何なる意味か、と。かうした問を出されると、大抵のところではこまる時々は問ふた人を、密に嘲りさへしよう。然るにこゝ北海道においては、大抵のところではこまらぬといふから面白い。

試にバチエラーの、アイヌ語辭典を引いて見よと、或人は教へてくれる。それには、ハコタテは本來はハクチャシである。そしてハクは淺い、チャシは砦であるとなつてゐる。それでは、チョットした砦が、此處にあつたのかと、直にうなづける。

然し今は、アイヌはゐないし、砦もない、僅にとやかくと想像されるところが、函館山の中腹にあるのみである。



函館港大觀

市街の眺望は、高等女學校の屋上からするが、第一といふ。なるほど大觀である。ホンコンのピークの樣に高くはないが、それでも人口十八萬の大都市、二百萬坪の大港灣が、一眸の下に展開してゐる。

函館山は、又の名を臥牛山といふ。なるほど、おとなしい牛が、靜かに休んで居る樣でもある。全山鬱蒼たる樹木に覆はれて居るのも、嬉しい。若しそれ、これが公園などで、その山頂からでも、自由に大觀が出來たならと、誰しも思ふであらうが、今はそれが出來ない。津輕海峽を擁する要塞地帶となつて居るのである。と思つてゐると、ハワイの兵營山ゴールデンヘッドが、坐ろに浮かんで來る。形も多少似て居る。

函館に來たものは、どうしてもその圖書館を訪ふこ

四、函館大觀（上）

とを、忘れてはならぬ。横に地理や市勢の大觀を終つた私共は、此において、縱に歷史の通觀を試みることが出來た。

アイヌの事歷に關する、豐富なる典籍は、さすがに天下無比といふべく、我が國の北邊發展史を考ふる資料も、一々數へきれない。「**大日本地名アイイヤ**」といふ標柱の如き、坐ろに彼の英傑近藤重藏の快事を偲ばしめるものがある。（桂川の畔にて）

五、函館大觀（下）

函館を好んで居た青年詩人に、石川啄木があつた。

東海の
小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたわむる

の一首を碑面に遺して、今は空しく臥牛山腹に眠つて居る。そのありし日を、知ると知らざるとを問はず、この薄命多情の天才詩人の爲めに、一掬の涙を惜まぬ遊子の少くないといふは、まことに尤ものことである。

やゝ昔を尋ねると、どうしても足を五稜廓まで、運ばねばならぬことになる。

五稜廓は、函館の東一里ばかりのところにある。その名の如く、五角星狀の外濠がめぐらされた珍らしい城址である。

此處はいふまでもなく、明治元年幕末維新の役において、榎本武揚、大鳥圭介等が、據て以て最後の奮鬪を試みたところである。

當時において幕黨は、德川氏の末路を悲しみ、せめて此處に居城を定め、北海道だけにても、永久に領有せしむる樣、希求したものであるといふ。然しながら、かゝることを許し得ざるは、固より明かである。こゝにおいて彼等は、敢然武力を以て、最後の反抗を試み、その目的を遂げんとしたのである。

今日その外濠には、極めて淸洌なる水が、充滿してゐる。そして夏期においては、好個の水泳プールとなり、冬期においては、堅く結氷して、函館第一のスケートリンクとなる。またその一部は有名なる天然氷を產出する。その質緻密にて堅牢、所謂函館氷として全國に喧傳せられてゐるのはこれである。

五稜廓は、安政二年、函館奉行竹内保德、堀利照等、これを計畫し、翌三年、諸術教授武田斐三郎といふものを、工事監督として土木を起し、元治元年に、竣成したものであるといふ。その形の奇なることにおいて、とにかく天下に知られてゐる。

廓内周圍一千九百間、高さ一丈五尺、直徑一百八十間、地積五萬四千百二十二坪ある。この建築物は、明治五年五月、時の開拓使によつて、全部破壞せられてしまつた。今はただ榎本武揚の井戸といはれるものが、たゞ一つ荒廢した叢の中に、氣味惡くのこされてゐるのみである。

六、小樽まで

始めて蝦夷地に上陸しての函館は、寧ろ北邊氣分の乏しいものであつた。それでも、近郊には湯川溫泉や、トラピスト修道院や、種々なる意味において、訪ひても見たきところが數々あるが、私共はたゞ半日の大觀に止めて、北へと急がねばならなかつた。

棧橋驛を、零時四十分に出た列車は、流石に松も杉もなき、不思議な林相の間を走り、凡そ一時間にして、大沼驛についた。

大沼といへば、嘗ては日本新三景の一に選ばれ、近くは日本二十五勝の一に數へられ、公園として有名なところである。

湖水の周圍八里、大小二つに分れ、瓢形になつて居る。湖上には大小百餘の島嶼浮び、森は繁り水は清く、奇峯駒ケ岳を背景とし、幽邃優麗、稀に見る美觀であり、大觀である。

北上列車は、大小兩湖の間を貫走して居るので、車窓から左右にその明媚なる風光を、賞することが出來る

駒ケ岳は、流石に名だたる大火山、常に濛々と立つ烟は、物すごく大空にたなびいて居る。

近年大爆發を爲したことは、誰もの記憶に新なるところであらうが、その爲め、山頂の大部分は、全く崩壞して、ほとんど原形を留めず、僅にその一端が、錐の如く鋭く殘り、中央に聳えて居るのみである。

駒ケ岳の西裾野を通りすぎ、噴火灣岸に出て間もなく、膽振の國境を越えて、八雲といふところにつく。函館より凡そ三時間程。この間、碌々人家も耕地もない荒凉たる有樣。なるほど蝦夷地の風物はこれかとうなづかれる。

それでも八雲は、附近の名邑、開拓も可なりに行はれてゐる。長萬部（オサマンベ）といふところから、汽車は海岸を離れる。そして人の氣はひもなき雜木林の中、そこ〻に淋しく流れてゐる

小川の岸、名物の熊の住んでゐさうなところなどを、車上から眺めつゝ、奥へ〳〵と進む。

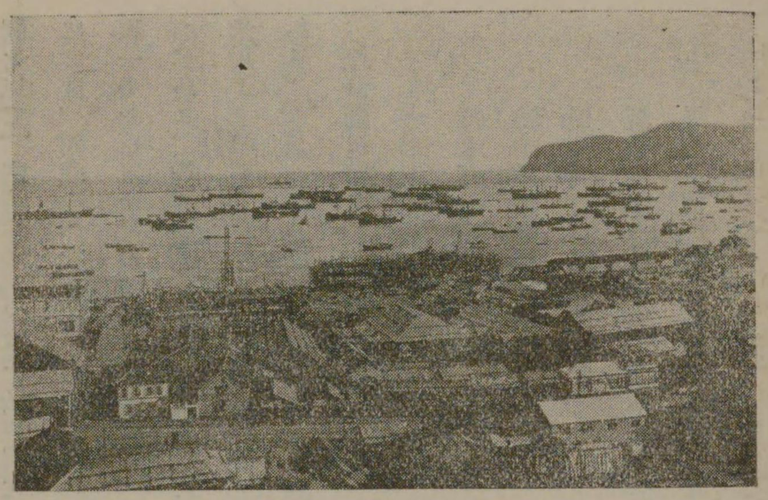
マツカリヌプリの八面玲瓏たる山容は、流石に蝦夷富士の名に背かない。初夏の今、その半頃から上は、あざやかな眞白のひだ面白く、かくてその頂上は、たゞ一つの雪塊が、全山を覆ふてしまつてゐる。**倶知安**（クッチャン）といふところからの遠望は、殊に美はしい。駿河の富士と、何の異なるところもない。

この附近は、淋しいながらも、平野廣く、開拓も可なりに出來てゐるが、それから**余市**に至るまでは、ほとんど人家も耕地もないといふ。列車は次第に暗の中を走つて、小樽につく。函館より八時間程。

七、小樽の名勝

小樽に來ると、北海道にも、再び文化の燦爛たるものゝあることが分る。渡島路の山野において淋しさに驅られた心にも、自ら安心と喜悅と賛嘆の情が起る。併し全く内地風の大都會、從つて何等好奇の念に、滿足を與ふるものはないといへよう。

小樽は、元來は「**オタルナイ**」である。アイヌ語にて、砂の川または小石の川といふ義であるといふ。その始めを尋ねると、**松前藩**が、小樽石狩兩郡を貫流するオタルナイの沿岸にあつた部落をこゝに移し、漁場を開き、「オタルナイ場所」といつたのに、基くといふことである。



小樽港大觀

明治の初年には、戸數たつた四百二十、人口二千に過ぎなかつたといふが、その四年に、札幌に**北海道開拓使**が置かれると、その連絡港として、急速なる發達を遂げることになつた。

やがてその十三年には、札幌との間の鐵道が出來、二十二年には**特別輸出港**に、三十三年には、**開港場**となり、その後年々膨大し、今日は人口十六萬、北邊有數の商港となつた。

港は明治三十年、國費二百餘萬圓を以て、北防波堤をつくり、同四十一年完成、更に同年より、五百餘萬

間を以て、南防波堤の工事を始め、大正十年に竣工、漸く港としての輪廓を完成した。自然のまゝにては、西北風が吹きすさむ時、あれ狂ふ怒濤を、如何ともすることが出來ぬのであるが、南北一萬一千七百三十尺の防波堤によつて、一躍類稀なる良港となり、昭和三年に於ては、五億圓の輸移出があり、外國貿易のみにても英米向の豆類を主として、木材その他二千二百七十餘萬圓の輸出、米國よりの小麥を始め、外米豆粕等、一千四百二十餘萬圓の輸入があるといふ盛況と、なつたのである。

追分節に曰く

小樽の棧橋から
舞子が身投げ
助けておくれよ船頭さん
長い間の船頭はすれど
舞子の水上げ今始め

と、果して何處の棧橋からであつたやら。

若しそれゆつくりと、數日を費すことが出來るならば、市内經濟的の大中心にして、銀行町たる色内通や、海岸附近のドライヴなどを始めとして、天狗山腹一望千里の風光に富み、白樺ポプラ落葉松などの珍らしい、そして梅桃櫻が、一緒に咲くといふ花園公園、或は市の北端二百尺の高地に忘れもせぬ尼港遭難の納骨堂が安置せられ手宮公園、または

我は部下を率いて
大海を渡り闘ひ
……
この洞穴に入れり

といふ、珍しい靺鞨語の古代文字、さては鬱蒼たる唐松の森に包まれ、神威隆々たる住吉神社、或は市内の眞ッただ中に、崇厳なる蔓の聳ゆる水天宮、天狗山の中腹、海上守護の金比羅宮、稍離れては緑ケ岳のスキー場等、皆一瞥に値する。これ等もさることながら、殊にオシヨロ高島と、昔から歌はれた高島町については、特にそのローマンスを語らねばなるまい。

八、追　分　節

北海道といふと、誰しも、すぐ追分節を思ひ出す。彼の情緒綿々として、哀調限りなき

おしよろたかしま
及びもないが
せめてうたすつ
いそやまで

といふ一首は、昔から津々浦々まで響いて居る。

その高島は、小樽の市外、手宮附近にある小さい町の名である。昔から鰊の漁地として、知られて居る。

おしよろは**忍路**、高島を去ること、更に二里ばかりのところにあり、同じく漁業地である。

歌棄・**磯谷**は、それ等とは更に遠くはなれ、その間に**積丹半島**が、突出して居る。

然し、**松前**、**江差**の方からいへば、渡島後志の海岸傳ひに進み進むと、先づ歌棄につく。それから間もなく、磯谷となる。此處まで行くことすら、昔に於ては容易でない。まして神威岬をまはつて忍路や高島に來ることは、及びもつかぬことであるといふのである。

尤もたゞそれだけならば、あまりに雅趣もないといふと、土地の人は躍氣となつて、歌の眞意は、かうであるといふ。

昔松前藩の御家中などで、罪でも犯したものがあると、遠く忍路高島の方にと、配流せられたものである。爲めにその妻女等は、遠く彼方の天を望みつゝ、日夕咏嘆したその情味を、歌つたものであると。

しかしそれでは、少し堅すぎよう。

或はいふ。

松前江差の濱人等は、昔から季節が來ると、小舟に乘つて、遠く忍路高島のあたりまで、鰊の漁にと出かけたものである。その間、うれしい戀になやむ若人等が悶々の情を、この歌に慰めたものであると。

情味はこの方が深い。

げに

松前江差の
つばなの濱で
好いた同志の
泣き分れ

八　追　分　節

といふ一首がある。それでは、一緒にいつたらよいではないかといへば、

連れて行く氣は
やま〳〵あれど
女通れぬ
場所がある

と、そんな無情な場所は、何處であらう。

それには、かうした怨みのことばがある。

蝦夷地街道に
御神威（オカムイ）なくば
連れて行きたい
場所までも

或はまた、

怨みあるのか
お神威さまは
なぜに女の
足とめる

なるほど、神威岬は、傲然として遠く海中に突出し、嚴然兩所を切斷して居る。然もあたりは、常に大浪荒れ狂ひ、昔ながらの小舟では、容易に往來の出來ぬといふ事實がある。それによつて、この歌を情味深く解するものもある。

それよりも、御神威樣は、好くか妬むか、けぎらひするか、女人の通るをお許しなさらぬと、神祕的想像に、やるせなき思ひを說くものもある。

まゝよ、說き方見方はいかにもあれ．とにかくあの痛烈な情緒を歌ふ哀愁の一曲は、聞く度毎に遊子の心腸を、寸斷するの感がある。幽妙なる味に富むことにおいて、これ以上の俗謠はあるまい。

九、札幌のぞき（一）（六月二十五日）

今日から二日間、札幌師範學校にて全國師範學校長會議が行はれた。（附錄參照）

しかつめらしい論議に、思はず興奮した頭腦をいやすために、午後には風物文化の鑑賞をするのが、私共のプログラムであつた。

さて札幌に來ると、何とはなしに、樣々好奇の心が湧く。札幌人は、內地と別に異なるところはないぢやないかと、しきりに平等論を吐く。抑々內地を內地といふのが、少々氣に障る樣でもあるらしい。

その平等論には、敬意を表するが、然し北海道縣でなくして、北海道廳であるのが、既に一寸ちがつたところを思はせる。それはたゞ名稱上のことだとしても、目に映れる事物、戰き來る風の肌ざわりも、やつぱり別の感じがする。

それにサツポロといふ名も、隨分面白い響がする。何でもアイヌ語で「乾いた土地」といふことであるとか。

なるほど一望十里、坦々たる沃野は、北海道第一の石狩川の流域である。そしてサツポロ市內はその支流たる豐平川が、貫通してゐる。太古においては、或は湖水であつたのかも知れない。

それが何時の間にか乾きゝつて、自然に出來た大森林、明治二年十一月十日に、札幌市の誕生するまで、晝猶暗きところ、强いものでは熊、やさしいところでは鹿、づるいやつでは狐などが、木かげ岩影に住んで、生存競爭をして居たものだといふことである。實にその日であつた。時の判官島義勇が勇猛果敢に、白雪を踏んで突進し來り、此處に人類第一の足跡を印したのは。やがてその十二日に、開拓使本府經營の繩張をして、一官邸を建築し、早くも十二月三日に完成、これより此處が北海道政治の中心たる實が、具はつたといふことである。

明治四年には、始めて市街の區劃も終り、戶數も二百餘となり、稍體裁を整へることが出來た。爾來五十餘年、今日は實に十七萬の人口を擁する大都會となつてゐる。正に名實共に、北海全道の大中心である。

なるほど北海道人がよく主張する樣に、內地の何れの大都會に比しても、大なる遜色はない。道路のあくまで廣く、街衢の整然たるところ、交通機關の充實してゐる有樣、堂々たる大廈の並び、處々內地にも珍らしい高樓が、中天に聳えてゐる樣子など、一寸外國都市などを、聯想せしむるモダーン振である。たゞ併し、屋根のトタンは氣にかゝる。サツポロのみでない、北邊一帶の家には、一般に瓦を用ひてない。灰色のつめたい感じのするトタン葺き、その薄い輕い調子が、何とはなしに失望させる。同じ寒いところでも、歐米では見られぬ圖。間に合せの感じが浮んで、いやである

一〇、札幌のぞき（二）（六月二十五日）

何はとまれ、まづ札幌神社に參詣。西方郊外一里許。

明治二年の創建

大國魂神、大名牟遲神、少彦名神の三柱奉祀

官幣大社

北海道の總鎭守

といふのである。境内は飽まで廣く、無數の老杉、天を摩して聳えて居る、その間に點綴する櫻樹の滿開の美觀など、坐ろに想像される。

恭しく社前にぬかづくと、何時しか身は北邊遠隔の地に、來て居ることを忘れてしまふ。千木かつを木の聳ゆるところ、其處は何處も我等の故鄕である。

次は下つて**ビール會社**。

所謂**サツポロビール**の釀造元、

本邦ビール釀造工業の濫觴

明治九年開拓使の創設

現在は大日本ビール會社の經營

現在能力一年八萬石

といふのであるから、可なり大規模なることが分る。

それにしても、どうして此處にビール會社などが、出來たであらうか。其處には開拓使の深い考がある。即ちこれもまた、農業奬勵の一、大麥の用途を開いてやつたものであるとか。今日でも純北海道產の材料で、釀造して居るといふのは、創業當時の大方針を守つて居るものであらう。サロポロビールの由來も、かう分つて見ると、坐ろに敬意を表したくなる。

恰もこの日は休業日であつたが、會社は特に我等の爲めに、**瓶詰の處作**を、實習して見せてくれたその內部を、飽までも綺麗に洗ひすゝぐところ、ビールを詰めるところ、口金をつけるところ、レッテルをはるところ、それからそれと、ものの數分もかゝらぬ中に、チヤンと箱に入れられてしまふ。

なるほど、一日十四萬本詰める能力が、あるといふから驚く。

正眞正無垢の生ビールの御馳走に、急に愉快になつた一行は、疲勞をも忘れて、次は**北海道帝國大學**に向ふ。

その前身は、明治五年創立の**札幌農學校**であるのは、いふまでもない、今日は、農學、醫學、工學理學の各部を綜合し、それに豫科、實科、專門部等を合せ、實に鬱然たる大學園となつて居る。

校地は極めて廣濶、處々にエルムの老樹が繁つて、ゆかしい影をつくつてゐる、綠の芝生が、毛氈の樣に、一面に地に敷かれ、幾十の校舍がその間に點々散見するところ、私は坐ろにジュネーヴ大學を聯想した。然もそれよりも、遙かに靜寂幽雅なることをも、感じたのであつた。

導かれるまゝに、農學部に入る。此處には、昆蟲博士の松村松年教授が居て、自ら樣々の標本を見せ、說明もしてくれた。

世界最大の甲蟲、蟻、クモ、サソリ、クツワムシ、などを驚いて見て居ると、一轉して、蟬は背見なり、蝶はとまつてから、羽をテフ〳〵と打つこと、トムボは飛棒の意なり、などいふ面白い說明もある。

小さいからつて、油斷はならぬ。蚤は二年、玉蟲は四十年も生きる。かげらうだつて、生殖さへしなければ隨分長命すると、長生きのしたいものに、貴い暗示がある。

こんなことをいつて居ると、蟲ケラの研究も、なか〳〵面白さうである。

さてまた、實用的の問題となると、偉大な乳牛が居る。

一日の分量三斗二升二合五勺

一年間に七十五石

も出る。これが實に日本の最高レコードであり、同時にまた世界的のものであるといふ。なるほどさうであらう。

一一、札幌のぞき（三）（六月二十五日）

帝國製麻會社、これも札幌では、代表的の工場である。その由來を尋ねると、時は明治の初年、開拓使黑田清隆が、ロシアから亞麻の種子を持歸り、屯田兵に試作せしめたのに始まると。

明治二十二年より、始めてその大規模の栽培を試み、二十三年より大工場も起され、次第に今日の如き、盛況を呈することになつた。

その製品の中、主要なるものは麻糸、麻織物類である。後者は、帆布薄麻布等で、軍用その他、諸方面の需要に應じつゝあるといふ。一年の產額は、麻糸の單糸百五十萬綛、複糸十三萬斤、亞麻織物は七十六萬メートルにも達するといふ。

併し世界の全體から見ると、誠に微々たるものである。最も多きはロシア、それからフランス、ベルギー、ドイツ、アイルランド等である。その作付町歩は、一百十萬町歩といふ。然るに北海道においては、僅々一萬五千町歩に過ぎないといふから、心淋しくもある。

亞麻といふものを始めて見た私には、何だか茅のひからびたものゝ様に見えた。それが次第々々に工程をたどつて、何時とはなしに立派な麻の糸となつてしまふところ、また興味が無いでもないが、私共はたゞ一瞥して、次は植物園に向つた。

これもまた札幌の名所、學者も常人も、忘れてならぬところであるといふ。さうであらう。地域四萬坪、その一隅に處女原生林が、立派に保存されてあるのも面白い。

全地域は、樹木園、樹木分科園、草本分科園、温室及び花園、苗圃といふ五區に分たれ、内外各地の植物六千種を、移植してあるといふことである。

單に學術的見地のみからでなく、綠したゝる木の下影には、清川密に流れて、やがて池とたゝへ、その風致の幽邃閑雅にして、太古の有様を、髣髴せしむるところなど、誰でも數刻の鑑賞に、耽りたくなる。

園中には、また博物館もある。本道の農産物・水産物・鑛物動物標本などから、アイヌの風俗習慣手藝等に關するものなどが、豐富に蒐集陳列せられてある。

入口に大きな熊の剝製があるのが、先づ目につく。生前、人を何人、牛馬を何頭殺したとか傷つけたとかいふ、猛惡なものであるとのこと。かうしたものが、今でも居るかと尋ねると、おどけたものは、すぐに「さうだ、いくらでも」と答へる。親切らしいものは「もうあまりゐない。心配はないよ」などと慰めてくれる。北邊旅行には、これも一つの問題。併し所詮は、一人で判斷する外はないらしい。

一二、定山溪の一夜

植物園の一瞥で、一日の行事を終へた私共は、豐平館といふ公會堂における、道長官の招宴に列席、北邊趣味の御馳走に、滿腔の感謝を表しつゝ、誘はれるまゝ道を轉じて、有名な定山溪にと向つた。同志四人。

定山溪！苟くも札幌にいつたもので、この名を忘れるものはないとまで、いはれて居る。

東京で、偶々或る名士に會つた、札幌といふ語を聞くと、いきなり「君、定山溪に行くことを忘れるなよ」といつてくれたことを思出す。果して如何なる所であらうか。

名所案内などで調べて見ると、それはかうだ。

豐平川上流の谿谷にあり。札幌より電車五十分間程。周圍には綠滴る翠巒を繞らし、豐平の清流は、或は淀みて眠れるが如き青淵となり、或は奇潭矢の如く、巖に激し岸に碎け、滔々の響を

なして流れ、溫湯は至るところに湧出し、濛々たる白烟を擧ぐ。

なるほど、立派な自然であるらしい。

それのみでない。

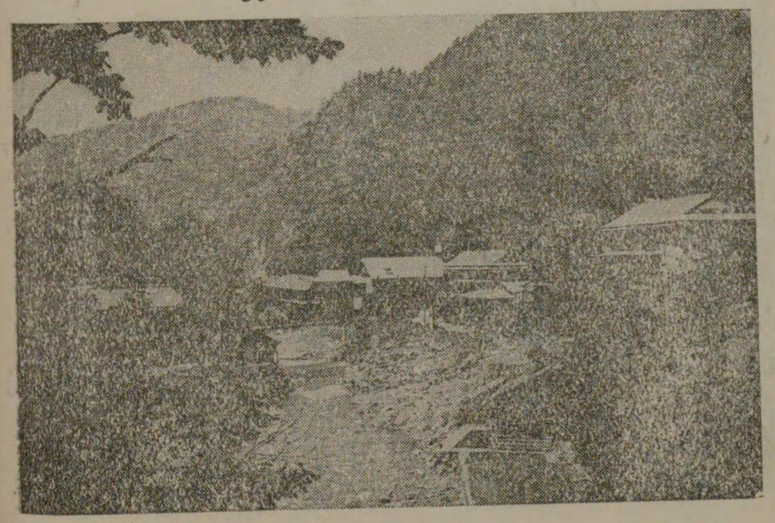
一度此處に杖を曳き、**錦橋**の絶景、**和尙巖**の奇觀**白糸瀧**の優艶、**月見橋**の佳勝、**百松澤**、**北妙義**、**千丈ケ瀧**の壯麗等、**定山七景**ともいふべきところを廻遊せば、何人も自然の大藝術を嘆稱せずには居られない。

如何にもよいところらしい。

併し、猶それのみでもない。

客舍の設備は理想的にして、數層の高閣殿樓、綠樹溪谷の間に陰見し、或は巖角に登り、淸流を越え、階を通し橋を架して、長く連亘する樣、遠く

定山溪



望めば、眞に仙境の如し。

と。宛然蓬萊の圖でも、見て居る樣である。だから、試に客舍に投じ、欄により、或は仰いで峻嶺奇峯の山姿を望み、俯して奔流深湍の水容を觀すれば自ら神澄み氣爽れ、さながら羽化して登仙するの想あらしむべし。

と。果して然るか。

更にその歷史を尋ねると、今は昔、**定山**といふ高僧があつた。何處からともなくさまよひ來り、靈感に導かれてか、たゞ一人、當時人跡未踏の自然林を押しわけ、猛獸毒蛇の住むといふこの溪谷に入り來り、偶々靈泉を發見したのに、始まるといふのも面白い。

暗の中についたが、なるほど自然の讃辭に、誤はないと直感される。この山奥に爛々たる無數の電燈、實に不夜城の壯觀を、呈して居ることも事實である。

導かれて、最も堅いといふ、**鹿の湯クラブ**にいる。なるほど立派な大料亭、これほどのものは、めつたにあるまい。嬉々として迎へてくれた玄關子が最初の一言。

「酌婦さんを二人、呼んで來て頂戴、可なり美しいのを」

はてな？ 不思議な一言？ 眺めもよし、設備もよし。殊に川岸近くしつらひた溫泉プール、その

他、總てよい。一日の清遊にこれほどよいところはあるまい。

併しあまりの俗化、聲色場裡にありて、聲色頭上に坐し得るものでない限り、定山溪不可近矣。

一三、札幌のぞき（四）（二十六日）

午前中で會議を終つた私共は、これもまた札幌市の誇りとする、**中島公園**にと導かれた。

なるほど文字通りに、中島である。東には、**豊平川**が緩く流れ、西は**鴨々川**が限り、更にその遠くには、**藻岩山脈**が連亘して居る。四望何となく、雄大の氣分にうたれる。

全面積十七萬七千餘坪といふから、園そのものも、可なりに廣大である。その中には、或は老樹鬱蒼として繁り、或は山あり川あり、或は池あり島あり、自然と人工とが、巧に調和を保ち、見るからに心地がよい。

それよりも、その中にある、**拓殖館**の一瞥を忘れてはならぬ。北海全道における、各種産業上の重要産物や、製品などを陳列し、一般に觀覽し得る様にしてある。本道拓殖の功績は、たゞ一巡にして知り得るであらう。

若し夫れ産業視察を試みるものあらば、先づ第一に、これを大觀しなくてはなるまい。

札幌停車場通

次は「**月寒**」文字を見ると、坐ろに澄みきつた冬夜の空を思ひ出され、何となく、文學的にも聞ゆるであらうが、實は「ツキサツプ」といふアイヌ名の、宛字であるといはれて、たゞ茫然。

此處にに、**種羊場**がある。農林省の所管に屬する。一千七百餘町歩の廣大の地積を有し、南にはゆるやかな丘陵が、次第に高まり北には、惠庭、樹前等の峻嶺が聳え、三面は、廣漠として際涯なき大平野が、展開して居る。

札幌より二里半程。

この種羊場の起源は、遙かに明治三十八年に溯る。當時は、たゞ牛のみ種養したといふことであるが、その四十一年頃より豚と羊とを、試みることになつた。更に大正七年より、緬羊の種畜を、實驗しつゝあるといふこと

である。

羊毛のないことは、實に今日日本人の生活上、至大の苦痛とするところである。これがために、年々どれほどの國帑を、外國に拂はねばならぬかも知れない。然るに我が國にては、雨量のあまりに多き關係上、緬羊の生育極めて困難である。外國種そのものを、直に種畜しても成功しない。所詮は、我が國において、我が國に適した新種を創造しなくてはならぬといふことに着眼し、苦心の結果、近年に至り、大に光明を認めることが出來たといふことである。

心なき畜類にすら、猶國民性があるのか。

一四、札幌のぞき（五）

札幌市勢の大觀は、今日親しく市長から、聞くことが出來た。正午に招かれた豐平館の一席、御馳走をいたゞきながら、數々有益なるお話や、名殘の追分節の拜聽といふ幸福ぶりであつた。

現在の札幌は、東西二里、南北二里半の廣袤、そこに十六萬八百二十一の**人口**がある。明治二年には、たつた六百二十四人であつたが、大正八年に、九萬八千六百四十八人であつたから、十年間に凡そ五割の增し方、全國平均增加率は、毎年千分の十三であるが、此處では千分の五二である。

若しこの分で進むと、五十年後には、人口五十萬の大都となると、市長の研究は、なるほど精密なものである。

然し北海道といふと、人口問題よりは、溫度の方が、我れ等には興味がある。曰く

此處では、暑中には、九十度以上になることもある。寒さは、〇度以下、二十五度位に下ることも稀にはあると。

「なるほど、ひどいね」

といふと、傍らにゐた北海道人は、

「いや、設備がありますからね、却つて愉快ですよ」

といふ。他の一人も、それに和して、

「ほか〳〵と暖かい室内から、寒風吹きすさぶ雪の景色を、窓外に眺めるのは、眞に痛快ですよ」

と躍氣になつていつてくれる。

別に不愉快ともいはず、またいやだともいつたのではない私は、神經過敏か親切か知らないが、かうした人樣の主張に對して、勿論何の抗論もしなかつた。その中にも、話は遠慮なしに進む。

風は可なりに强い。それにホコリも多い。爲めに、撒水組合を設け、市からも補助を與へつゝあ

る。道路延里數約五十五里。降雪もまた、一難事業である。無限の天空から降つて來る無量の雪は、何處へも捨場がない。やむを得ず最近は、ローラーをもつて、そのまゝ踏み堅めて、道を通ずる樣にしてゐる。

と。これだけは、あんまり痛快なことでも、ないらしい。

市長の話は、更につゞく。生産物は、一年二千五百萬圓。內二千百萬圓が工産物。有名なビールを始めとして、製毛、製麻、ミルク、木工品等である。

市勢の如何なるかは、市內の土地、一坪一千圓位もするところが少くないのでも分る。

と。なるほど。

その他二百二十萬圓の市豫算のこと、八十六萬圓の教育費のこと、市營事業のことなど、約一時間にわたつて、要領よく大勢を語つてくれ、やがて追分節の演奏にと進んだ。

いよ〳〵生粹の追分節が聞かれる。ステージを見つめてゐると、やがて堂々たる一紳士と、令夫人らしいものが、スッ〳〵と不思議な調子に、歩を運んであらはれ、正面に向つてチヤンと坐る。威儀誠に端然、たゞの藝人風のないところがゆかしい。

やがて女は、しとやかな風貌に似もやらず、突然大きな聲で、

スィーッ　スイッ

と、元氣よき合圖をする。

男はこれに導かれて、朗々と歌ひ出す。

鳥もかよはぬ八丈ケ島へ
やらるゝ此の身はいとはねど
後に殘りし妻や子は
どうして月日を送るやら

幾度も聞古したものであるが、流石は正調、何となく一種痛切の情趣を感じて、何時しか我れを忘れてしまふ。

次は、女が歌ひ出す。

荒い風にも
あてないぬしを
やるか蝦夷地の
荒海へ

情緒誠に綿々。やさしい音調の高低强弱、スラ〳〵とつゞくところ、鐵腸寸斷の感がある。

雪にたゝかれ
嵐にもまれ
苦勞して咲く
梅の花

は、此處北海道にては、特に一層感じがつよい。

鷗の泣く音に
ふと目をさまし
あはれ蝦夷地の
山かへな

旅情さぞ淋しいことであらう。

大島小島の
間ひ通る船は
江差受けかよ

なつかしい
故郷が偲ばれること、無理もない。

蝦夷の厚司(あつし)は
寒さを凌ぐ
來ても見しやんせ
都人

かうした鄕土の誇りも、必要であらう。

紀の國蜜柑は
日本の譽れ
外は日の丸
中は菊

他國のことに、氣を散ずるもよい。追分節の妙味も、なるほど此處蝦夷地に來り、親しくその風象に接して聞く時、いよ〳〵益々痛切な情趣にふれるものがある。今日は山形屋に宿泊。

一五、旭川まで（二十七日）

札幌には、見るべきところ考ふべきことが、猶多くあるけれども、私共は、今日は北へと進まなければならない。

六月二十七日、午前六時五十分に、札幌を出た列車は、茫々たる石狩平原を邁進し、何時しか岩見澤驛を通つて、その九時半頃、瀧川といふところについた。列車は、こゝに三十二分間停車する。

日本の列車は、何處へ行つても氣がはやい。ステーションの停車には、三十秒位のところもあるとかいふ。然るに三十二分とは、隨分氣がながい。シベリアの汽車は短くて七八分、長いのは四十分五十分もとまるが、なるほど聊かそれに近いところがあるらしい。

シベリアのステーションには、ブフエーといふものがあり、停車時間中、一寸一皿料理が、食へる樣になつて居るが、此處にはプラットフオームに、蕎麥屋が出て居るのも面白い。

僅の時間を利用して、熱いのを吹き〳〵あはてゝ食ふ。物の如何を問はずとして、かうしたものは、大抵おいしいといふ評判がある。瞬間を征服する興味も、大いに手傳つて居るのであらう。一杯十錢賣れること〳〵。

內地においては、高崎にこれがある。そして評判がよい。それ以南には、ないのかも知れない。北海道に來ると、倶知安に既にそれがあつた。人家のろくにない廣野原に、淋しくある驛のプラットフオームで、大急ぎで貪りながら、蝦夷富士の秀麗な姿を見る。それが面白いとて、これもまた大評判である。

奇を好むは、何處も同じ人情だ。

列車はやがて、石狩大平原を越へて、山林中に入る。最早何處を眺めても、松も杉もない。山毛欅や白樺や、內地にては容易に見られぬ林相が、限りもなくつゞく。人も家もめつたにない。かうなると始めて、さすがに蝦夷地といふ感じがわき、いひしれぬ淋しさがこみあげて來る。熊も居よう狼も居よう。一體旭川とは、どういふところか。列車はたゞまつしぐらに走つて、刻一刻と深山幽谷に、いり込んで行く。

十一時過ぎに、神居古潭といふところにつく。その名は、急流險惡のところとして、知られて居る。流石は名所、水流の蜿蜒として、谿谷の間をたどるところ、或は奔湍となつて走り、或は深淵として澄めるあたり、また得がたき勝景といはねばならぬ。たゞ水が、支那の川のやうに、常に濁つて居るといふは、透明淸麗を愛する我等には、何となく物足らない。

一六、アイヌ人

神居古潭を午前十一時十一分に出た列車は、半時間ばかりで近文といふところにつく。

此處は、旭川を距ること一里ばかり、アイヌ人部落のあることを以て、有名である。戸數凡そ五十、人口三百ばかりあるとか。

アイヌといへば、昔の蝦夷、一時は日本の全土にわたり、勢威をたくましくしたものであつた。八面玲瓏、日本のシムボルとして誇る、世界一の名山富士も、實はアイヌ語の、火と云ふ意味であるとか。學者の說によると、南は九州の果てまで、その足跡があつたらしい。天孫民族の發展につれて、順次北邊にのがれ去つたが、猶歷史上において、長い間、彼等は實に日本人の大敵であつた。

然るにその實力は、如何ともする能はず、次第に衰頽凋落、その民族は、ほとんど全滅に瀕したのであつた。かうなつては、最早敵ではない。却つて同じく國民である。爲めに明治三十九年、特別の法律を作り、アイヌ人を保護することになつた。

現在彼等は、北海道全體にて、人口凡そ一萬五千、主として東海岸方面に住んで居り、漁業農業などを生業としてゐる。鐵道沿線附近で、視察に便利なところは、こゝ近文と、室蘭附近の白老である。

私はアイヌを思ふたびに、いつでもアメリカインデイアンを聯想する。彼等も今日は、白人との競爭に破れ、邊地にかくれ去つて居る。

カナダのヴアンクーヴアー附近には、インディアン、レザーヴといふところがある。河畔の極めて住みよきところに、彼等專用の住宅地を與へられ、政府の保護の下に安住をむさぼつてゐる。

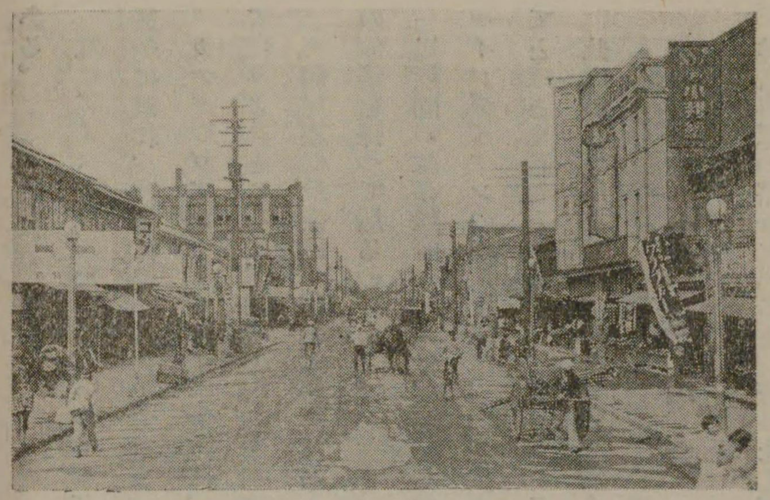
劣弱民族の最後は、何處も同樣である。敗殘の結果、遂にはその敵のなさけによつて、辛くもその餘焰を保つて居るのである。

民族間の生存競爭の結果は、結局この狀態にまで、進まねば止むものであるまい。我等はアイヌやインデイアンの現狀を以て、たゞ他人のことゝ、考へ去ることは出來まい。これによつて、極めてとほとき暗示と激勵とを、與へられることを忘れてはならぬ。

此處から旭川までは、凡そ七分で着く。

一七、旭川大觀

神居古潭の谿谷を出ると、突如として一望十里、坦々たる沖積平原が驛前に展開する。數時間の



旭川市街

山中駛走に何となく、うら淋しくなつたものも、この平原を望むと、急にいひしれぬ愉快を覺え、此處もまた住みよき地といふ感じが、そゞろに起つて來る。これは即ち上川平原であり、その一隅に旭川市があるのである。

上川とは、實はアイヌ語のペニウングル（上の川の人の村の意）に基くものであるといふ。

旭川とは、これもまたアイヌ語のチュップ、ペツに基くとか、チュップは太陽を意味し、ペツは川の義である。合せて、水源の東方に當つて、旭の出づるところといふ意であるとか。

この平原に、始めて移住した內地人は、秋田縣人の鈴木龜藏であるといふ。時は明治の五年、彼は狩獵を爲しつゝこの地に來り、土人と交を結び、その十年には、遂に土人の女を娶り、石狩川の中州今日の龜吉島に、茅屋を結んだといふことである。

もつとも、始めて內地人の足跡を印したのは、ずつとさかのぼつて、寛永十二年に、松前藩士村上掃部左衞門といふものが、蝦夷全島の地圖を作るために、入りこんだといふことが、今日までに知られた、最古の事實であるといふ。

次に文政四五年頃、彼の英傑間宮林藏が、地理視察の爲めに來たことも、知られてゐる。

文政五年頃には、土人が五百二十七人、石狩川忠別川の沿岸に住んで居たといふことが、蝦夷雜書などに見えることを思ふと、七八十年前、この附近には、アイヌ人の大部落があつたことが知られる。然るに今は僅に近處に、その名殘をとゞめて居るに過ぎない。

旭川といふと、すぐに北の國、遠い寒いところ、といふ感じが湧く。北緯四十三度四十七分といへば、アメリカでは、ポーツマス附近、カナダのトロントあたりに位置し、歐洲ではオーストリーのウィンに相當すると思ふと、それほど極地では決してない。

氣溫を見ると、十二月中旬から、二月下旬までは、零下十度內外であるが、夏において、日中は八十度以上の酷暑にも、なるといふを見ると、決して住みにくいところでない。殊に冬は、立派な設備があるから、內地人の樣に、寒さにふるへて居る樣なことは、決してないと、この地の人々は

とかく威たけだかになつて主張する。なるほど、さうかも知れない。

とにかく現今においては、人口七萬四千、これに兵營その他の人を加へると、八萬近くなるといふから、すばらしい。それも明治三十年頃にくらべてさへ、二十一倍といふ躍進を、示してゐるといふことである。隨分急速の進歩をしたことが分る。

實際、上川平原からは、米一百萬石を產出する。北海道全體としても、二百五十萬石に過ぎぬといふから、全道第一の米產地、その中心が旭川である、從つてまだまだ將來の發展、期して俟つべきものがあると、市民は勇躍して居る。

一八、旭川名勝めぐり（上）

旭川にも、名勝は少くない。

まづ神樂ケ岡、旭川驛から約三十町、鎭守上川神社が勸請せられてある。市の南方高地で、鬱蒼たる綠樹の中に、素木高雅な社殿を拜するときは、そゞろに森嚴の情にうたれ、自ら襟を正さしめるものがある。

この地は、明治二十二年の昔、時の北海道長官永山武四郎が、　內大臣三條實美公により、上裁を請ひ、離宮豫定地とせられたところである。

丘上に立ちて北望すれば、上川平野は一眸の下に聚り、旭川の炊烟眼下にたなびき、春のさくら秋のもみぢ、共に遊士をして、停徊去る能はざらしめるものがあるといふ。

私共は、丘上の料亭にて、旭川教育會から優遇を受け、大觀し終つて、次は旭山公園、旭川驛から約二里半、上川平野の東端、東旭川にある丘陵地。倉沼川の清流ゆるく丘麓をめぐり、その上に四百尺の高地が、屹立して居る。その緣端から大觀すれば、上川平野の面目は、また別種のものとして展開する。

東旭川村長は、自ら來て案內し、說明もしてくれた。曰く

東旭川村は戶數約一千

五千町歩の水田

一千五百町歩の畑

水田一反三百圓位の價値

云々と。然らば、村民は皆大資產家である譯。內地において、これほど富裕な農村はあるまい。

見渡せば、茫々たる水田の中に點々として農家がある。先づ土地を定め、その中に家を建てるの

で部落をなさぬのが、新開地の特相であらう。

村長は、この地の草分の一人、坦々として旭川市に通ずる大道を指し、

この道など、大きな熊が居つたものですよ。

と、感慨にふける。

米が出來る樣になつたまでに、樣々な喜劇悲劇もあつたらしい。その始めは、米などは到底出來ぬといふ、某博士の說を妄信した官憲は、却つて稻をつくるものを罰したものである。然るに日本人の到るところ、米の出來ぬところはない、移住者はかく信じて、密に工夫をこらして居た。偶々大山火事のあとに、自然に生えたものから、この地に適する稻の品種が發見せられ、耕作法も改良され苗をつくらず、籾蒔法を用ひ、遂に今日の如き盛況となつたといふ。

現在は一望五萬二千町歩、毎年品質優良なる一百萬石の米を、產出する。この平野は、冬の溫度は稍低下するも、夏季においては、日中八十度以上の高溫に達することが、稻の生育に適するのだといふ。

一九、旭川名勝めぐり（下）

旭山公園の大觀を終へて、私共は、嘗てその昔においては、熊が頻りに出たといふ大道をドライヴして、旭川師範學校を訪ねた。北邊の山中に、淋しく立つて居る姿を、かねて想像して居た私共には、實に意外。その廣大なる地域は、內地の何處の學校にもあるまい。その壯麗なる建物は、これまた容易にその類例のないもの。その經營法も、極めて堅實に進んで居ること、これ亦容易に得がたい感がある。生徒が我々の爲めにと奏してくれたバンドのコーラスやソローの數曲は、實に堂に入つたものであつた。一巡し終つて、次は春光臺に。

その途中、ニヤリ〳〵と妙にホホ笑む若い女性が、處々我等を道に要して、パイプや箸や、樣々の細工物などを賣らうとする。近文アイヌの別嬪であるといふ。その可憐な姿に、急に柄にもない慈悲心を起してか、いりもせぬものをとやかくと弄び、買求めた仁者もあつたらしい。

春光臺とは、その名が既に何となくゆかしい。然し今は眞夏、若葉のみどりは、最早去つて居る。

此處は旭川驛から、約一里半。市の西方、極めてゆるやかな調子に、起伏する茫々たる高臺地、第七師團の演習場である。

さながら毛氈の樣に、雜草の繁つた中、ところ〳〵に亭々として聳ゆる大樹の群、淋しさうでもあり、勇ましさうでもあり、心なき遊子をも、何とはなしに、木かげに佇ましめる感がある。

上川平野の大觀は、此處からも面白い。すぐ下に見ゆる**第七師團**の兵營、それから旭川の市街がつゞいて展開し、その遠方遙かに見渡すと、北海道最高といはれる**大雪の峻嶺**が、天を摩して雲間に出入してゐる。壯大雄麗、思はず快哉を叫ばしめるものがある。

さてまたその反對、西方にはあまり遠からぬところに、コムモリと繁つた大森林に、覆はれた丘陵が連亘してゐる。案内に來てくれた奥田市長は

「あの山の中などには今でもゐますよ、熊が」

といふ。さてはと驚く我々を、氣の毒に思つたらしいさる人が

「それは問題でせう」

と、濁してくれると、市長さんは正直ものらしい。やつきとなつて

「いや、それなら君行つて御覽！」

と、ツンとおすましになる。

北海道に來ると、至るところでアイヌと熊とが問題になる。

二〇、稚内まで

春光臺からの大觀を以て、旭川視察の豫程を終へ、下つて第七師團の偕行社で、奥田市長からの招宴に列し、宮越旅館に宿泊。

翌二十八日午前七時、旭川驛を發して、稚内に向ふ。車中つれづれなるまゝ、昨日の招宴の際における**開拓苦心談**などを聯想する。

茫々たる美田を眺めて居ると、その中には、如何なる苦心が秘められて居るかを、坐ろに思はざるを得ない。その今日ある、決して容易のことではないことも、かねて知らぬではなかつたが、現に此の地に來り、親しく此處の人から、その實情を聞くに及びて、パイオニーアの偉大な努力に對し、今更ながら深厚なる謝意を、表せずには居られない。

當時における北海道は、固より汽車もなく、汽船もなく、否ろく〳〵に道すらない、それに猛獸の住むといふところに、分け入つたことを考へると、如何に勇敢であつたかゞ知られよう。

今日は、ほとんど至るところに開拓の手が屆いて居る。それでも耕地は今なほ開墾整理中のものが、隨分多いやうである。

開墾といつても、内地でするのとは、全く趣がちがう。何でも第一着手には、やたらに樹木を伐り倒し、時機を見てこれを燒拂ひ、かくして先づ僅にても、その間の土地を耕して、處女作を試み、

それから次第々々に、枯木を除き、耕地を廣げるのだといふ。併し大木の株などは、容易にとり去ることが出來ない。今でも立派な田畑の中に、眞黑にこげた大株が、五六尺も高くニョキ〳〵と立つてゐるのは、それである。これ等を完全に除いて、立派な耕地とするには、實に十年の日子を要するといふことである。

旭川を出た列車は、一時間ばかりで上川平野を横斷し、次第に山地に入る。この附近は例の處女作の耕地の中に、淋しく立つてゐる見すぼらしい小屋が、あちこちに點々あるのみで、都會らしいものなどは、めつたにない。

それでも音威子府に至るまでは耕地も割合に開けて居る。函館から札幌へ、又それから旭川への間の樣に、荒凉たる極地の氣分は却つてない。その途中に、名寄がある。

名寄は「ナヨロ」と讀む。人口九千、交通上の要所にも當り、地方的產業の中心として、今後有望なところであると、いはれて居る。

音威子府は「オトイネツプ」と讀むこれもまた地方の名邑、汽車はこれから、**宗谷線**、**北見線**と分れて、同じく稚內に行く。私共は前者によつた。**上頓別**附近及び**曲淵**附近の、大森林中を走るときは、さながらシベリアの奧を、進んで居る樣な壯觀であつた。クッチャロ湖に近づいてからは、樹木は全く無い草原となり、やがて午後六時八分といふに、**稚內**についた。いよ〳〵北海道最北の都會に來たのである。旭川より十一時間程。**井上旅館**に入る。

二一、カラフト航路

宗谷本線の終端に**稚內町**がある。現在は人口二萬を、算するといふことである。北海道最北の都會ではあるが、暖流がめぐり〳〵て、此處にも來る關係上、嚴冬沍寒の候であつても、海水が凍るといふことはない。併し眞夏の此頃でも單禪を着、火鉢を抱くといふのだから面白い。

背面はほとんど樹木のない一連の丘陵、その麓に細く海岸に沿ふて、二里にもわたつてゐるトタン葺の家々の姿を考へると、內地では容易に見られぬ俤がある。

カラフトに渡るには、此處からするのが、順路である。函館から急行列車に乘つて來ると、樺太への定期航路に、丁度接續する樣になつてゐる。

航路は大泊まで、一六四粁、この間航海時間八時間といふから、關釜連絡の時間と大體同樣である

今一つの航路は、稚內から、カラフト西海岸の要港、本斗へ連絡するものである。距離は一三七粁であるが、時間は前同樣八時間といふことである。

前者は、鐵道省の直營で、四月から十一月までは、毎日發着する。たゞ冬期においては、隔日一往復となつてゐる。

後者は、北日本汽船會社の經營で、鐵道省の連帶航路となつてゐる。通年隔日に運航する。

以上は共に稚内からであるが、小樽から、別の航路も開けてゐる。それは北日本汽船會社、近海郵船會社の經營、鐵道省の連帶航路である。概して冬期は荒れ勝といふが、夏期においては、誠に平穏である。

若しゆつくりと、旅を樂しむものならば、小樽からの航路によるもよい。その間に利尻富士などの勝景をも、眺めることも出來る。

カラフトの西海岸に行く人は、是非直接本斗へ行くがよい。たゞ冬期は、往々西北風になやまされることを、覺悟しなくてはならぬ。船も小さく、粗末である。

最も安全にして愉快な航路は、大泊へのものであらう。船の設備もよく、割合に大きい、のみならず、宗谷灣を出て、間もなくカラフトの亞庭灣に入るので、極めて平安なる航海が出來る。

二二、カラフト渡り

私共は、最も安樂な、そしてカラフトの正面玄關たる、大泊に向ふ航路をとることにした。

六月二十九日、午前八時といふに、**稚内港**を出發した。船は、**壹岐丸**といふのであつた。南方孤島の名を負へる船によつて、北邊孤島のカラフトへと、近づいていくのも面白い。夫のみでない、この船は、關釜連絡船として、その昔は、對馬丸と共に、一時交通の要路に當つたものである。然し一千六百噸といふ小柄の悲しさ、いつしか競爭に破れて、今はアイヌの末路の如くに、淋しき北海に浮かんで居るのである。

今日は、幸ひに好天氣、朝の中こそ風やゝ吹きたれ、間もなく全く靜まつての日本晴れ、刻一刻と進むにつれて、左右相對する稚内港の人煙は、次第に小さく薄くなるが、**宗谷岬**と**納沙布岬**との尖端に、白く光る燈臺の姿は、いよ〳〵はつきりと見えて來る。稍遠くに群山を拔いて見ゆる**利尻**の雄姿は、恰も箱根の連脈の上に、高くそびゆる富士の樣でもある。

北海の一種痛烈なる感じを味はひつゝ、甲板上に遊びふけつて居ると、突如として名物の霧が來た。時は午前十一時半であつた。不思議に寒い風が、吹いて來たと思ふと、やがてあたりは、全く濛々たる霧に覆はれてしまつた。

慣れきつた船員は、落付いたもの、それでも種々非常手段をとつてゐるらしい。

汽笛は、一分毎に鳴らされて、警戒怠りない。フト嘗てサンフランシスコ附近において遭遇した濃霧を思ひ出す。時の乗船コレア丸は、三十秒毎に汽笛を鳴らしたのであつた。處は渺々たる太平洋、いよ〳〵これより大海の眞ン中にと向ふ時、流石に一種不安を感ぜざるを得なかつた。然し此處は一葦帶水、却つて一種の興趣をも、そへぬではない。

それでも、嘗て大禮丸は、この濃霧のために、遂に不幸な最後を遂げたことなど思ふと、決して愉快でもない。船長は、頻に水深を計らせ、一々その報告を聞いてゐる。五十メートル……三十メートル……二十メートル……

「何？淺いな」

といつた時は、既に十メートルとなつてゐた。なるほど五間ぐらゐになつてゐるのだ、思はずギョッとした。

アニワ灣の入口には、航海者の警戒怠らぬ淺瀬がある筈。はてな？幸ひに霧は間もなく晴れた。船は既にアニワ灣内に入つてゐた。午後五時、大泊港に上陸す。

二三、歌のカラフト

エゾ・カラフトと、たゞ一概にいつてはならぬ。此處にも、詩があり歌がある。一寸その二三を調べて見ようか。

樺太節

行かうよ、船頭さん、一の澤沖へ
船は網船、鰊船
沖の鰊は、岸までよせる
荷馬車引き込め、すくい込め
インヤ、イーンヤ、インノサ
敷香（シスカ）、幌内川、水こそ濁れ
ベリカメノコ（美娘）が、岸に待つ
好いた同志が、丸木を浮べ、
月を眺めて、さしさいつ、
インヤ、イーンヤ、インノサ
晴れる雪道、スキーに乗つて、

鈴谷嶽から、見下せば、
ペチカ烟りて、天地は眠る、
都豐原、よい所、
インヤ、イーンヤ、インノサ、
私しやカラフト、豐原育ち、
町は燈の町、霧の町、
三味は細棹、音は心意氣、
主の側なら、よく響く、
インヤ、イーンヤ、インノサ

×

臺灣には、臺灣節があり、それを歌つて見なければ、臺灣情調は分らぬと、よく臺灣の人々はいふ。

それと同樣に、カラフトには、**カラフト節**があり、これを歌つて見なければ、カラフト情調は分らぬと、カラフトの人々もまた、いふであらう。

勿論北海道には、名曲追分節がある。然しそれはそれ、いかによいから、好くからとて、これにはこれの情があると、ムリヤリにもカラフトの人は、これを聞かせたがる。

これはカラフト節といふのであるが、別に眞岡節といふのがある。それは次の如くである。

同じ樺太を歌ふにしても、樺太節は情味たつぷりのものである。やさしいところに、うれしさがあらう。然るに、眞岡節に至つては、元氣潑溂、活氣横溢のところに、痛快味がある。前者には、しとやかな女性の趣があるとすれば、後者には勇往邁進の青年の風があるといへよう。

深い思索は、一まづよして、

エンヤラヤノヤー
早く御出でよ、カラフトへ
陸に千里の、沃野がつゞき、
海にはつきせぬ、魚の幸、
日本ナー
日本男子の腕だめし、
エンヤラヤノヤー

北邊行ー樺太北海道めぐり

エンヤラホイノホイ

行くにや及ばぬアメリカなどへ、

エンヤラヤノヤー

北に樺太ありながら、

山には千古の、綠の林、

海には白鱗、躍る波、

早くナー

早く御出でよ、樺太へ、

エンヤラヤノヤー

エンヤラホイノホイ

北緯五十度は、日露の境、

エンヤラヤノヤー

フランス巴里と、同じ緯度、

文明開化は、此處にも起る、

緯度は同じでも、土地廣うても、

移民ナー

移民が來なけりや、拓けやせぬ、

エンヤラヤノヤー

エンヤラホイノホイ

實際さうであらう。神經過敏な顏をして、青いきといきつきながら、泣いたり、怨んだり、怒つたり、愚圖々々して居るそのひまに、北へ〳〵と招いてくれる。なるほど行くのも面白い。

アメリカに行くのも、勿論惡くはない。けれど、行けぬところに、無理强いするな。なるほどカラフトには、海また山の寶物、隨分豐富であるらしい。まづ〳〵こちらとすゝめてくれる。それも極めて、必要である。

遠い〳〵と、いつてはならぬ。なるほど、フランスパリーと同じ緯度か。大和なでしこも、たゞ溫室のみに、小さく咲いてはつまらない。せめて、此處カラフトまでも、行くべきだ。聞け、一生懸命呼んでくれるその聲を。

情味のあるものもよい。また勇往果敢のものも面白いが、然しそればかりが歌ではない。もつと

あつさりとした、こだはりの少ないものにも、氣持のよいものがあらう。カラフトの歌にも、さうした調子のものもある。

その一二の例をあげようか。

樺太で
北の都は惠須取町よ
うしろは太平
寶の山に
炭鑛鐵道黑烟よ
海にまた汽船が
出つ入りつ

惠須取町は、カラフト西岸北部にある。太平炭山との間に、鐵道が通じ、將來有望のところであるといふ。

富内よいとこ
一度は御出で
洞の中にも
コリヤ島がある
島があれども
ありや中島よ
棹をさゝなきあ
行かりやせぬ

富内は、南東部にある。同名の湖畔に位置し、景勝の地であるとのことである。

トウバよいとこ
一度は行かう
洞の中にも
コリヤまりも(球藻)がある
まりも珍らし
日本で三とこ
千島阿寒に

トウバだけよ

球藻といふものは、小豆粒位の珍奇の水草、なるほど樺太にもあるのか、トウバは、西南海岸にある小邑。

かうして歌のカラフトを考へて來ると、此處もまた住みよきところと思はれて來る。試みに大泊灣頭に立つて、四邊の風物を大觀すると、樹木の少いのは淋しいが、それでも美しい丘陵が、海岸近くゆるやかに亘り、その間に、堂々たる大廈高樓が、相櫛比し、大都會の風貌を具へて居るのが見える。私は一種勇躍を感じつゝ、視察に向つた。

二四、大泊大觀（一）

大泊は、實にカラフトの玄關口、北海道の稚内とは、九十哩を隔てゝ相對して居る。

その緯度を見ると、北緯四十六度三十九分といふから、ロンドンベルリンよりは、遙かに南方に位して居ると、この地の人々は、頻に大言壯語する。然し、海流の關係上、固より歐洲の氣候と同様でないことも、明かである。

平年の例によると、初霜は九月二十四日、終霜は五月二十三日、初雪は十月二十四日、終雪五月十七日、十一月三十日以後の雪は、根雪となつてとけず、四月十五日になつて始めて溶解するといふ。その量は、平年三尺位とか。

大泊市街

溫度を見ると、八月平均攝氏十七度二、一月平均氷點下十一度四、そして最高は二十六度七に達し、最低は氷點下二十四度六に、低下したことがあるといふ。

なるほど、寒いことは寒いが、北海道の或る地方に比しては、却て溫和であるともいへる。

風土病は、ほとんど全くなく、傳染病も、めつたに流行しないといふから、案外健康地であることが分る。

さうであらう、明治四十四年には、人口僅に六千に過ぎなかつたものが、昭和二年においては、ほとんど二萬五千に達して居るのを見ても、その盛況を知ることが出來る。

實際大觀したところ、何處にか一種の底力があることを感ずる。カラフト全島の交通上の樞軸地となつて居るからでもあらう。

本州東北を過ぎて、函館に上陸したものは、文化は東北の山野を飛越して、一躍北海道に來た樣に思ふ。然し稚内から、大泊に來ると、更にそれは旭川から、北部を飛越へて、直に大泊に來た樣に感ずる。

それほど、大泊は堂々たるものである。たゞ道路の惡いこと。これはまた、恐らく世界第一であらう。ほんとに泥濘の深さ、脛を沒する。然し元來底無しの沼澤地、如何ともし得ぬものであるとか。どうしても道路といはんよりは、泥地といはねばなるまい。

大泊には、見るべきところが少くない。新たに生れ出でたる諸官衙、學校なども、皆瞥見の價値はあらう。郊外の養狐場なども珍らしいものに相違ない。然し私共は市及び教育會の歡待を受けていゝ氣分になり、市内大觀後、王子製紙會社の分工場を一閲したのみで、その名も堂々たるカラフト・ホテルといふに入つた。設備も氣分も相當よい。かくてカラフトの第一夜は、愉快に休養することが出來た。

二五、大泊大觀（二）

大泊町は何といつても、人口既に三萬に近いといふ勢ひ、内地においても、やがて市制を問題とするところである。大觀したところ屋根のトタンは淋しいが、それでも堂々たるもの、榮町西一條通りなど、實に大都會たらんとする風貌を具へて居る。

その職業別を見ると、商業が四割弱、工業が二割、農業水産業が各一割弱といふのであるから、相當實力ある發展の仕方であると思はれる。

島内商業は姑らくおき、對外輸移出入について見ようか。

明治四十二年三月から大泊は對外開港場とせられることになつた。大正十四年には出入合せて一百萬圓にものぼつたが、今日では五十萬圓内外であるらしい。

移輸出物として主要なるものは何といつても、製紙及びその原料が第一、次に海産物（鰊粕昆布など）木材などであり、輸入品としては雜貨機械類等である。

大泊の築港は、確かに一大偉觀である、突堤長さ三千三百六尺、釣鐵橋の如き橋梁部八百四十尺長蛇の如く海中に突出し、大船巨船を横付けにすることが、出來る樣になつて居る。工事は大正九

年に起し、五百八十餘萬圓の巨費を投じて昭和三年八月に完成したものであるといふ。誠に大開港場たる風容を具備して居る。

現在大泊町内の工業としては先づ第一にパルプ製造を、あげなくてはならぬ。大正三年十二月の創業であつて、カラフトにおけるこの種工場の、最初のものであるとか。王子製紙會社の經營に屬するものである。

次は酒精工業、これにはカラフト製藥會社がある。大正七年の創立、本島産のライ麥や、馬鈴薯などから酒精をとり、更に燒酎、ウイスキー、苦味丁幾等を作るといふ。

この外酒類釀造業も可なり盛んで、昭和二年度に於て、一百三十餘萬圓の産額があつたといふことである。

寒天製造も、注意すべきものである。これは一種の浮游性海藻を原料として作るもの、英國あたりまでも輸出するとか。カラフト寒天合資會社の經營で、年額二十萬圓位といふ。

水産業においては、魚類一年の漁獲高、八千三百餘萬貫、昆布は五萬貫にも達するといふことである。

さてその近郊を眺めると、最早大森林のおもかげは見られぬが、牧場としては、相當發展し得る見込もあるらしい。

殊に珍らしいものには、狐の牧場がある。嘗ては萬物の靈長たる人間をも、思ふ存分馬鹿にして或は怪火を燃やしたり、大入道を出したりして驚かし、或は馬糞を饅頭として、食はせて喜ばせたりしたといふ狐公も、文明開化には敵しかね、その靈性は何處へやら、今日は靜に牧養され、美しい毛皮を提供しつゝある。純黑のものは一枚六七百圓、普通のものでも、三四十圓はするといふ。

今日は町の東に、東洋養狐會社北に樺太養狐會社といふのがあつて、盛んに經營しつゝある。これは實に内地の何處にも、見られぬ珍牧畜である。

二六、大泊大觀（三）

大泊にも、世界一が一つはある。それは既にいつた樣に、道路が惡くて、文字通りに泥濘脛を沒するといふことである。自動車なんかが、その眞中にでもはまり込んでしまうと、進退谷まつてしまうらしい。それには、實は譯がある。併しそれを知るには、一寸此處の過去を考へて見るがよい。

話は、明治元年の昔に溯る。函館に開拓使といふものが置かれた時、權判事岡本監輔といふものが、その八月に、此處に渡つて來た。岡本は此處に來て、公議所を設置し、地方經略を始め、久春内

や榮濱等に鎭撫を置き、行政施設を始めた。これから我が國人は、次第に渡航して來て、漁業農耕採鑛等を爲し、大いに見るべきものもあつたが、此に問題は起つて來た。

北方から、かねて虎視耽々として、南進の機を窺つて居たロシアは、我が維新の內事を聞知し、好機乘ずべしとしたのか、明治二年六月、突然大泊に强行上陸し、居を占め、家を造り、我が漁業場に波止場を築くなど、傍若無人の振舞をしたものである。然し我が國人は、これを如何ともすることが出來なかつた。まこと內亂ほど、外侮を受けるものはない。これより我が國人の勢威は、萎微不振の狀態となつてしまつた。

その後カラフト問題について、種々の經緯があつたが、明治八年に、カラフトが全部露領となるや、此處はロシアの策源地、**コルサコフ**となつた。我が國は、此處に領事館をおいた。この變轉に際し、我が國人は、一時皆退去したが、翌九年よりは、また出稼漁夫が行き、明治三十六年日露戰爭前には、その數七千餘人に達し、商店なども、ロシア側の不振に引替へ、我が國人には、相當大規模なるものも出來たといふ。

かくの如き狀態の中に、**日露戰爭**は勃發した。ロシアは大泊附近の、港に面せる高地に砲壘を築き、數門の大砲を据つけて、防備を整へた。實はその中には、模型の大砲もあつたといふことである。

時は明治三十八年七月七日、我が樺太討伐軍たる、獨立第十三師團は、**原口兼濟**中將に率ゐられコルサコフ東南に上陸し、せめよせて來たのであつた。ロシア軍は僅に數發の微力なる大砲を發射したのみで、露人一流の戰略を用ひ市中屈指の建物をほとんど燒きつくして、北走してしまつた。

かくして七月末日我が軍は全樺太を占領し、九月**ポーツマス條約**において、南樺太の領有確定するや、此處は大泊として、一時全カラフトの首府となつたのである。

露領時代のコルサコフは、稍後方小高きところに、その主要部があつたが、それでは交通上、不便といふので大泊川の川口に近き濕地を、大正元年、工費五十萬圓を以て埋立て、住宅地とした。此處こそ、今日は**榮町**と稱せられ、大泊目拔きの繁華な商業地帶と、なつて居るところである。世界一の名物たる惡道路は、もと濕地であつた場所である。從つて少しばかりの砂利や、小石などを入れたところで、深い〳〵泥の中に沒し去つて、何の役にも立たぬのだといふ。

併し今日は築港も既に完成した、今やその岸壁には、三千噸級の大船數隻を、一時に橫付けることが出來る。かくて大泊は、カラフト第一の商港として、名實共に本島主要物資の、呑吐を掌つて居る。

二七、大泊大觀（四）

カラフトといふと、日本では北邊極地の樣であるが、こゝ大泊は、その緯度からいへば、實に南歐の都會に相當する位置にある、その町の樣子、港の狀況等、既にいつた樣に、內地のものとしても、誠に堂々たるものである。

更に所謂文化設備を見ても、ほとんど完全して居る。

先づその教育施設を見やう。小學校においては、立派な五つの尋常校と、堂々たる尋常高等校とがある。殊に最後のものゝ如き、敷地が四萬餘坪もあるといふ大規模のものである。

大泊中學校や、高等女學校の如き、內地の地方中等學校においては、容易に匹敵するものがないほど、完備して居る。

この外私立には、實科女學校、裁縫女學校、商業補習學校等があつて、子弟の教養に何等不足はないらしい。

日本人の行くところ、必ず其處に神社が出來る。宗教の如何を問はず、信仰の如何を論ぜず、千木かつを木の高く聳ゆる、白木造りの神々しい社殿を見なくては、どうしても落付かれないものと

見える。此處にも、亞庭神社を始め、五社が勸請せられてある。

天理教や、金光教なども、既に會堂が出來て居る。

佛教寺院も既に八箇寺も出來て居る。宗派も曹洞、淨土、眞言、法華、眞宗等一通はある。

勿論キリスト教育もある。メソヂスト教會、天主公教會等の會堂が、出來てゐる。

かうして考へると、信仰生活についても一通り不便はあるまい。

大正四年の御大典を記念する爲には、町立圖書館も出來て居る。高燥にして眺望絕佳なところに建設された瀟洒な建物は、自ら人の注意をひき、從つて入館者も多いといふ。殊に冬期沍寒の候に於ても、暖房設備が完全して居るので、愉快に靜かに、讀書の興味に耽ることが出來るのを、町民は樂しみにして居るといふことである。

若し夫れ一日の勞苦を、藝術に忘れようとするならば、劇場もあり、活動寫眞館もある。慰安を得るのにも、たいした不足はない。

以上の樣に見て來ると、生活を幸福にするあらゆる設備は、既に具はつて居るといふことが出來よう。

カラフトは、最早昔ながらのカラフトではない。少くとも大泊においては、立派な一大文化都市

を見るといへる。

日本人が來ると、氣候までがかはる。臺灣は寒くなつた、朝鮮には雨が多くなつた、とよく人はいふ。實に此處カラフトも、これから次第に暖かくなるのであらうか。

二八、樺太名稱考（一）

大泊においては、極めて僅の時間であつたが、種々なることを考へ、樣々のものを見る機會を得た。同所の敎育會からの御歡待によりて、町役場樓上にて、北邊趣味の漂ふ御馳走を受け、北海道の追分や、生粹のカラフト節などを、たのしんだことを最後として、私どもはその名も堂々たるカラフトホテル、別名北海屋といふに宿り、翌六月三十日は、更に北に向つて進むことになつた。

午前五時十分大泊を出た列車は、まつしぐらに小沼に向つて走る。窓外に展開する風物は、その森林といひ、草原といひ、內地においては、思ひもよらぬもの、面白さにうかれて、暫しの間は貪り眺めて居たが、誰かゞカラフトの名稱を、とやかくといひだしたので、それが忽ち車中の一問題となつた。

さうだ、內地においても、これは問題である、時には樺が「カバ」であるので「カバフト」などといつて、恬然たる紳士もある。然し此處の人は、さう讀まれることを、極度にいやがつて居る。何の譯だか分らないが……

それなら、一體どういふのが、正しいのであるか。

元來この島の名が、日本の文書にあらはれたものだけでも、實に澤山にある。

試みにその二三をあげて見ようか、まづ德川時代において、カラト、タライカイ、カラフト、哈喇土、空子、唐子、加羅不登、殼太、嘉樂孚土、哈良敷土といふのがある。これは音譯であらう。

北蝦夷、奧蝦夷、西蝦夷

などといふものもある。これは意味から、いつたものであらう。そして當時の北國のエゾといふのを、此處まで延長した名稱であることといふまでもない。

明治になつてから、柯太や樺太といふ文字が、使用せられることになつたとか。

序に支那の方を調べて見ようか。

唐書には、流鬼國とある。何だか恐ろしくひゞく語である。

次に元書には骨魏とある。これも感じがよくない。

明時代の書には苦夷、苦兀などゝある。これも一寸馬鹿にした意味らしい。

清時代においては、庫業、庫頁、大長島、黑龍嶼、魚皮島、大洲島、薩哈嗹、薩加連等がある。何の意味であらうか。

西洋の方に傳はつて居るものは、エレウテボーゼ、サガレン、サカリン、サハリンといふものなどがあるといふ。

以上の如くであるから、何といつてよいか、實は分らぬのである。かくては餘りに不便といふので、我が國では、文化六年には、行政的には蝦夷といふことにし、更に明治三年には、丸山作樂が此に來りし時、政府に建議して、初めて樺太と、公稱せられることになつたといふ。

二九、樺太名稱考（二）

以上の如く見て來ると、昔から「カバフト」などといつた來歷は、ない樣である。

一體何の爲めに「樺太」などと書くことに、なつたのであらうか。時は明治の元年八月、北海道十一ケ國にも、夫々漢字の名を用ゐることになつた時、この島の名稱も問題になつた。

或人は、柯は土人の舊名で、作の義である、太は大にして、間あらしむることである、この島も北海道と一つであつたのを、神が二つにしたのである、だから「柯太」と書くべしと主張した。

これに對して、この島には樺の木が多いから「樺太」と書くがよいといふ主張もあつた。

前者は、岡本韋庵の說であり、後者は、松浦武四郎氏の主張であつたとか。然し時の鍋島長官は「文字は何れにてもよし」と大きく出で、何れとも定めなかつたといふこと、岡本韋庵の樺太探險日記といふ書にあるといふ。

決定を見なかつたこの問題は、越へて明治三年に至り、またあらはれた。この時は、丸山作樂が外務大丞として、こゝに來て、先づ唐太といふ語が思ひ出された。然るにこれでは、唐人よりの移訛であるといふので、これを嫌ひ、遂に「樺太」といふ文字にしたとかいふこと、この說は松永聽劍の樺太及び勘察加といふ書に、見ゆといふことである。

なるほど、以上の如くであるとすれば、樺太といふ字は、最近になつて、偶然用ゐられることになつたといはねばならぬ。それを「カバフト」と讀むことに、聯絡あるらしい用語は、何處にも發見せられぬらしい。

實は樺太の文字を採用した當時において、かく書いても「カラフト」と讀ませて居たのだとか。然るにその後來歷を知らず、文字そのもののみを見て、讀むことにもなり、カバフトと讀みはじめたものである、といふことである。

これに反して、カラフトと讀むべきは、前回にあげた古來の名稱の中、多數の類音があるのでも、分るであらう。まして明治三年においても、唐太といふ字をあてゝ見たほどであるから、實際の名としては、これが最も適當であつたのであらう。たゞ一種の國粹感情の爲めに、聯想がわるいといふだけの理由で、樺太といふ字にしたといふ。從つて今日においても、文字に拘泥せずに「カラフト」と讀むのが、至當であらう。今日のカラフト人は、皆正しくカラフトといひ、その筋においても、かく讀むことに一定して居るといふから、最早問題はない。たゞ無知のものゝみが、今も猶カバフトなどゝいふ。

三〇、樺太名稱考（三）

樺太は、必ずカラフトと讀むべきは以上の如くにして、明かとなつたであらうが、然らばカラフトとは如何なる意味であらうか。ついでに考へて見るも、一興であらう。

然しこれには、實に種々なる解釋があつて、容易に一定しがたいらしい。

井上頼圀の越州考說といふ書においては、古事記國生の條にある。「次に兩兒島を生む」といふことを出し、それは蝦夷と樺太であるとし、カラフトは、カモイ（神）カラ（體）フト（口）である。神が二つに分けた島の義であると、してゐるとか。何だかあまりに、考へ過ぎた樣であつてうるさい氣がする。

カラフトは、空太州なり。カラは空なり、空虛なり。フトは太なり、大なり。我が國人が、此の島に來て、地勢の「空漠」なるを見て、かく名づけたのであるといふ說が、前田夏蔭の「蝦夷地東西考證」といふ書に、出て居るといふ。これも隨分こじつけの樣で、どうも信じたくない。

これ等とは別に、語原を他の民族の用語にもとめ、それからこの問題を、解かんとするものもある。その一は小川運平の滿洲及樺太といふ書にある、蒙古語說である。

それは蒙古語の土城の意義から、來て居るといふのである、蒙古語に於て、土城は「カラホトン」である。「カラ」は黑、即ち土「ホトン」は城である。大陸においても、客喇和屯といふ地名は、多數にあるといふことである。

思ふに蒙古人が、その勢力を伸長して、此處にも來り、「カラホトン」の名稱をも殘し、後轉訛してカラフトとなつたのであらうといふ。これも、あまりに詮義がすぎて面白くない。

松浦北海の蝦夷年代記には、オロツコ語說がある。オロツコ語にて「カラフト」とは蝦のことをいふ。思ふに、この島の南方半島の出入して居る有樣が、エビの腰を曲げて居るのに似て居るから、

かくいふのであらうといふ説である。

これはまた隨分面白いが、あまりに奇妙な感がある。

栗本鞄庵は、オロッコ語こそ、日本人の唐人の義であらうといふ。オロッコ人は、カラフトといふ語を、南部のアイヌの名稱とでも思ひ、一方アイヌの鬚の多いことから、エビがそれに似て居るとし、遂にこれをカラフトといつたのであらう、といふ説を出して居るとか。

それはどうでもよい。とにかくカラフトは。唐人の義であるとの主張は、**高橋景保**の北蝦夷考證などにあり、現在我が國の學者などの多くが、信じて居るものであるとか。思ふにカラフト人が、北海道などに、漢製品を移し、松前人などが、それ等を唐人即ちカラフトといひたるに、基くのであらう。東北人はフとヒとを誤るのが通例である。

三一、樺太名稱考（四）

樺太は、なるほど必ず「カラフト」と讀むべきこと、「カバフト」などゝ、讀んではならぬことは、以上のしらべで、一應分ると思ふ。それからカラフトは、唐人の義であることも、今日においては先づ定説と思つてよいことも、これ以上いふ必要はあるまい。

私は序に、此に「**サガレン**」といふ語をも、問題として見たい。その原據についても、これまた様々の説があるらしい。

まづその語原を、遠く魯語にもとめるものがある。**松永經劍**氏は、これは魯語にて、「**サハリン**」といつて居るのから、轉じて「**サガレン**」となつたものといふ、然し或は反對に「**サガレン**」がもとで「**サハリン**」となつたのかも知れぬ、といふ疑ひも起り得る。

次に、近くアイヌ語に、求める説もある。例の英人**バチエラー**の如きが、それである。その説によれば、サガレンはサハレンの轉訛である。土人は、悉しくは「**サハレンモシリ**」といふ。「**サハ**」は平原、「**レン**」は波の起伏する有様、「**モシリ**」は國の意であるといふ。要するに、高山なく、地勢が波狀に起伏して居ることを、意味するといふのである。これも解説としては、面白い様でもある。

第三には、滿洲語説がある。**近藤守重**の説であるといふ。それによると、**盛京通誌**といふ書に、黑龍江即薩哈嗹者黑也とある。「**サガレン**」は、實にツングース語の黑を意味する。それで黑龍江は「**サガリンウラ**」といふよしである。

これにも、誠に尤もの道理がある様である。

元來サガレンといふ名稱は、支那や西洋に、早く傳はつて、日本には、却て支那西洋から、傳はつて來たのである。この點に注意して、說を爲すものがある。

アイヌは、樺太の南部に、住んで居たものである。從つて大陸よりは、我が國の北方との交通が、頻繁であつた筈である。然るに我國に、直接傳はらなかつたといふことから考へると、これはアイヌ語でないといはねばならぬといふのである。

以上の如く考へると、ツングース語說が、最も信賴すべきものとなるであらう。

黑水といふ名稱は、すでに隋時代からあつたといふ。思ふに樺太が、黑龍江口近くにあつた島であるので、それが遂に名稱となつたものであらう。

魯語のサハリンとは果して如何なる意味であらうか。これについては、あまり學者の研究も聞かない。或は却つてツングース語から、魯語となつたものであるかも知れぬといふ說すらある。

三二、樺太名稱考（五）

カラフトやサガレンは、以上の如くであるが、次に他の名稱について見よう。

唐書にある流鬼國といふのは、世界最古の樺太の名稱であるといふ。これはギリヤーク人が、この島を「リーア」と稱し、其處に住めるアイヌ人を「クギ」または「クエ」といつた。流鬼は即ち「リーアクイ」であらうといふ說が、廣島大學の山下寅次教授によつて、唱へられて居るとか。このギリヤーク語が分ると、更に樺太の別名たる、苦夷、苦兀、庫業、骨魏、庫頁等の語原も、それであることが、容易に分るであらう。

この外、大長島といふのがある。これは形狀から、いつたものであらう。大洲島といふのもある。これも大體同樣に、地理的に起つた名稱であらう。

魚皮島といふ珍らしい名もある。これは住民が、魚皮を以て、衣服や家屋を作つた習慣について名づけたものであらうといふことである。

更に、黑龍嶼といふのもある。これはその位置が、黑龍江口にあるからの名稱であるとか。

傳ふるところによれば、佛蘭西古版の地理書には、不思議な名がのせられてあるとか。それは「エレウテボーゼ」といふのである。

秦貞廉といふ人の、北蝦夷國說といふ書によると、「エレウテ」は蠻語で、物を閉塞するの義であり、「ボーゼ」は島である。この島が、マンコー川即ち黑龍江の河口にあつて、その流れを閉塞する形となつて居たので、かく名づけられたものであらうといふことである。

以上私は、カラフトの名稱について、樣々の說をあげて來た。かうしたことも、うるさいと思へばいやだが、一寸念を入れて見ると、これにも面白い興味も湧く。

小沼へ走る列車の中、不圖話が出たことを思ひ出して、自分の興味にかられるまゝ、書きつらねて來た。

この研究は、主として豐原中學校の、西尾誠氏の調査により、時に蛇足を加へたものである。此に同氏に、謝意を表する次第である。

三三、小沼農場の一瞥（上）

大泊を出た列車は、二時間にして豐原につく。流石に全島の首府だけあつて、ステーションも賑やかであるが、私共は更に小沼へと急ぎ、凡そ半時間にして着いた。

小沼といつても、まだ知らぬ人が多い。實際いつて見ても、たいしたところでない。たゞ此處には中央農業試驗場があるので、名高いのである。私共が態々此處に來たのも、全くこの農場一瞥の爲めであつた。

農場はステーションから、徒步約二十分間位のところにある。態々來は來たが、この道に不案內な私は、たゞ場員の說明を、傾聽する外はなかつた。

三浦村長の歡迎の挨拶がすむと上野技師の畜產の話が始まる。**カラフトの畜產**は、牛馬羊等大體北海道のそれと、大差はない。尤も狐やトナカヒの如き動物の飼養は特別のものである。

牧草の收穫は、可なり良好であり、本州東北地方よりは却つてよく、北海道に次ぐ狀態であるといふ。たゞ生產費の高いことが、最大缺點であるらしい。それは新開地の常として、勞力に乏しい爲めに、人夫一人一日二圓四十錢も、出さねばならぬ始末だからである。

羊は目下二種類について、試驗して居る。その一は、シロブシヤである。支那の雜種で、鼻の黑いものである。その二は、メリノといふ。品質よきものである。その結果は有望である。

狐の牧畜は面白い。これには在來種と、西洋舶來種とがある。前者は一度にたゞ一匹の子供を生むのみで、その性質も荒い。爲めに子を產みて後は、暫く夫婦別居させねばならないといふ。

然るにこれに反して西洋種は、雌雄非常に睦まじく、雄はよく雌を助けて、子供の生育をはからしめて居る。雌は實際育兒を專門にして居る狀態である。產兒の數は、一度に四匹位である。時としては六匹、極めて稀に八匹も生むことも無いではないといふ。何だか、かうした獸までが、それ〴〵特別の國民性がある樣に、思はれるのも面白い。

狐の夫婦の値は、八十圓位から千圓以上のものまである。最も優秀なものは銀黑狐といふもの、身體は黑色で、たゞ尾の尖端が、白くなつて居るものである。一四二百五十圓位から千圓位まである。

食料は、魚、パン、牛乳等である。一日に二回宛、與へるとか。皮は一月頃にとらねばならぬ。それは主として生皮のまゝ、ロンドンに送るといふことである。

子供は二ヶ月にして、親からはなし、滿一年にして、親となるといふことである。

三四、小沼農場の一瞥（下）

狐飼養の話も面白いが、私共は次に農業一般について、場長三宅博士から、更に各方面の狀況を聞くことにした。

この中央試驗場は、今正に計畫實行中である。その研究部門は、農業、畜産、林業、水産の四つである。追つて工業部をも、加へることになつて居るといふ。

耕地は一千五百町歩、造林三千町歩、外に自然林六千町歩を、所有して居るとか。

大體の氣候をいふと、夏季は東京も札幌も、共に攝氏三十度位であるが、カラフトはこれに比して非常に低く、大泊の如きも、十八度位である。從つて農業においても、それに適する樣に、種々研究を試みつゝあるといことである。

果樹の見るべきものは、ほとんどない。尤も林檎など南海岸には出來るところもあるとか。葡萄や杏などは、出來るであらうといはれて居る。

蔬菜類としては、人蔘、牛蒡などが出來る。キウリ、ナス、トマトウ等は、特別のものゝみが出來る。然しアスパラガスや、イゴチなどは可なりによく出來るらしい。

牛はホルスタイン種、二千七百圓の値のあるもの、馬はアングロノルマン種、三千圓もするものが出來たといふ實例もある。

次にその狐の牧場といふのを、實地に見る。人間を思ふ存分馬鹿にするといふ怪物の正體も、かうして見れば何でもない。猫より少し大きい位のあはれな獸、二間四方位の金網の檻の中に、雌雄二匹宛入れれられ、生殺與奪の權は、全く人間に握られて居るのである。その皮一枚が千圓もするとか。英人は、却つて死んだ狐に馬鹿されて居るのであらうか。それよりも更にロンドンあたりから、稀代の貴重品とばかり逆輸入をして、いゝ氣になつて居るといふ日本の誰れ彼れこそ、一層の愚物に相違はない。

農場を一巡すると、こはまた如何に、六月三十日の今日此頃、茄子の莖の長さが、やうやく一寸位しか延びて居ない。麥も僅か三寸位。あはれに細い葉を、辛うじて土の上に、伸ばして居る狀態である。

菫の花の盛りは、眞夏であることを聞いても、その大體を想像することが出來るであらう。

それでも、一般に麥類、豆類の收穫は、その量においても、質においても、北海道に比して、遙色なく、殊に燕麥、馬鈴薯の如きは却つて遙かに優つて居るといふことである。

米は近年各所に、試作せられつゝあるが、未だ經濟的に、生産し得るまでには進んで居ない。

亞麻や甜菜なども、本島に適することは、最早明かになつて居る。

元來本島の農牧適地は凡そ七十八萬八千町歩、內農耕適地四十七萬三千町歩、放牧適地は二十二萬五千町歩もあるといふ。然るに現在においては、農家戸數は僅に一萬六百、その爲めに處分した面積八萬五千七百餘町歩、內耕作せられたものは、實に二萬七千町歩、即ち農耕適地の六分にしか、達して居らぬといふ。今後大いに發展の餘地あること、この一事からしても想像し得られる。

三五、知取まで

小沼農場を一瞥した一行は、近傍にある舊露人部落を見て、直に豐原に歸り、それより西海岸に出で、北海道に渡る豫定であつたが、然しそれでは、實に九仞の功を、一簣に缺くものといはねばならぬ。

カラフトの特徵は、實にこれから北方にある。カラフトを知らんとするものは、更に少くとも敷香までは行かねばならぬ。私はこれから、北邊極地の一人旅を、決心したのであつたが、偶々熊本第二師範の長谷川校長と、共にすることを得たのは幸ひであつた。

午前十一時五十三分に、小沼を出た列車は、珍らしくも、廣々とした草原の間を進むこと一時間ばかりで、落合といふところにつく。樺太廳鐵道は、これから海岸の榮濱に出でて、終點になつて居る。此處も一勝地として、知られて居るところである。

落合は、地方の一大名邑、人口一萬二千六百餘あるといふ。こゝはもとガルキノウラスコエといふむつかしい名の僻地で、僅々十數戸の一寒村に、過ぎなかつたところである。然るに大正六年、富士製紙會社が、工場を造つてから、急激に發展し、忽ち堂々たる市街地を形成し、今日ではカラフト第五の都會となつて居る。

北邊各地、殊にカラフトにおいては、製紙會社は、實に偉大なる勢力を有し、その發展するとこ

ろが、やがて都會を形成する。從つて會社は、あだかも封建大名の如き勢威を、示して居るのである。その一好例は、此處でも見ることが出來る。

尤も落合の發展は、たゞそれのみではない。この附近一帶は、極めて肥沃なる農耕適地であり、加ふるに奥地には、豐富なる炭田を擁してゐるので、その將來は、刮目に値するものがある。若し農耕が十分に開け、炭坑が更に盛んに採掘せられる樣にでもなつたら落合の發展は、實にはかり知ることの出來ないものがあるといはれてゐる。

私は此處を、悉しく視察の機會をも得ずに、直に北へ〳〵。

鐵道は、これから樺太鐵道株式會社の經營線となつて、知取まで續いて居る。

列車は、刻一刻奥へ〳〵と、タライカ灣岸を進んでいく。處々に來往する森林や原野は、流石に內地にはなき樣相のもの、それでも見渡す限り燒けたゞれ、無數に聳ゆる大木の黑こげとなりて、あはれな姿をさらして居る大森林の遺骸が、これまた長く續いて居るのを見ると慨嘆にたへなくなる。故意か過失か知らねども、かうした天與の財寶を、一朝にして焦土と化してしまつたことは、返す〳〵も遺憾である。

北邊特にカラフトにおいては、山火事は、實に恐るべき至大の災害を來して居る。

かくして知取についたのは、午後九時であつた。千歲屋といふに宿泊。

三六、奥へ〳〵

知取町は人口一萬六千餘。實に本島第三の都會である。東海岸の要地にして、現在鐵道の終點である。

ここもまた一僻村に過ぎなかつたが、大正十三年、富士製紙會社の工場を設置以來、急激に發展したのであるといふ。今日においては、あらゆる文化設備が、ほとんど完成して居り、何等の不便も不安もない。

これから奥地には、最早鐵道はない。それでも敷香まで二十一里の間、自動車が通じて居る。

七月一日、內地では正に酷暑の候、然しこゝカラフトの奥地においては、吹く風が肌寒い。朝まだき、知取神社の高臺から、全市を展望した時などは、寧ろ寒風膚を刺すの感があつた。避暑も實に此處まで來れば、完全だ。

この附近もまた大森林であつたが、山火のために全滅したのだといふ。今は町の背面一帶海岸に副ふて蜒々として起伏する裸々たる丘陵にすぎない。たゞ製紙會社の煙突のみが僅にその麓に林立

して居る。

敷香に向ふ自動車は、午前八時半に出發、十時頃新問附近の大森林にさしかゝつた。實に大森林である。中天に聳ゆる無限の樹木が、見渡す限りコムモリと繁つて居るさま、實に一大偉觀であるなるほどカラフトに來て、これを見なければ、來た甲斐がないとすら、密に感じた程であつた。文字通りに晝猶暗き、千載斧鉞を入れざる原始林である。

それにしても、此處にもまた、山火事の慘憺たるあとが、處々に見えるのは、如何にも殘念に思はれてならない。

午前十一時半に、泊岸（トマリギシ）といふところに着く。この間特に山火の災の甚大なるものがある。

此の附近には、京都帝國大學の演習林が、あるといふことである。こゝから二時間ばかりで、內路といふところにつく。この間にも、大森林がある。延長實に三里餘。道路はその中を貫いて、遙に細く通つて居る。

內路から少し進むと、立派な道路は次第になくなつて來る。

こゝにおいて自動車は、まゝよとばかり、勇敢にも干潮をはかつて、海岸の荒磯を突進する。そして波打際を、まつしぐらに、敷香に向つて走ること三里。時々打ちょする磯浪のために、車輪を洗ふこともあるのは、誠に壯快である。

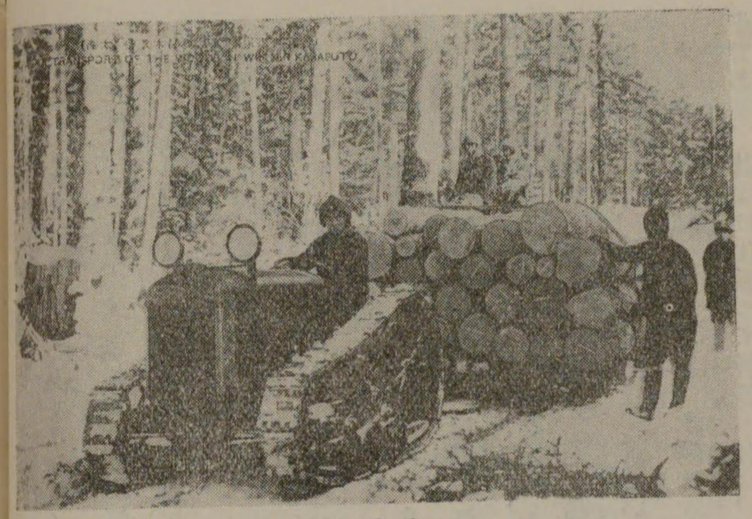
此に來ると、最早大分奧地であり、偏地である。海岸のところ〴〵に、カラフト土人の珍らしい小屋もある。こゝまで我が同胞が發展して居ることを考へると、また一種の心强さを、感ぜずには居られない。

三七、千古の森林

知取から奧地に進むと、さすがにカラフト、內地とは異なつた風物が展開する。交通機關も、また十分に備はつて居ないので、自動車を驅る外はない。それでも內地人の進出は、極めて著るしきもの、この間においても、新問、泊岸、內路等の名邑がある。建並ぶ家々が、多くは白木の香も高き新造であるのを見も、今正に急速に發展しつゝあることが分る。

沿道において、第一の壯觀は、既にいつた樣に、何といつても天然大森林である。

カラフト廳の調査によると、本島日本領全部の森林は、その面積實に二百五十四萬六千九十三町歩であり、其處に生繁つて居る木材は、凡そ七億五千萬石にも達するといふことである。



カラフトの森林及び木材輸送

樹種は約百二十種、内喬木が凡そ五十種ある。その中最も利用價値のあるものは、エゾマツ、トドマツ、グイマツ、イチヰ、シラカバ、ドロヤナギ、ハンノキ及びタモ等である。これ等の中最も多いのは、トドマツ、エゾマツにして、全體の八割を占め、山腹原野の大部分は、これであり、山の中腹から、次第に白樺が多くなり、頂上は、全く白樺の純林となつて居るといふことである。

歴史を尋ねると、露領時代においては、これに對して何等の施設をもして居ない。實際彼れには、シベリアなどに、眞の無限の大森林があるので、問題にもしなかつたのであらう。

明治三十八年、邦領となつてから、研究に調査に、伐材に造林に、種々たる施設が試みられることになつた。今日にては、毎年凡そ一百五十萬石内外宛、官營斫伐が行はれつゝある。然しこの外に、製紙會社などが、年々極めて大規模の伐材を、爲しつゝあるのである。

今日見ゆる大森林は、皆千古斧鉞を入れざる自然林であるといふが、伐材と山火と毛蟲との爲めに非常なる慘害を受け、爲めに次第に造林の必要が起つて來た。現在カラフト廳においては、種々なる實驗を行ひ、播種造林や植樹造林などに、夫々或る程度の成功を、おさめて居るといふことである。

東京、京都、北海道、九州各大學においては、各數萬町歩の地積を各所に相し、演習林を經營して居る。

三八、恐ろしい山火

カラフトの林業にも、種々なる障害がある。その一は、文明人にあられもない、森林盜伐といふことであるとか。次に勝手に放牧することであるといふ。更に甚だしきは、無斷開墾であるとか。これ等の爲めに、大森林も、年々殘害されていく。止むなく今日は全土に、二百六十餘名の森林主事といふものをおきて、監視せしめつゝあるといふ。

三八、恐ろしい山火

併しそれにも増して、絶大の慘害を與へるものは、山火と毛虫である。カラフトの森林地帶にいくと、道路の兩側、雜木の小枝などに、無數につけられて居る赤い札が、ヒラ〳〵と風にひらめいて居る奇觀がある。それには、簡單に

山火注意
育つは百年燃やすは一時

などといふ白字が、染めぬかれて居る。これは心なき人々の、不注意に投ずるマツチや卷煙草などを、警戒せしめる宣傳である、カラフトの山地にいくと、何處にもこの山火の慘害の、如何に甚だしいかを實證する枯木燒土が、見ゆる限り、野から山、それから谷と、どこまでも續いて居るのに驚く。

その原因については、とかくの説もある。なるほどマツチや煙草で、起るのもあらう。併しそれには、もつと深い事情のあるのも、無いではないとか。盜伐をごまかす爲めの、一つの手段であるなどといふ不都合な事由をあげるものもある。

また別に、不平不滿の徒が、腹いやせにするいたづらであるなどといふ説を、出すものもある。併し、果して如何にや。

いづれにせよ、その最も甚だしかつたのは、昭和三四年の頃であつたといふ。殊に昨年の五六月の交には、カラフト全土、至るところに焚烟濛々天をこがしたといふことである。なるほど、今その殘骸が、至るところにある。

この生々しい常綠樹が、よくも燃えるよと、一寸不思議に思へぬでもないが、實は一旦火がついたら最後、俄然暴風吹きおこり、火焰は高く天をこがし、火の子は無數に飛び散つて、枝から枝にと渡りゆき、自動車を以ても、逃げのびるにむつかしいほどの速さで進行するといふ。

この絶大なる猛威に對しては、人間の微力、全く如何ともすることが出來ぬ。ただなるがまゝにまかせて、おく外はないといふことである。

この山火は、數日數十日もつゞく。時には、ゆつくりと冬ごもりをして、翌年またそろ〳〵と、燒け始めることすら、あるといふ。

それは冬になると、カラフト全土が、雪に覆はれてしまふ。さすがの猛火も、この時ばかりはヂツト勢ひをひそめて、雪の下のツンドラなどをブス〳〵燃やして居ながら、越年する。さて翌年となり、春が來て雪が解け、若草が萠え出す頃になると、火もまたあちらこちらから、赤い舌を出して再び山野を嘗めまはるのだといふことである。

三九、毛虫の威力

森林の大敵は實に山火である。併しそれに劣らず、大害を與へるものに、松毛虫といふのがある。カラフト廳においては、嘗て豊原の近郊に、面積二千二十七町歩の試驗林を設定し、大正元年以降種々なる研究調査を試みつゝあつた。然るに大正十年に、火災と松毛蟲との爲めに、ほとんどその全部を侵害せられ、試驗場は、遂に廢止せられてしまつたといふことである。

松毛蟲の發生したのは、大正五年頃であらうといはれて居る。併しその喰害の、世人の注意に上つたのは、大正八年であり、最も猛烈であつたのは、翌大正九年以後のことであるといふ。

眇たる無力の小蟲、捕へて成敗するに、何程のこともない筈であるが、まこと數は實に力である。これもまた無數の大群に對しては、實際人間の靈知を以てしても、如何ともすることが出來ぬといふことである。

當時これを驅除する爲めに、種々なる方法が行はれた。誘蛾試驗を行ひしに、相當の効果があつたといふので、大正十年及び十一年の兩年に亘りては、焚火誘殺法を實行して、その防遏に努めたといふ。

一方松毛蟲に對する研究調査を行ひ、その十三年には、樺太松蛀蠹に關する調査をも、公にしたといふことである。

併しながら、自然の猛威に對しては、人間はどこまでも微力である。かくては遂にカラフト全土の森林が、悉く蟲害に枯死してしまうかも知れぬと思はれたが、天地の妙用、自然を制するものはまた自然である。大正十二年は、その害毒いよ〳〵絶大であらうと苦慮せられたが、豈はからんや、この年から、次第に威力を減じて、さしもに猛威を逞しうした怪蟲も、いつしか自ら全滅してしまつたと云ふことである。

カラフト廳の調査によると、この時蟲害を受けた針葉樹木は、實に五千百八十六萬石に達するといふことである。

かくの如き自然の害毒に對しては、我々はたゞ科學的研究の結果を善用して、微力を盡すのみであるが、山火に對しては、一人々々の注意によつて、全く豫防することの出來る性質のものである。これは必ずしも、遠きカラフトのみの問題ではない。此處内地においても、刻々我等の念頭に、印銘しておくべきことである。

それにしても、森林は一朝一夕にして、出來るものでない。さる人々の心配する樣に、あまり遠

からざる將來に、木材飢饉が來ぬとも限らぬ。今日にても心なきものは、頻にアメリカあたりから輸入せしめつゝある。屋敷の隅、道の側、どこにでも、たとへ一本でも植えておくといふ心掛が、極めて必要であらう。

四〇、敷香から（一）

知取を出た自動車が、敷香についたのは午後の二時であつた。かうした北邊極地、固よりろくな宿屋もないものと、かねて覺悟はして來たが、意外、處は可なり立派な大都會、人口三千五百もある。それには、山縣屋といふ堂々たる、内地においても、先づ上等の部類に屬する大旅館があり、心地よく休憩することが出來た。

敷香は、官邊では「**シクカ**」と讀むと頑張る。併し普通は、誰でも「**シスカ**」といつて居る。これが舊來の名であらう。然らば、敷香などと、まづい當字をするのが惡い。志須加とでもしておけばよかつたのにと、いらぬ心配までもしてやる。

かうしたところ、固より一人の知己もない私は、あつかましくも支廳のお世話になり、官用小舟に乘つて、幌内川に浮んだ。流石にカラフト第一の大河、汪々漫々たる水流は、數町の河幅を爲して、**タライカ**灣に注いで居る。

この川は年々百三十萬石の木材を流すといふ。現に今も猶兩岸には、山の樣に木材が積まれてある。

それよりも面白いのは、漁獲である。この川は、冬は鮭、夏は鱒で有名である。何れもシーズンになつて、それ等が上つて來る時は、潑溂たる無數の大魚が、水の流れをせきとめるほど、こみあつて來るといふことである。それでも、内地人に漁獲を許すと、根絶やしにとつてしまふといふので現在は土人にのみ許して居る。

今日も**ギリヤーク**人と**オロツコ**人とが、小さい網を以て魚をとつて居た。**オロツコ**の酋長**ワツシライ**、**ギリヤーク**の酋長**桃太郎**との二人が、總大將であつた。その容貌は、内地人によく似て居るが、少し物足らぬところがある。

河は淺くて膝まで位、網は三間に五間もあらうか、その一つに、十五六人が一緒になり、無雜作に引つぱりまはして、上げて見ると驚くべし、長さ三尺もありさうな鱒が、五六十匹も銀鱗をひらめかせて、パタ〳〵はねて居るのだから、愉快である。併しその一匹の値は、七錢位といふから、これは又驚かざるを得ない。内地であつたら、二三圓はするであらうに。

「今日はいくらとつた？」

「もう、大抵よからう」

と、案内してくれた役人がいふと、彼等は靜かに漁獲をやめる。おとなしいものだ。官憲では、彼等に對しても、魚族保護のため、大體の制限をつけて、漁獲を許して居るのだといふ。土人はまたこれによつて、一年の生計を得さへすれば、よいのだといふことである。とにかく、のんびりした狀景である。

河の彼岸には、土人の家が十數戸もある。それには大きな犬が、いく匹も居て、しきりに吠へかゝる。氣味がわるいこと。家の周圍には、魚皮や獸皮が、いくつも日に干され、異臭を放つて居るのも珍らしい。

家は割合に氣のきいた文化住宅めいたものと思ふと、これは官憲が作つて、夏の漁期に、彼等に貸してやるのだといふ。土人は、冬は山に入り、夏は此處に來て、一年の生計費をとつて行く。原始生活の、次の生活位の程度であるらしい。

四一、カラフトの土人

敷香附近には、あらゆるカラフトの土人が居る。もと此には、五種の土人が居つた。即ちアイヌ

カラフト土人（オロッコ）

四一、カラフトの土人

ギリヤーク、オロッコ、キーリンとサンダースである。この中サンダースは、生存競爭にたへず、何時しか滅絶してしまつた。その他のものゝ昭和三年における人口は、次の如くである。

	男	女
アイヌ	七四〇	七九四
ギリヤーク	五六	五五
オロッコ	一四四	一五四
キーリン	二五	二五

總計一千九百九十三人である。

アイヌ人は、嘗てはカラフト全體に住み、南方は我が九州まで來てゐたので、一時はほとんど我が大八島國を、支配してゐた觀があつた。今日においても、南カラフトのほとんど全部にわたり、處々に部落をなして

ゐる。文化においても、遙かに他の土人を凌駕して居り、他からも、最も尊敬せられてゐるといふことである。

我が國が領有當時においては、彼等は海岸や河畔に勝手に散在してゐたが、かくては保護上便ならずとあつて、大正十年より十二年に至る間において、東海岸五箇所、西海岸四箇所に、少部落を爲し、集團生活をせしむることになつた。

彼等も物質文明の普及につれて、衣食住の激變や、生活上の壓迫や、酒精分の過飲や、殊にまた花柳病の傳播等になやまされて、その體格が次第に劣弱となりつゝあるとか。劣敗民族の末路、またあはれむべきである。

ギリヤークは、太古において渡來したアジア人の殘存せるもので、幌内川流域に住んで居る。彼等は、不思議にも近親結婚を嫌ひ、好んで他民族と雜婚するからでもあらう。その體格も、アイヌとは反對に、漸次に良好となり、よく困苦にもたへて、活動し得るといふ。その全數は僅に一百に過ぎないが、その將來は、却つてアイヌなどよりも、有望であるともいはれて居る。

オロツコ、これはカラフト第二の大民族であるが、併し、一般に無智朦昧、かつ怠惰である。のみならず、同族中内訌を起し、互に惡み合ふ惡習があるといふ。彼等は、トングス族に屬し、支那においては、渤海、金、清等の國家の建設者となつたほど、優秀なるものであつたが、今は其俤だにない。

彼等は、幌内川流域に住み、馴鹿を飼養し、各地を放浪して居る。一、二月の頃は、山に入りて鹿や貉を狩り、三月から、五月にいたる頃は、海岸に來り、海豹などを捕へ、五月から八月までは鱒や鮭をあさつて居る。

彼等は三、四歳頃より、煙草を吸ひ、五、六歳頃から酒を飲む。

キーリンは、僅か四十二人に過ぎぬが、支那文明の感化を受けたる爲めか、他種族に比し、文化の度も高く、快活敏捷にして、偏見少く、アイヌ、ギリヤークの如く沈鬱ならず、オロツコの如く卑屈に陷らず、性情愛すべきものがあるといふ。

四二、ツンドラ（一）

土人部落のある附近には、有名なる**ツンドラ**が立派にあらはれてゐる。

ツンドラといふものは、素人には、土やら草の根やら、わけの分らぬブカ〳〵したものである。表面上層は、腐植土で赤褐色であり、下層は泥炭層で、黑褐色になつて居る。

その厚さは普通三メートル内外であるが、處によつては、六メートルもあることもあるとか。

ツンドラの下には粘土層がある、從つて表面にある水は、地下水と全く聯絡がない。それで前者は雨水で、腐蝕酸を含有して居るけれども、無機養料、殊にカルシウム鹽に乏しい。かうした特殊の事情があるので、それに適應する植物でなければ、ツンドラの上に生育することは、出來ぬと云ふ。

此處に最もよく繁茂するは、「**みづごけ**」である。このものが割合に氣溫の高いところで、他の障害もなく、旺盛に繁茂したゝめに、泥炭層が出來たのであるといふ。

この外、つるこけもも、ひめつるこけもも、くろまめのき、うらしまつゝじ、ほうむいつゝじ、ほそばいそつゝじ、かんば類、かんからん、さぎごけ、はなごけ、もうせんごけ、こばのえーらんたい、はひまつ、うしのひげ、などいふ植物も、生育するといふ。今一々枚擧することは出來ない。

ツンドラ地帶にある**樹木**としては、カラフトマツ（ぐいまつ）、はひまつ、くろまめのき、ほそばいそつゝじなどであるといふ。何れも小さい灌木で、高さ二メートル以上になるのは、稀である。

尤もぐひまつは、稍大きくなるが、それでも直徑七センチのものゝ年輪を調べたところ、九十七で、高さは半メートルしかなかつたといふ。半メートルのびるのに、凡そ百年もかゝるといふのだから驚く。

一般に樺木科に屬するものは、大木となるのであるが、ツンドラに生育するものは、極めて小さい。ほろないかんばは、高さ五六寸、葉は碁石位、ひめかんばは、高さ二三寸、葉は直徑一ミリ前後である。ツンドラ地帶においては、何といつても「みづごけ」が、最も繁茂する。莖の長さ二メートルもあるものもある。尤もその下部は腐蝕し、次第に炭化する。

この外、もうせんごけ、ちしまもうせんごけ、きつねすげ、さぎすげ、わたすげ、となかいさう、からふとゆきざゝ、などといふ植物は、非常な勢ひで、繁つて居るといふ。

四三、ツンドラ（二）

さてこの上に生活する動物はといふと、有益なものとしては、となかいなどが居る。それは地衣類の植物を、食料とするからである、この爲めに、ツンドラ地帶は、放牧地とすることが出來るといふ。

併しかうした地帶に、最も猛威を振ふ有害なものは、蚊の類であるといふ。至るところの腐敗し

た水溜には、無數のぼうふりが居り、それから、いくらでも發生する。そして曇天または雨天などに、この地帶に入ると、猛烈に攻擊して來るとか。全身を布などに覆ふても、なほ十分に防ぐことは出來ぬといふ。

これ等の蚊は、平生は植物の液汁などを吸つて生きて居るが、それよりも彼等の最大好物は、哺乳類の鮮血である。

ツンドラ地帶は、以上の如く、極めて荒凉たるものであるが、それでも必ずしも、利用の方法がないではない。となかいの放牧地とすることの出來ることは、上述の通りであるが、更にツンドラ植物を利用して製紙、染料、燃料、防寒具、などを作ることが出來るといふ。殊にみづごけなどから、紙をつくることは、ドイツなどでは既に研究が出來て居るといふことである。

くろまめのき、がんからん、こけもも、つるこけももなどの實は、食用に供することが出來る。何れも七月末から、八月初めに成實する。

くろまめのきの實は、櫻桃の實位の大きさで　西洋葡萄酒に類した風味があるといふ。がんからん（コケノミ）の實など、非常に多くあるも、未だ利用されずといふ。

こけももの利用は、最も發達し、砂糖漬、フレッブワイン等が、作られつゝある。

ツンドラ地帶は、所謂奥カラフト、即ち敷香附近から、北の方に多い。即ち幌内川及びタライカ湖沿岸一帶から、東にのびて北知床半島にわたり、二十萬町歩にも、達するといふことである。

この廣漠たる地域は、從來ほとんど利用されなかつたが、カラフトの富を開發する爲めには、確に一大問題たるに相違ない。

ツンドラといふ言葉を聞くと、我々には、直に千古の氷結した地層が思ひ出される。北歐の所謂ツンドラは、一年中大部分は、さうであるらしい。カラフトにおいても、幌内川上流にいくと、地表下は、やはり萬年氷にとざされて居るとか。現に私どもの見た土人部落の、井戸の中を見ると、眞夏の頃であるのに、大きな氷解が、浮いて居つた。なるほど地上の氣溫も、華氏六十度であつた。夏服では、一寸寒い。時正に昭和五年七月一日。

四四、敷香から（二）

土人部落を一瞥した私共は、再び幌内川を渡つて敷香に歸つた。ツンドラの下から流れて來るからでもあらう。その水は支那の川の様に、常に濁つて居る。若し澄んで居るならば、無數に居る魚群の勇ましい行列なども、見ることが出來るであらう。とにかく川幅の十町餘もあらうといふとこ

ろその一隅に、小さい網を一寸入れただけで、いくらでもとれるのだから痛快である。

折から案内に來てくれた、大和校長に導かれるまゝ、次に敷香小學校を見る。まことに堂々たる建築、それに十分の設備がしてある。北邊極地に、かうした立派な學校があらうとは實際思ひもよらぬことであつた。

殊に鄕土室ともいふべきものが面白い。この附近における主要なる地理的博物的の資料が、豐富に蒐集されてある。

なるほど何處も同じ皇天皇地、かうしたところにも、愉快に教育に從事し行ける便宜は、十分にある。

記念のためにもと、とある店にいつて、寫眞などをあさつて居ると、不思議、氣溫が俄然として低下し、一種肌をさす樣な、寒さを感じて來た。店では、いざとばかりに「ストーヴ」に火を入れる。それを取圍んでの雜談、さながら嚴冬の候の氣分が湧く。

窓の外を見ると、天地は灰色の霧にとざされて、たゞ濛々。此處敷香に於ても、この霧が時々來るといふ。その時には、いつでも氣溫が急に低下する。平生でも油斷はならぬ。爲めに室內には、ストーヴが常に据つけられてあるのだといふ。

嘗て宗谷海峽において襲はれたのも、この霧であつた。同じ霧でも、ロンドンのそれには別に寒風が伴はなかつたことなど、坐ろに聯想せられたのであつた。

霧は間もなく晴れた。從つて氣溫もやゝ回復したが、それでも猶肌寒い。內地においては、正に酷暑の候であるのに、此處では、華氏六十度に過ぎない。實に陽春四五月の候の趣がある。花もまだ十分咲かない。

宿に歸ると、室內にはチヤンと防寒設備が出來てゐる。大きなたんぜんを着て、火鉢を引きよせてといふ圖である。とても夏の氣分にはなれない。避暑も此まで來れば、いよ〳〵徹底的だ。

町では、今日が丁度、町制實施滿一ケ年に相當する記念日とあつて、樣々のお祝ひをする。軒頭に掲げられた國旗の姿も、何となくいさましい。その間を、樣々の假裝行列などが通る。歌もあれば、はやしもある。時には、くだまく醉ひどれもある。正に內地そのまゝの、御祭さわぎである。かうしたものを見て居ると、數百千里を隔てた、カラフトなどといふところに、來て居る樣にも思へない。

四五、敷香から（三）

犬橇

此處まで來ると、何といつても北邊極地、我が國としては、最寒の地である。

その氣溫を見ると、次の如くなつて居る。

（一月）　最高零下一三、九度（攝氏以下同）　最低零下二三、六度　平均零下一八、七度

（七月）　最高一八、三度　最低一二、四度　平均一五、三度

（一年平均）　零下〇、三度

これは昭和四年、敷香觀測所の調査である。

一月は、此處においての平均最低、七月はその最高の月である。最高といつても、平均華氏の六十度內外に過ぎない。とにかく年平均が、零下であるから、思ひ半にすぐるものがあらう。

併し寒いけれども、それに相應する設備があるから、何でもない。却つて內地人の樣に、寒さは感じないと、この地の人はいつてゐる。

それのみでない。却つてこの寒い時節が、最も面白いといふ。

彼の晝猶暗き大密林の伐採、その運搬、數尺の厚氷を破つての、氷下魚やキウリの漁撈、または一時間に十里も走るといふ、汽車の樣な速さの犬橇の活躍、乃至は彼の沙漠上の駱駝の樣に、一望千里、粉雪の眞ツ白なツンドラ原野に、數百頭の馴鹿が、隊を組んで、奧地へと物資の輸送に努めるといふ樣な、痛快な景色は、實に極寒の頃にのみ見られると、この地の人々は、樂しんで居るらしい。

雪が全くなくなるのは、四月の末で、それから五月になると、急に暖かくなり、草木の發芽生長一時に來り、忽ちにして、深綠まばゆき春となり、六月上旬から、そろ〳〵花も開き始め、八月下旬までが、各種の草花で、野も山も飾られる時である。

九月十月と、寒さの來るのも早いから、草木はいざこの時にと、夏の間に、一生懸命に成長したり、花を開き實を結んだりして、いちはやく大體の事をすませ、さて後ゆつくりと、長い冬期をたのしむといふのが、自然のプログラムである。

この附近は、寒流が沿岸を洗つて居るので、その影響で、夏になると霧が多い。そして霧が來る

と、急に寒くなるといふのは、これが爲めだといふ。

冬には、水蒸氣が氷結して、樹木は時ならぬ花をつけ、誠に天下の奇觀であるといふ。

かうして見ると、此處でも亦、趣味ある生活が出來るらしい。

四六、犬と獨木舟

敷香支廳の管理する區域は、その面積が五百二十五方里もあるといふ。從つて內地の小縣、例へば香川縣などよりも大きい。カラフト北邊の大部分を占めて居るが、猶未開の地域が多い。併し森林は勿論、炭鑛に金鑛に、大に有望なものがあるといふ。

その地勢は、東西カラフト山脈が、南北に連亘し、その間の中央部には、カラフト第一の大河、ホロナイ川が南流して居る。その流域には、ツンドラ地帶もあるが、その他においては、麥、豆、馬鈴薯を主產物とし、野菜などもよく出來るといふ。

南カラフト最高の敷香嶽は、西部山脈の中にあつて、標高四千五百有餘尺の中天にそびえて居る。その他、保惠嶽、振戸山なども、夫々偉容を示して居るから、山の美も相當に味はへるらしい。

交通機關には、これまた珍らしいものがある。

土人は、今に猶川では獨木舟をあやつつて居る。その長さは五六間、幅は僅に三尺位、一本の柳の木をくりぬいてつくつたもの、實に太古の餘風がしのばれる。彼等はこれに乘つて、家族擧つて數十里を上下する。この一隻をつくるには、非常に歲月を要する。不完全な斧や小刀で、少しづゝ掘りぬくのであるから、數年もかゝるとか。實に文明人が、一大戰艦をつくるのと、相匹敵するといへよう。それだけ、文化の相違もあると思へば、まづ誤りはあるまい。

犬はまた彼等土人の陸上生活に甚だ大切なるものである。

彼等はこれを愛し、家族としては、食事を共にし、友としては唯一の好伴侶となり、財產としては生活上の必要物といふことである。彼等は夏期において、犬の食物を得ておく爲めに、大に勞働するといふことである。

犬もよく家人に慣れ、忠實に橇を牽いて走る。

これ等は、幼時から訓練し、八歲から十二歲位が、働きざかりであるといふ。

成績のよい犬は、先頭犬とする。このものは、甚だ怜悧で、よく馭者の號令を聞き分け、十數頭の先頭に立ち衆犬を率ゐて進んで行く。

「トト」

といふと進む。方向轉換には、

「チョィ〳〵」（左に）

「カィ〳〵」（右に）

といふ。停止には、

「ララ」

を用ひる。かくて一つの橇に、六七十貫の荷物を積んで、一日十四五里も走る。火急の場合には、二十五里も進み得るといふ。

犬と汽車と、これがまたカラフト土人と文明人との對比を、示すものとも見られる。

尤も汽車の老廢物は、何の用をもなすまいが、犬は撲殺して、その肉を食ひ、毛皮は種々に利用するのだから、人間の立場からいへば、却つて便利でもある。

四七、馴鹿の話

自然の妙用、寒いところには、寒さを厭はぬものがあらはれる。カラフトの「となかい」も、その一例である。彼はいくら吹雪が來ても、毫も意に介しない。氷雪上にすら、悠々と起臥して居る動物である。

滿目白皚々の廣野、何を食ふのかと思ふと、それは別に問題ではない。その嗅覺が、非常に鋭敏であるので、いくら雪が積もつて居ても、その下にある蘚苔類を喰ひては、彷徨して居る。

不思議にも、人が取つてやつたものは、餘り喜ばない。人間の手を觸れたものは、何かけがれでもして居ると思ふのか。それよりも自らあさつては、食ふといふ。

食物がないとならば、二三日は絶食しても、平氣であるといふ辛抱力もある。

殊に記憶力がたしかで、一度通つた道は、容易に忘れない。從つて定まつた道路の運搬用には、誠に便利なものであるといふ。

馴鹿の使用期間は、滿二歳から八歳位までであるといふ。十五歳にもなれば、最早用を爲さぬとか。その積載量は、通常二頭曳き一臺で、四十貫乃至五十貫であるが、滑走良好の土地では、六十貫まで積むことが出來る。その速度は一時間一里半乃至二里、一日の行程は、十里から十二三里位までであるといふ。併し特に急用の際などになると、十七八里を走ることも出來る。

たゞ橇を曳くのみでなく、雪のあまり深いところでは、十貫目内外の荷物を背負つて、一日十里も行進が出來るといふことである。

これを最も多く利用するは、オロッコ人であるが、その他の土人も、大體同樣の方法で利用するといふ。

「となかい」は、以上の如く便利なもので、これも犬に次で、大切なる土人の財産である。

これには野生のものと、畜養したものとの二種があるが、共にツンドラに密生してゐる蘚苔が、好物といふのだから、都合がよい。身長は五尺、丈は四尺內外、體重は二十五貫乃至三十貫。牝牡共に額の上に樹枝狀の角がある。每年二三月頃に落ち、九十月頃には復舊するといふ。

足は雙蹄となつて居て、開閉が自由である。從つて踏みつけるときは、自然に蹄が開くので、積雪や蘚苔類の上を步むも、足を沒する樣なことはないといふ。性質は極めて柔順であるが、また怯懦であり、從つて好んで群居して居るといふことである。

とにかく北地において、なくてはならぬものの一つである。

四八、海豹島奇聞（一）

シスカに來ると、此處の人々は是非アザラシ島に行けといつてくれる。それはまた、どんなところであるのか。

カラフトの地圖を開いて見ると、誰にでも、まづ多來加灣といふ大きな灣入が目につく。それから東南に、細く長くのびていつて、陸地の盡きるところが、東西二端に分れて居る。東は北知床岬といひ西をエントモ岬といふ。そのエントモ岬を、そのまゝ南に見ていくと、岬端より約十海里に小さい島がある。長さ三百間、幅六十間、水面上五十尺の、眇たる一岩塊である。これが實に所謂海豹島である。

しかしその實海豹などは、一匹も居るのでない。膃肭獸が來るのである。それだから、却つてよいのでもある。アザラシのやうな、毛の惡いものではつまらぬ。オットセイであると、內外各地方の人々から、珍重せられるのであるといふ。

この島は、我が國においては、唯一の膃肭獸蕃殖場であるのは勿論、米領プリビロフ群島、及び露領コムマンドルスキー群島と共に、北太平洋における、三大棲息所と稱せられてゐる。

樺太が我が領地となるや。直に獵獲を禁止し、蕃殖狀態を調査し、明治三十九年からは、年々その蕃殖シーズンには、監視員を駐在せしめつゝあるといふ。

明治四十四年以來は、米英露の諸國と條約を結び、大正元年から互に或る數を限つて、獵獲して居るといふことである。

併しこの島の面白いところは、たゞさういつただけでは分らない。

一陽來復、天下再び春暖の候になると、オットセイの大群は、太平洋沿岸や、日本海近傍を次第に北上し、五月の中旬頃に、この島に來る。この時元氣旺盛な牡獸は、まつさきに上陸して、然るべき形勝の位置を占領して居る。そして次でのぼつて來る雌獸を、不眠不休で待つて居る。

こゝにはしなくも牡獸どもの間の、大爭鬪が始まる。平生は仲よく泳いで居るものどもでも、この場に臨むと、最早容赦はならぬ。互に眞劍勝負をしながら、雌獸を奪ひあふ。そして一匹でも多く自分のものとしようとあせる。

これ等の社會では、極端なる一夫多妻主義が行はれる。從つて實力がありさへすれば、いくらでもかまはないといふ自由振である。然し弱いものになると、これまたみじめなもの、一雌獸だに得られず、隅の方に小さくなつて、他獸の活動を、ただながめて居るばかりだといふことである。

この爭奪戰においては、時としては互に我れこそと、雌獸を兩方から引つぱり合ひ、遂に中途から切斷されてしまひ、いとしの牝獸は、あはれやむごたらしきなきがらと、なつてしまうこともあるといふ。しかし或はこれが、牝獸の本懷なのかもしれない。

四九、海豹島奇聞（二）

實力競爭、眞劍勝負の結果、勝利者となつた牡獸は、四十五十の牝獸を我がものにする。時としては、八十九十も、自由にする大勢力家も、あるといふからすさまじい。

牝獸は、極めて溫順貞淑、一旦或る牡獸の配下に歸すると、極めて從順に、常に牡獸の周圍にかしづき、爲すがまゝにまかせてゐるといふ。

彼等の群居して居る狀態を見ると、中央にやゝ大きいのが、嚴然として居て、その周圍に、小さいものが澤山取りまいて居る幾つもの團體がある。この中央のものは、即ち牡獸である。これ等は、夫々一つ宛の家庭を、つくつて居るともいへよう。

牡獸の弱いものになると、堂々と陸地に上ることすら出來ずに、海岸磯浪のせゝらぎ來るところなどに、たゞ一匹ポツネンとして居るあはれな姿が見える。中にはかくして、一生涯終るものもあるのだと、誰かゞ說明してくれた。

さて、牝獸は、六月から七月頃にかけて、一頭の子を分娩する。その後數日にして、新たに交尾が始まる。かくして受胎が終ると、牡獸や仔獸と共に、この島を立ち退き、十一月下旬までには、

一匹も殘らず、海洋に出で、さすらひの旅を、つゞけるのだといふことである。

彼等親子の間には、極めて强烈なる愛情があり、牝も牡も、共に我が子を熱愛し、注意萬端至れり盡せりであるが、絶對に他の仔獸は、顧みないといふことである。我が子の愛を推して、他に及ぶことの出來ぬところ、そこに獸類のあさましさがある。尤も人間でも、時にはこの獸の樣なものもないではあるまい。

その數は明治三十八年領有當時においては、僅々二千頭位であつたといふが、三十九年以來、監視員をおいて保護することになつてから、次第に增し、時としては三萬五六千頭も上陸し、仔獸は八九千頭にのぼることもあるといふ。

條約の結果、監視員は大正元年から、年々八九百頭宛、捕獲するといふことである。

オットセイと、ほとんど同時に、ウミガラス即ちロツペン鳥も、この島に來る。これはまたその數幾萬なるを知らず、鳥糞は堆積して大岩巨石の如くなるといふ。

不思議な自然の妙用、この鳥はオットセイが分娩の際に、恰も產婆の如く、その卵膜を除去してやるといふことである。

この鳥は、體の上面は灰黑色、下面は純白、一寸極地のペンギン鳥に似たところがあり、特に美しくはないが、可愛い姿をして居るといふ。

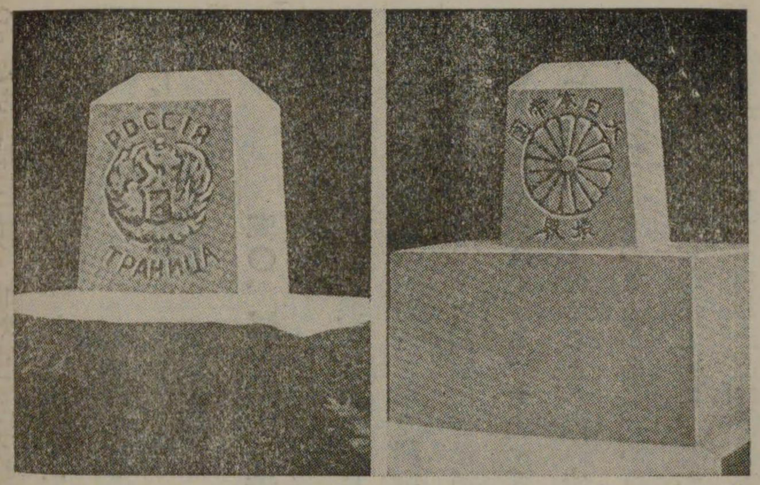
かうしたことを聞くと、面白い樣でもあるが、何といつても、シスカから八十海里もある。それにシーズンを通じて、たつた二回特別の便船が、出るのみといふのである。急ぎの旅を辿るもの、さうした呑氣は出來よう筈はない。

五〇、國　境

國境といふ觀念は、我々日本人には、どうも深刻に分りかねる樣である。ヨーロッパなどでは、一寸汽車の長乘でもすると、すぐ國境にさしかゝる。ジュネーブなどで、ウツカリ南の方にあるいていくと、すぐフランス國境につきあたつて、それからはパッスポート（旅券）がないと、一寸でも進むことが出來なくなる。ナイヤガラの瀑を見物にいつて、遂旅券を忘れたが爲めに、橋のたもとにいつても、川を渡ることが出來ず、囂々たる水の音を聞きながら、カナダ瀑を見られず、そのまゝ歸らねばならぬことがある。かうした例は、日本にはほとんどない。

カラフトは、實に朝鮮と共に、我が國が他國と境を接するところである。

敷香からホロナイ川の上流に泝つていくと、その沿岸には、ツンドラ地帶が展開して居る。併し



國境界標

北へ〳〵と進むと、遂には國境に達する。

陸路であると、シスカから自動車にて、西保惠（ホエ）保惠、氣屯等の新開地を經て、半田といふところに出でそれから間もなく、國境にさしかゝるのである。道程凡そ二十三里といふ。

併し主要なる縱貫道路は、內路（ナイロ）から、通じて居る。國境にいたるまで、二十六里三十二町であるとか。

國境は、いふまでもなく、カラフトの中央、北緯五十度の線に從つて、東西に橫斷するもので、東はオホツク海岸の遠內附近から、西は日本海岸の安別附近に及んで居る。その延長は、三十三里二十町あるといふ。

國境線は、幅僅に十メートル、その中央處々にいくつの標牌が立てられて居る。全里程において、天測點が五つ。即ち海岸に二つ、中央部に三つある。これは實際に緯度を觀測した地點である。

これ等を連絡した線が、即ち眞の國境線で、これには東方から西方へと、界票が十七個つくられて居る。

第一天測點から、第二天測點の間に、東から數へて一乃至八の界標があり、第二と第三間に九、第三第四の間に十、第四第五の間に十一乃至十六、第五の西に、最後に十七の界票がある。これ等をつらねたところが國境線である。

北緯五十度といふと、我が國では勿論極北であるが、その五十五度の緯線が、イギリスはスコットランドの中央を通つて居る位である。即ちヨーロッパの文明國は、その大多數が、我がカラフトと同樣の位置にあるのである。

かう考へると、カラフトも亦、有望であるといはねばならぬ。

五一、道すがら

我が國極北の都會シスカは、さすがに興味のつきぬところ、珍らしい風景と、面白い物語とに、富んで居るところである。ろく〳〵に家もなく、人も居らぬ荒蕪の地と、思つて來た私には、その

餘りに立派な町であり、文化設備の、あまりに整つて居ることにあきれつゝも、猶かうしたところに、かうして愉快に、旅の出來る幸福を感謝しつゝ、七月三日、名殘をとゞめて、南に歸ることになつた。內地の其處此處の、ありふれた旅館とは異なり、かゝる偏地に來ては、一入名殘惜しさがこみあげて來る。

ギリヤークやオロッコの土人等が、點々假の草屋を結び、夏のやどりとして居る海岸の、磯打波のせゝらぐ砂の上を、再び自動車にて、襲ひ來る水を蹴立てつゝ、駛走するのは何度通つても、痛快である。

七月？七月！實際今は、眞夏の候である。併しカラフトは、まだ漸く晩春の趣き、まだ肌寒い。もと來た道ではあるが、再び見ても、興味は更に新たに起る。運轉手も同乘客も、內地での樣に、神經過敏な風貌はして居ない。一寸觸れるとすぐピリッとしさうな、けはしい人間は、此處ではめつたに見あたらない。なるほど、呑氣さう。併しこの有樣が、果して何時まで、つゞくであらうか。日本人が入込んでから、臺灣は寒くなつたといひ、朝鮮は雨が多くなつたといふ。此處カラフトでは、或はたゞ溫暖になるのみであるかも知れない。それにしても、この呑氣な調子だけは、出來得る限り保存しておきたい。

運轉手君は、徐ろに語る。

「カラフトは、寒い〳〵といつて、內地の人は、こはがつて居るが、來て見ると、よいところですよ。私は一寸二三ケ月、たゞ遊びにと思つて來たのに、いつしか二三年に、なつてしまひました。もうせちからい內地に歸るのは、いやですね。此處では、とにかく働きさへすれば、食へぬことはないのですからね。働かずに食はふといふのは、何處でも、間違ひですよ」と、明快な斷定を下して、更に「それに大體半年働きさへすれば、あとの半年は、ゆつくりと休んで、呑氣に暮らすことが出來るのですからね。いゝですよ」と所感に及ぶ。

かく語る彼は、ホントに嬉しさうであつた。

心地のよい海岸は、いつしか通りすぎて再び例の大森林に入る。カラフトに始めて來たものと、私を見てとつた同乘の誰彼は、色々と親切に說明してくれる。チヤント知りきつて居ることまで、くだくだしく、話してくれるものもある。私はたゞ靜かに辛棒して、その好意のみを、感謝して居た。

大森林の中で、一寸休んで貰つて、寫眞をとる。誰も彼も、嬉しがつてカメラに入つてくれる。中に一人、最も親切らしく、併も切り口上で、一番多くしやべる男があつた。

自動車が走り出すと、やがて汚れきつた名刺を一枚、大事さうに出してくれた。そしてこれも記念にといふ。これはまた有難い話。この男は、間もなく下車したが、同乘の他の一人は彼れの姿を見送りつゝ、

「あれはアイヌ人ですよ。目を御覽なさい」

といつてくれた。なるほどまつ毛の太い、鋭い目の持主であつた。

× ×

知取ステーションに一寸休憩、それから再び海岸鐵道にて落合についたのは、午後九時二十分であつた。山口旅館といふに入る。此處は、嘗て零下四十度になつた、といふレコードのある寒いところ、併し今は眞夏、たゞ薄いタンゼンを着て、一寸火鉢を抱くといふ位の程度であつた。

五二、カラフトの石炭石油

七月四日、早朝、落合の旅舍を出て、豐原に向ふ。狐の牧養に、好奇の眼を見開いた小沼も、間もなく通りすぎる。

なるほど、小沼は農事試驗場があるので、名高いのである。併しそれよりも、此處には川上炭山からの鐵道、川上線が來て居り、その石炭の移出に當つて居るので、その將來は、大いに囑目せられて居るのである。

川上炭山と云へば、カラフトにおいては、實に最大のものである、三井鑛產株式會社の經營で、大正十年以來、擴張工事を行ひ、昭和三年中には、採炭量二十萬六千九百六十六噸であつた。近く年三十萬トンを出す樣になるといふ。

尤も內地の大炭坑に比較すると、瑣々たるものであるかも知れぬ。併しカラフトにおいては、ともかく第一のものである。

元來カラフトの鑛產は、石炭が第一であり、石油がこれに次ぐといはれて居る。

石炭の埋藏量は、可なり豐富で、確實なる調査の結果によるものゝみにても、約十億トンあるといはれて居る。未調査の區域を推定すると、實に二十億トンに達するといふ。

先年農商務省が調査したところによれば、我が國石炭の埋藏量は實測炭量九億三千萬トン、推定炭量五十億六千萬トンであるといふ。これに比するときは、カラフトにおける二十億トン炭量は、決して少いといへない。まして內地炭は、だん〳〵採掘が困難になるが、カラフトにおいては、主なるところは、所謂封鎖炭田とせられて、其のまゝ殘つて居るのである。

カラフトの石炭は、露領地代においては、ほとんど全く顧みられぬ狀態であつた。明治三十八年邦領となつて、先づ全管内の鑛產採掘を絕對に禁止し、着々調査を進めたのであつた。

その含炭層は、西カラフト山脈の兩側、中生界白堊系の炭層の中にあり、厚さ二千尺内外、南北に延長すること、二十里乃至三十里、炭層の厚さは、三尺乃至六尺のもの多く、時としては十數尺乃至三十數尺に、達するものもあるといふ。

その大部分は、今になほカラフト獨特の封鎖炭田として、採掘を禁止せられて居る。その區域は明治四十五年、閣令第二號によつて、指定せられて居る。即ち南部においては、ノトロ半島附近、中央においては、内淵川、川上川、泊居川等の、流域の大部分、北部において、内路川以北の大部分が、それである。

從つて今日においては、僅々川上、泊居、東白浦、大榮、知取、大平、樫保、天内の八ケ所において小規模の採掘を爲しつつあるのみである。その總額も、一年五十餘萬トンに過ぎないが、將來は大いに有望である。

私はついでに、本島の石油について、一言しておかう。

本島に石油を含有する地層の存在することは、明治四十年の鑛床調査において始めて南部西海岸地方に發見せられたのであつた。その後本斗附近から、野田以北にわたり、諸所に確實なる含油層の布延を發見し、いよ〳〵昭和四年より、日本石油株式會社において、五箇年繼續事業として、深度千メートル以上の鑿井五本を、試掘することになつた。カラフト廳は、これに補助金を交付し、奬勵しつゝあるといふ。その結果、果してどうであらうか。

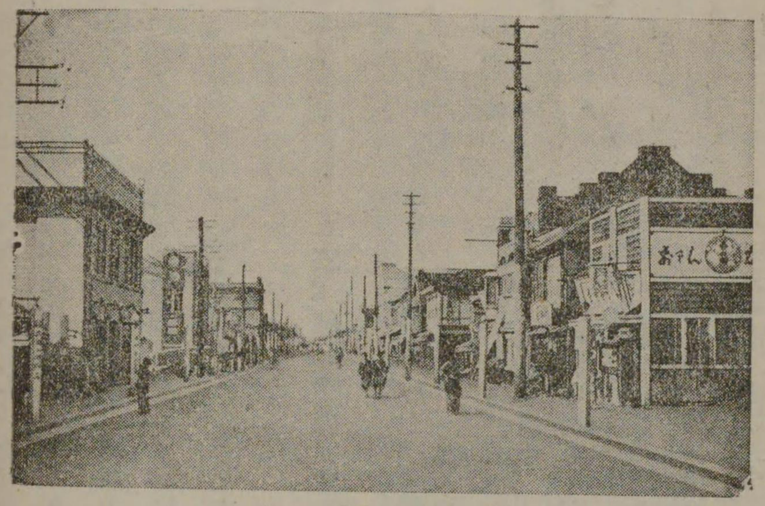
カラフトにおいては、以上の兩者を主として、砂金、砂鐵、海綠石、金剛砂等もあるといふ。

五三、豐原の一瞥

落合のやどにまどろむ間もなく、翌朝六時半に出た汽車は、小沼をすぎて、その八時二十分といふに豐原についた。

何といつてもカラフト全島の首府、人口二萬五千もあるといふ大都會である。ステーションに上下する人々の姿にも、十分に文化のかゞやきがあらはれてゐる。官衙、學校、寺院その他、悉く備はり、内地の大郡會と、何等の異るところもない。

此處は本島第一の廣大なる、鈴谷平原の中央、四十二方里もあるといふ地域に、整然たる市街が出來て居る。その東方には、高さ三千四百五十四尺、本島南部第一の高山たる、鈴谷山を主峯とす



豐原市街

る鈴谷山脈が、南北に連亘し、西方には西部カラフト山脈の諸山が、聳えて居る。誠に靜寂そのものゝ如き境地である。

私共は、豐原第一小學校長深井德氏に迎へられ、まづ樺太神社に參詣した。東郊小高き勝地、その名も旭ケ岡といふに鎭座ます官幣大社、全島の鎭守と崇敬せられて居る。全市街を一眸の中に聚むる社前の遠望は、誠に大觀である。

次は博物館、此處には本島產の珍らしい樣々のものが、豐富に所藏せられて居る。

牛馬八頭を食つたといふ、猛烈な熊は、剝製ながら恐ろしい。おひとよしの「となかひ」、こざかしい「じやこしか」、それに意地の惡い「おほやまねこ」、皆面白い。

「始めはとなかひ、終はじやこしか」此處には既にかういふ諺が、出來て居る。人間も始めの間は正直だが、次第々々に、惡賢くなるといふ意味であるといふ。

さてまた、氣味の惡いものでは「コモチカナヘビ」「マムシ」「トカゲ」など。何處でもかはらぬ鯰や鮒や、草で珍らしい「イタニソウ」、これはカラフト寒天の材料にするもの、トーブツ湖、トンナイ湖あたりから產出、一年四十萬貫にも達するといふ。亞麻、甜菜なども、內地にはあまりあるまい。

鳥類では、特產の「白ふくらう」「大雷鳥」。

これもまた特有のツンドラ標本、シスカで實物を見て來た目にも、やつぱり面白い。數へて來ると、限りはない。とにかくかうした博物館のあることは、誠に愉快に有益に感じた。

次は豐原中學校。その校長は、大分縣出身の上田光曦氏、規模はそれほど大きいものでもないが堂々たる鐵筋コンクリートの校舍は、內地でも大都會にのみまれにられ見るもの、その整然たる經營ぶり、如何にも心强さを感ぜしめる。

講堂正面に、これはまた珍らしい、大きい鐘が一つ、チヤンと据えてある。恰も禪寺でもあるかのよう。何でも京都あたりから、態々取りよせたものであるとか。訓話の前には、まづ「ガーン……」と

一打、次第々々に消えて行くその音を慕ふて、靜かに「ジーッ」と默想させるのであるといふ。なるほどかうして無限絶對の境地へと導くことは、たしかに修養上大切なることであらう。

次に、カラフト廳學務課に敬意を表し、第一小學校に導かれ、かくして豐原視察を了へた。

深井校長から、米幸といふ料亭に案内せられ、豐原情趣の片鱗に觸れんとする間もなく、私共は眞岡への道を、急がねばならぬのであつた。

五四、カラフトの教育

今日カラフトの教育は、内地のそれと、ほとんど異なるところはない。否内地においてこそ、却つてとかくだれ氣味などが、生ずる傾向もあらう。カラフトにおいては、さすがに新興の意氣が、十分に見えるではあるまいか。此處では、實行上の根本方針を確定して、鋭意理想の實現を期して居る樣である。

私は先づ所謂「樺太普通教育の五大綱領」といふものを見よう。

一、立國の大義、國體の精華を明かにし、國民的信念を旺ならしめ、以て愛國的住民を育成すべし

二、時代思潮の變遷、世界大勢の推移を審かにして、立憲自治の觀念を樹立せしめ、以て自治的住民を育成すべし

三、自制の精神、共同の理義を明かにして、相互扶助の良風を助成し、以て協同的住民を育成すべし

四、體力の增進、元氣の振作を企圖し、勤儉力行の美風を作興し、以て奮鬪的住民を育成すべし

五、科學の研究、實用の知識を普及し、產業重視の精神を涵養し、以て實用的住民を育成すべし

要するに愛國、自治、協同、奮鬪、實用の五大原理の、實現を要望するものである。そして何れも極めて大切なるものたることも、勿論である。實用的住民といふ語、聊か不快な聯想を、伴はぬではないかも知れぬが、その眞意においては、とやかくの批評はいるまい。

住民といふ語を用ひて居るところに、内地においては、思ひもよらぬ一種の氣分が味はれる。この中に、本島の特殊的環境に即する教育の意味が、含まれて居るのかも知れない。これ以外には、土地に卽した特殊的方針が、何處にもうたはれて居ないのは、必要がないのであらうか。

現在のカラフトには、專門學校程度のものはないが、中等學校以下は、立派に完備して居る。

中學校は、大泊、豐原、及び眞岡に、内地にもめつたにないほど堂々たるものがある。高等女學

校は、以上の三都會の外に、泊居（トマリオル）にもある。それ等は何れも公立であるが、私立で中學程度のものには、豐原に夜間中學校、商業學校、藤川實踐女學校、大泊には、夜間商業學校裁縫女學校、實科女學校があり、眞岡には、裁縫女學校がある。

小學校は、現在尋常小學校一一八、尋常高等小學校五六を有し、各要所には、ほとんど遺憾なく、設けられて居る。

教員の養成に就ては、大正七年に大泊中學校に教員講習所を附設し、尋常正教員を養成して居たが大正十一年には、その程度をすゝめ中等學校卒業程度の學力あるものを收容し、一般師範學校の二部と、その趣きを一にする樣に改められた。更に昭和二年からは、本科の外に、研究科を創設し、本科卒業者、內地師範學校本科卒業者、若しくは小學校本科正教員の免許狀を有するものにして、カラフトに一年以上、小學教育、または教育事務に從事しつゝあるものから選拔し、特に精深なる學習を、爲さしめることにしてある。從つて教員の實力も、先づ遺憾なき筈といはねばなるまい。

待遇も、またすぐれて居る。中等學校においては、一人平均年俸、校長は四千六百七十二圓、奏任四千圓（但し女學校は三千四百三十一圓）判任二千三百四十六圓である。小學校においては、前述の本科卒業者の初任級五十五圓、加俸六割五分、住宅料五圓乃至十七圓、外に任地によつては、僻陬加俸一割乃至一割五分、五年以上勤續者には、更に一割乃至二割の特別加俸がある。といふからすさまじい。

五五、カラフトの横斷

カラフト横斷の最短距離は、東岸の眞縫附近から、西岸久春內に通ずるもので、その間僅に七里三十二町に過ぎない。併しこの間は、勿論山道であり、それに久春內から野田まで、まだ鐵道も通じて居ない。從つてその全往路數十里の間、自動車にする外はない。

それにカラフトにも、熊は居る。自動車の爆音を恐れて、近づきはしないといふが、氣味の惡くないことでもない。併しカラフトの人々はいつて居る、此處の熊は、決して人を害しないと。果して然るか。なるほど、豐原博物館にあつた剝製の大熊も、馬や牛を食つたといふが、人を食つたのではないといふ。併し信ずることはよいが、それが眞に事實であるともいはれまい。

とにかく豐原から、眞岡に通ずる道による方が、極めて便利でもあり、亦興味も多く、有益でもある。

豐原の一瞥を終へた私は、午後零時半の列車によつて、眞岡へと向つた。

内地とは異なり、大都會は、誠に堂々たるものであつても、一歩郊外に出ると、眞に山村僻地の面目があらはれる。列車は忽ちにして、家もなく人も居らぬ山地から山地へとすゝみ、谷を渡り森をくぐつてゆく。

この間に、所謂原始林もあるが、併しそれは、シスカ道中で見たほどの、鬱蒼たるものではない。それのみでない、山火の災が、いよ〳〵甚だしく、いくらいつても、慘憺たる燒野燒山、たゞ眞黑に焦げただれた老樹の幹が、淋しくまばらに立つて居るに過ぎないところもある。列車の中に

「山火事危險」

「煙草の吸ひ殼、氣をつけませう」

といふ掲示もある。なーるほど。

何といつても、カラフトの脊陵山脈を横斷するのである。從つて豐原から、眞岡にいたる間において、トンネルが十六もあるといふから、相當の險道である。殊に二股池端の間において、甚だしい。

それに珍らしいループ式の線路もある。線路は、山の中腹を立派に一回まはつて、トンネルをぬけ、漸く前進する。肥薩線矢嶽のそれと、南北正に好一對である。

いよ〳〵眞岡についたのは、午後五時頃、眞岡中學の藤田校長等に迎へられ、その名もやさしい菫旅館といふに入る。

五六、眞岡の印象

眞岡は、さすがにカラフト西海岸第一の大都會である。人口實に一萬四千餘、鐵道の要地であると共に開港場で、官衙學校會社工場、その他文化機關、一として備はらざるはない。

これまで發展して居ることは、實は思ひ設けぬことであつた。景色も非常によい。暖流の影響もあるので、氣候も東海岸に比しては、穩和であるとか。

近郊においても、趣味深き勝地に乏しくないらしい。これもまた眞岡節。

（一）

オール眞岡に春が來りや
サノ春が來りや
鰊曇にろが光る
トサイ〳〵ろが光る

（二）

オール眞岡に夏が來りや
サノ夏が來りや
連れて行きたい手井の池
トサイ〳〵手井の池

（三）

オール眞岡に秋が來りや
サノ秋が來りや
山で赤いのがナナカマド
トサイ〳〵ナナカマド

（四）

オール眞岡に冬が來りや
サノ冬が來りや
鈴の馬橇（ばそり）がねて聞ける
トサイ〳〵ねて聞ける

といふのでも、分るであらう。

因にこの一編は、眞岡中學教諭の柳澤軍一氏の作歌で、今日當地において、好んで唱謠せられつゝあるものであるといふ。

いそぎの旅を辿る私は、着くと早々眞岡中學校を參觀し、先づ校舍の堂々たるに一驚を喫し、次に穩健にして愼密なる注意を以てする經營振に、贊嘆せざるを得なかつた。殊に教員諸君が、しつかり落付いて、最善を盡せる態度、まことこれならではと、大いに心を強うするものがあつた。げに人間到るところ青山ありだ。

五七、西岸めぐり

東岸において、大泊からシスカの果てまできはめた私は、西岸においても、南北をきはめずしてはと、不思議な野心が起つて來る。前者においては、小沼の農事試驗場があるが、後者においては樂磨の水産試驗場がある、これも見逃すことは出來ない。

七月四日、藤田中學校長に案内せられて、午前五時四十分といふに眞岡を發し、列車の行くがまにまかせて、野田といふところにつく。時に午前八時を過ぐること半時。

野田は、西岸においての一名邑であり、汽車の終點ではある。併し僅に製紙工場によつて、發達したところ、漁業といつても、それほどたいしたところでないらしい。たゞ沿岸風光の美なることは、一遊に値するものがあつた。

午前十時過ぎ――野田を出た列車は、正午に近き頃、樂磨につく。直に水産試驗場を訪ふ。若しカラフトの水産を知らんとするならば、必ず一瞥しなくてはならぬところであるといふ。なるほど、北邊諸方面の魚類については、ほとんどその總てが網羅せられ研究せられ、加工法もまで、次第に改善せられつゝある。

專任技師や場長が、親切なる案内と說明とによつて、豫備知識のほとんど全くない私共にも、水産問題の一斑、を理解せしめやうとする努力に感銘しつゝ、突嗟に準備された、魚料理の御馳走を賞味

し、あはたゞしく午後三時發の列車に乘つた。

眞岡の市街を、車上から見送りつゝ、ひたばしりに南に向ひ、沿線各處に點在するアイヌ部落を眺めつゝ進み、本斗についたのは、午後七時に近き頃であつた。本斗館に少憩。

此處は、カラフト唯一の不凍港で、北海道稚内と相對する位置にあり、かつ本島西海岸鐵道の起點でもあるので、交通上の要衝に當つて居り、立派な築港も完成して居る。

現在は人口凡そ九千、眞岡泊居に次で、西海岸第三の都會となつて居る。明治三十八年領有當時は、僅に十數戸の寒村に過ぎなかつたといへば、如何に急速に發展したかゞ分る。更にこの近傍に、豐富にあるといふ林產及び鑛產が、盛んに開發せられる曉にはと、この地の人々は樂しんで居る。何氣なく町を散歩して居ると、通りかゝりの一青年が、いきなり

「これをあげませうか」

と、出したものは、長さは七尺にも餘り、周圍は、その下部の太いところにおいては一尺もあるもの、青竹の樣でもあるが、併し節はない。よく見ると、それは蕗であつた。

これはと驚いて居ると、件の青年は、

「これ位のものは、すぐそこにいくらでもあるのですよ」

といひすて、あとをも見ずに、過去つてしまつた。

五八、水產問題（一）

カラフト西海岸は、我が國においても、最大の漁業地である。樂磨の試驗場においては、最も科學的系統的に、研究をすゝめ、既に幾多の有益なる成果をあげて居る。

村山場長と語る中、何時しか海豹島の問題も出る。私は更に興味ある一二の事實を、此處に附說しよう。場長の說によれば、オツトセイは、我が海豹島に四萬乃至五萬、コンマンドルスキー島に約五萬、米領プリビロフ島に五十萬頭位、も上陸するとか。彼等は、海豹島から、千島列島の間を通りぬけ、銚子沖に來り、更に北上して宗谷海峽を經て、朝鮮海峽の方まで往き、かくて五月頃になつて、再び海豹島に歸つて來るといふ。

ロツペン島は、海豹島に來るものが、約二十五萬といはれて居るオツトセイと共同生活を爲し、彼等の爲めに、岩角に上つて見張番を爲して居り、危險の近づくのを知らせるのだといふことである。

さて島に上陸して、盛んに生殖機能を活かすオツトセイは、三歲四歲よりで、五歲、六歲、七歲において、最も旺盛に、それよりは彼等にもはかない老衰期が訪れる。所謂老大獸は、最早何のや

くにもたゝない。そして十歳位にして死ぬらしいといふ。

子は五ケ月位にて、泳ぎ得るまで發達するとか。

我が海豹島の監視者は、所謂四國條約により、一年に七百頭宛、撲殺するのであるといふ。

オットセイに似たラツコは、カラフトには居ない。嘗て我が千島には、無數に居たといふが、濫獲の結果、極めて稀となつてしまつた。この獸は、非常に子を愛するので、まづ子を撲殺するときは、親も亦その場を去り得ず、共々に毒手にかゝるのだといふ。

今日は、ロパトカ岬や、ウルップ島に居る。我が國の保護により、後者には約七百頭位居るといふ。

これ等はとまれ、カラフトの水產物として注意すべきは、まづ海草である。即ちイワノリ、ギンナン草、カラフトトロロコムブ、ネコフシコムブ(沃度が非常に多いもの)ヒバツノマタなどがある。

これ等は將來も有望なるものである。併し何といつても、鰊を忘れることは出來ぬ。カラフトにおける全水產は、一年に一千五百七十萬圓であるが、その中鰊は、實に九百九十萬圓の巨額に上つて居るとか。

五九、水產問題（二）

北海の水產物としては、タラバカニやサケをも、忘れることは出來ない。これ等は、日魯漁業會社の手によつて、從來盛んに經營せられて來た。

その工場はカムチヤツカのカウランスコイ以南、六百哩の間に散在し、盛んに活動して居たものである。

然るにロシアは、不法にも種々なる口實を設けて、壓迫を加へ、時としては、互に武器を以て、相爭はざるを得ざることもあつたといふ。

かくてはと、我が漁業者の工夫したものは蟹工船といふものである。これは水上に浮ぶ大工場ともいふべきもの、遠く領海以外にあつて漁獲し、陸上にのぼらず、船中において、あらゆる加工を行ひ、罐詰を完成するのであるといふ。

併し、かくても猶領海出入問題につき、不法なる暴力に惱まされることもあるといふ。

尤も一部の領海においては、これまでも、入札によつて、正しく權利を得、漁獲に從事して來たのである。然るに昭和四年にいたり、宇田某といふもの、實際落札の能力もないのに、何等かの野心の爲めに、日魯漁業會社の事業を妨害し、不法の高價に見積り、爲めにロシア當局に落札最低價格を、著しくあげる口實を與へてしまつたといふ。かゝる國際的の事業にまで、小競合の醜態を演じ、共

々に仆れるといふ悲運を招くのは、如何にも苦々しく、殘念至極のことゝいはねばならぬ。

現在は、鮭工船も、四隻出來、プリストルベーや、オリコートルスキー岬あたりに、活動しつゝあるといふことである。

鮭は三月四月頃、北海道の沿岸にて、子を產む。このものは、八月頃までは、天鹽の海岸に居り、それより、國後海峽に來て、死ぬといふ說もある。これに對して、彼等は更に一度、北海道の南に出で、一年・二年を費し、三年目にアニワ灣附近に來り、再び天鹽に歸りて、產卵するといふ主張もあるとか。

この二說、今日猶何れとも、決定が出來ぬといふ。とにかく、魚類の生活史を研究することは、水產上極めて大切である。科學は實に、實業の基礎である。

以上私は、村山場長の話してくれたことの中、興味あるものについて記し、隨處に蛇足を加へて來たのである。とにかく水產は、我が北邊において、極めて重要なるものである。漁獲術においては、日本人は、實に天才的であるといふ。露人の如き、ろく〳〵にとることも出來ぬのに、妄りに我が國人の活動を羨み、あらゆる方面から阻害するのであるとか。

六〇、カラフトを顧みつゝ

樂磨に水產試驗場を問ひ、カラフト漁業の一斑を調べ終つて、私は車上から、再び眞岡の町を見送りつゝ、本斗に來り、本斗館といふに少憩したのであつた。

本斗はカラフト唯一の不凍港であり、北海道と對して、交通の要地に當つて居るので、港の設備も立派に出來て居り、市街も何とはなしに、新興の氣分に滿ちて居る。まことに大泊と相對して、交通上の覇權を爭ふものであらう。

併しゆつくりと、視察の暇もなく、私は午後の九時といふに、暗の中に見送りつゝ、いよ〳〵カラフトに別れることになつた。

今日は、風もある。海は、何となく穩かでない。日中はすさまじい怒濤が、岸をかみ、遠く見渡すと、白浪の打碎ける樣が、物すごかつた。日の落ちる頃から、やゝ靜まつたが、それでも沖には、ゴー〳〵といふ音が、響いて居る。

船は鈴谷丸、たつた七百トン、小さいこと。それでも私は、太平大西の二大洋の、荒浪をすら蹴破つたもの、何に之しきのと自ら思へど、此處はまた、北邊の海、時としては、神秘の現象や、不思

議のローマンスの傳へられるところ、それにかばかり物騒がしいなどと思ふと、決して心地のよいものではない。

眞岡中學の藤田校長に送られて、船室に入る。お客もろく〳〵無いらしい。何となく、心淋しさがこみあげて來る。併したつた八時間だ。

これが最後と見送る本斗の里も山も、たゞ暗黑。電燈だけが、星の樣に、高くまた低く、光つて居る。

船は、正しく午後九時に出發。港を出ると、すぐに舷側をかむ浪の音が、ひゞいて來る。船體はゆらり〳〵と、上下左右に動搖する。併し如何ともすることは出來ぬ。あらゆる運命を、一枚の船底に托して、沖へ〳〵と進むのみである。

併し私は今、小さいながら、堂々たる汽船に乘つて居るのだ。そして偉大なる機械の力を利用し、勇猛果敢に、怒濤をものともせずに、進んで居るのだ。それですら、夜、浪風に襲はれては、何とはなしに、心細くもなつて來る。船室にジーッと落付いて見ると、その昔未知未開の極地に、雄々しくも探險に來た勇士の俤が、坐ろに思ひ出され、つきるところはない。

私は此に、カラフト探險史の一瞥を、試みる機會に到達した。

六一、カラフト探險史の一瞥（一）

國史を案ずるに、中古阿部比羅夫が、蝦夷を征伐したといふことがある。その肅愼は、カラフトであるといふ說もあるが、それは今の北海道であるといふものもある。悠遠の昔、今にはかに何れとも、斷定することは出來ぬ。

鎌倉時代になつてからは、日蓮の高弟日持といふものが、北海道やカラフトを經て、大陸にまで進んだといはれるが、これまた正確に知ることは出來ぬ。

義經の事歷を傳ふるものも、各所にあれど、決して容易に信ずべきものではない。

實際上信ずべき史上の事跡は、割合に近代に、求める外はあるまい。傳ふるところに依れば、文祿二年に、豐臣秀吉が、松前慶廣を肥前の名護屋に引見して、北邊一帶の世襲を許し、次いで慶長四年に、德川家康も、亦これを認め、かくしてカラフトの領有も、自ら松前氏に歸した姿となつたといふ。

かくて松前氏は、その後時々藩士をカラフトに派遣して、これを視察せしめ、或は地圖を作つて幕府に報告などしたこともある。併し細にその實際を、知ることは出來ない。

魯人が始めてカラフトに來たことの分つたのは、慶安三年の頃である。それより宗谷にも來り、交易を求めたので、老中松平定信は、北邊探究の必要を感じ、天明五年（西暦一七八五）には、山口鐵五郎、大石逸平を、カラフトに遣はしたといふことである。

この時には西岸は、本斗、眞岡の中間にあるタラントマリ、東岸は、アニワ灣に沿ふて、シレトコ岬あたりまで進み、更にその翌年には、久春内あたりまで、いつたといふことである。

この頃より、大陸の韃靼人等は、カラフトに渡りて、土人を虐遇したらしく、寛政二年（一七九〇）には、土人の請を容れ、松前氏は、遂に高橋寛光といふものを遣はし、役所をクシュンコタン即ち今の大泊に建て、彼等を統治したといふ。寛光は、西岸を探險し、久春内より更に進みて、古丹までいつた。

その翌々寛政五年には、最上徳内が、幕命によつていつたが、久春内附近までであつた。

寛政年間においては、魯人は頻りに來つて、我が北邊を窺ひ、容易ならざる事態があらはれたので、幕府は松前氏の所領をさきて、カラフトを直轄となし、享和元年松、平忠明にその統理を命じた。かくて忠明はまた、屬吏中村意積、高橋一貫、の二人をして、更にカラフトの探險を、行はしめたのであつた。

この探險は、大に進捗し、中村は東部に進みて、榮濱の北、內淵附近まで究め、高橋は西を探りて今日の國境に近づき、北宗谷あたりまでいつた。

北邊において、國家の大事が、次第に近づくのを見ては、その探險においても、大いに緊張を示して來たことが分る。カラフトが永久我が領有として、確定するまでには、これより猶種々なる大困難が、相ついで來た事を忘れてはならぬ。

六二、カラフト探險史の一瞥（二）

ロシア人の北邊侵入は、次第々々に進んで來る。文化の頃は、宗谷の土人なども、爲めにカラフトに渡ることを恐れて、敢てし得なかつたといふ。併し國家は、そのまゝにしておくことは出來ぬその五年といふに、俄然カラフト探險の幕命が、松田傳十郎、間宮林藏に下つた。その時の內旨に曰く、

カラフトに渡航するに、大船は便ならず。小船にて渡航するなるべし。然る時は、飯米の用意、多分に持越す能はざれば、干魚を食して、飢を凌ぐべし。

と。嚴命凛として、おかす能はざるものがある。

かくて命を奉じたる二人は、宗谷にいたり、從僕を江戸に還し、家族に對しては、「奥地にて落命せば、宗谷出船の日を以て、忌日と定むべし。」といはしめ、いよ〳〵決死の覺悟を以て、進んだのであつた。二人は西海南端のシラヌシまでは、共に進み、これより松田は西岸をのぼり、いよ〳〵韃靼海峽の中央まで進み、ラツカ崎にて大觀し、黑龍江口をも認めて、歸路についた。間宮は東に進み、多來加灣岸を廻りて、知床まで行つたが、潮流の爲めやむなく歸り、眞縫より名寄に山越をして、更に西岸をすゝみ、途中松田と會し、六月二十二日には、共に宗谷に歸つた。

この年秋七月十三日、間宮はまたも幕命を奉じて、宗谷を發し、先づシラヌシに行き、滯留一ケ月半、九月十三日より北上、十月トツショカフといふところにいたり、糧食缺乏し、かつ寒氣甚だしきため、一旦眞岡附近に歸りて越年し、翌年正月二十九日、更に北上、二月二日鵜城に進み、その四月九日は、ノテト崎に達す。これより先は、海水猶氷結して居たが、五月八日より更に北上し、その十二日には、韃靼海峽の北端に出で、黑龍江の對岸に近き、ナニターといふところにいつた。

間宮はこれより山を越して、東岸に出でんとしたが、連れていつた夷人ども、恐れて聞かず、やむなくノテトに歸りて、コーニといふ土人の家に宿つた。このことは實に大切なる二つのことを、生ずる機緣となつた。

その一は、コーニによつて、カラフトが全く孤島であるといふことを、知ることが出來たことである。

その二は、間宮をして、更に大膽に、大陸探險といふ一大壯擧を、思ひ立たしめたことである。

偶々コーニは、交易のため大陸に渡ることになつたので、間宮は、それに伴はれ、六月二十六日ノテトを發し、七月三日、今のデカストリーにつき、更にキジ湖を渡り、黑龍江に入り、それより流れを下つて、江口から海峽に出で、八日ノテトに歸つた。宗谷に還つたのは、その二十八日であつた。

かくて韃靼海峽は、間宮によつて、完全に探險せられたといはねばならぬ。間宮海峽と稱せられることも、また當然である。

六三、カラフト探險史の一瞥（三）

快漢間宮によつて、作られた探險レコードは、その後容易に破ることが出來なかつた。實際に於て、それ以上探險を進める要は、無かつたであらう。さはいへロシア人の北邊窺窬は、一日も油斷することを許されない。從つて其後に於ても、日本人はどうしても、探險事業をゆるめることは出

來なかつた。實にこのことは、當時に於ける官民の、對外的一大焦燥であつたのであらう。

次に弘化二年及び安政三年には、松浦武四郎の探險が行はれた。前者に於ては、五月廿五日宗谷を發し、西岸を進み、久春内より陸路横斷、眞縫に出て、それより東岸を下り、七月十六日に宗谷に歸つた。後者に於ては、五月上旬宗谷を發し、前回とは反對に、東岸を進み、眞縫に出て、更にタライカ灣の北岸まで究めて、再び眞縫に歸り、それより山を越えて久春内に出て、西岸を下り、八月七日に宗谷についたといふことである。

松浦の探險は、探險史上に特別の新發見を、提供するものではあるまいが、私は最後に、岡本監輔の快擧を記さねばならぬ。間宮が自ら探險せる事實と、土人コーニに敎へられたことによつて、カラフトの孤島であることは分つたが、實際之を證明するまでには至らなかつた。この任に當つたものは、實に岡本であつたのである。

岡本は、元治元年に幕府に請うて、樺太在住となり、タライカ灣の北岸にそゝぐ、シスカ川附近に來住した。以て其の決意の、凡ならざることが分る。

かくて慶應元年五月、愈奥地探檢の途に上り、北知床岬をめぐつて、六月東岸のヌエに至り、七月には、痛快にも、カラフトの北端ガラト岬を廻航して、北から韃靼海峽に入つたのである。

以上大體のスケッチではあるが、カラフト探險史の一斑を、知ることが出來ると思ふ、古人がかくの如く、探險を完了する爲めには、實に至大の困苦を嘗めたことを、忘れてはならぬ。或は極寒と戰ひ、或は風浪をおかし、或は糧食に窮し、今日に於ては、殆ど想像だも出來ぬことがあつたであらう。連れていつた土人なども、時としては命に從はなかつたとも聞く。その懷柔使役にも、一通りならぬ苦心が、あつたに相違ない。

ロシアの侵入は、その後も次第に甚だしくなり、遂に止むを得ず、千島と交換しなくてはならぬことになつた。この不快な國辱史は、思ふことだに堪へ得ぬ興奮を感ずる。されど其の一半が、遂に我れに歸つたことは、誠に痛快である。

因に以上の資料については、豐原中學の西尾敎諭に負ふところ大である。此に感謝の意を表す。

六四、カラフト移民觀

私はカラフトを見送りつゝ、坐ろにその移民問題に、想到せざるを得なかつた。とにかく我が國の樣に、土地のせまいところでは、何處へかいくところを見つけなくてはならぬ。それにはブラジルもよい、出來ればアメリカもよいが、カラフトに行くことも、また一策であると思ふ。

カラフトでは、現に人手が足らず、頻りに優待する方法を講じつゝ、移民を歡迎して居るのである。寒いといつても、人の住んで居るところである。遠いといつても、僅々數日の旅程に過ぎない。それによく人の速斷する樣に、住みにくいところではないらしい。

カラフトへ〳〵、たしかにこれも、忘れてはならぬ言葉である。

要路の人が移民を招致したのは、昔からである。尤も文化、文政以前は分らないが、その頃からは次第に注意せられて來た。明治維新後、北海道に開拓使の置かれるや、移住者に對しては、種々なる優遇をしたものである。

永住者には、三年間一日一人米五合、手當金一ケ月三分、被服料年五兩、畑地及漁業地を下附し、永住者には終身無稅、出稼者には三年無稅、四年目より收穫の三分五厘を、徵收する等の定があつた。

併し明治七年までに、僅々二十一町歩の開墾が、出來たのみであるといふ。然も種々の口實のもとに、歸るものが多く、明治八年千島カラフト交換條約をまたずして、移民は次第にその影を、留めざる傾向となつたといふ。

露領時代においては、流刑囚徒の監獄場とせられ、毎年本國から、數百名の囚徒が送られた。刑期がみちて、品行方正のものには、自由民として種々の事業に從事することを許し、開發を圖つたが、成功せず、三十餘年の間、人口の增加もなくして經過し、再び我が國に歸することになつた。

我が國に歸してからは、次第に人口も增加し、上述の如く、既に至るところに大都會も出來、內地とほとんど異ならぬ生活が、出來る樣になつた。併し今日でも、獵期にのみ出稼するものが、隨分多いとか。堅實なる農業勞働者の移住は、割合に少いといふことである。

併し今日においては、移住者に對し、非常に優待する方法を設けて居る。

樺太廳にては、移住者に對しては、土地の貸付無償讓與等を爲しつゝある。農家一戶につき十町歩を標準として、無償に貸付し、七ケ年以內に、既定の家畜を養ひ、その土地に住居し、七町歩以上を開墾すれば、全部の土地を無償にて讓與する。

この外開墾費の補助、住宅建築費の補助、農業器具、機械家畜購入費の補助等もある。

特に集團移民を指定して、非常に優遇しつゝあるのである。

また牧畜經營者には、百五十町歩までは、無償讓與をするといふ。

內地において、逆境に陷つたもの、到るところ青山ありといふ意氣あるものなどは、進んで北門の鎖鑰たる此地に、活躍することもまた一策であらう。固より働かずして食はんことは、何處でも妄りに求むべきではあるまい。カラフトにおいても、「怠け者は來るべからず」といふことは勿論

である。

六五、稚内をあとにして

文明開化の有難さ、僅々數十年の昔には、生命を賭しても、容易に出來なかつたカラフトの探勝も、内地の遊山旅行にも得られぬほどの、趣味と安樂とを以て、無事に終へることが出來た。そして北邊カラフトの地も、思つたよりも愉快なところ住みよきところたることを、坐ろに感じたのであつた。まこと百聞は一見に如かず、くだらぬ想像に恐れて居るよりも、實際に見るがよい。シベリアでもカナダでもさうであつた。私は何時もかく思ふ。

さて暗の中に本斗を出帆した船は、風浪稍甚だしかつたにも拘らず、無事に海峽を横斷し、明くれば七月五日午前五時といふに、再び宗谷、ノシャプ兩岬を左右に望みつゝ、稚内港に入つた。

何時でも同じ、家路となると、とにかく何とはなしに、一種の心强さが起る。千山萬水を隔てた此處北海道の僻地でも、嘗て一目見ておいただけであるが、その山容水態が、ふしぎになつかしさを感じさせる。

驛前の旅亭に小憩する。朝陽をあびてたんぜんをまとひ、爐火を圍んで打ちくつろぐ。これが七月初旬、酷暑の候であるといふのだから面白い。内地であれば、四五月の交の氣候であらう。

「カラフトよりも寒いぢやないか」と、女中にからかうと「いゝえ、これは特別です、汗の出ることもありますよ。」と辯解する。なーるほど。とにかくおかげで、全く夏を忘れることが出來た。

稚内發の汽車は、午前八時二十五分に出た。北見線で來た私は、同じところを歸るも愚、今度は宗谷線によることにした。

拔海、勇知などいゝふ奇妙な名のステイションが、來往する。行手には、**利尻富士**が、海拔一七一八米の雲表に、その威容を示して居る。利尻島や禮文島や、かつて地圖で見て居たものは、眇たる一塊の小島、ほとんど意識にもとめぬほどであつたが、かうして實際に仰ぎ見た八面玲瓏たる姿は、實に壯大でもあり、艶麗である。まことの富士の俤を、完全にあらはして遺憾がない。寶永山と覺しきものさへ、ちやんと備はつて居るではないか。

思つたよりも開けて居る**天鹽平野**を南走して、何時しか再び**オトイネツプ**(音威子府)についた。此處は宗谷線の分れるところ、附近の名邑である。これから狹い山脈の間であるが、耕地のよく整理されたところを通つて、**ナヨロ**(名寄)につき、更に名寄本線によつて、再び北見に入り、靜かな**オホツク海岸**を走つて居る間に、日は全く暮れ果てゝしまつた。**トホカル**(遠輕)や**ノケウシ**(野毛

牛）などといふ名邑も、たゞステイションから、電燈のキラメクのを望んだゞけで、ひたばしりに網走にと急いだ。

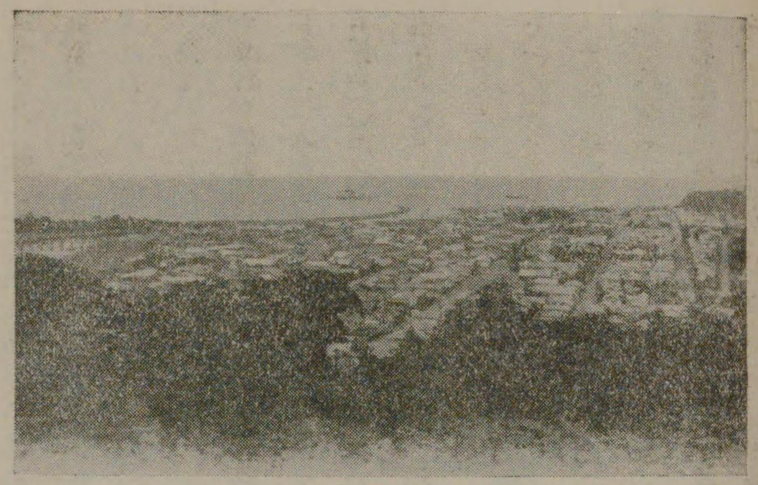
六六、網走から

暗の中を走つて、網走に着いたのは、七月五日午後十一時半であつた。僅か二三人と、淋しくステーションに下りる。かうした場合、我がまゝは出來ぬ。驛に近いのを幸ひに、高橋旅館といふに入る。大きくはない、が案外とまり心地もよい。併し何とはなしに、シーンとした物しづかさ。これでも町かなどと思ふ。なるほど札幌から二百九十哩の偏地だと、しみ〴〵地圖などを見る。

併し明けると（七月六日）流石に此處も都會だ、人口二萬五千あるといふ。街衢整然、あらゆる文化機關を具備した、堂々たるものである。

尤も、珍らしい町ではある。東西八里、南北七里、面積四十方里もあるのだとか。

その産業と云ふのを見るに、これも面白い。町といふに、農業漁業が第一、それから林業、工業畜産業等。農産物は、豌豆や麥や薄荷や甜菜や米などで、年産二百萬圓、漁業は、鱒、鰊、鮎などで、六十五萬圓などを主として、生産物の總額三百五十萬圓にも達するのだといふ。近郊の富源の大



網走港大觀

なることを、想像し得られる。

名所をと尋ねると、先づ網走神社に桂ケ岡公園、黎明ケ岡に不動山、或は丸萬の梅林に龍の湯鑛泉、更に海岸近くに二つ岩、稍離れては帽子岩、ずつと遠くには知床半島の奇勝などと、やつぱりお國自慢は、いくらでもあるらしい。攝政宮殿下の行啓の舊蹟もある。

併し網走を大觀する爲めには、三眺山か天都山に登ることが必要である。前者は驛から西一里、九丁の急坂を登ると、明鏡の如き網走湖が脚下に展開し、左にオホツク海、右に能取湖を望むの絶景がある。眞に三眺の名に背かない。頂上には觀月亭といふ休憩所もある。後者は驛の西南、これもまた一里ばかりのところにある。頂上には、小さい祠があるだけで、道路も辛うじて自動車を通ずる位であるが、山は高く、遠望は極めて雄大である。

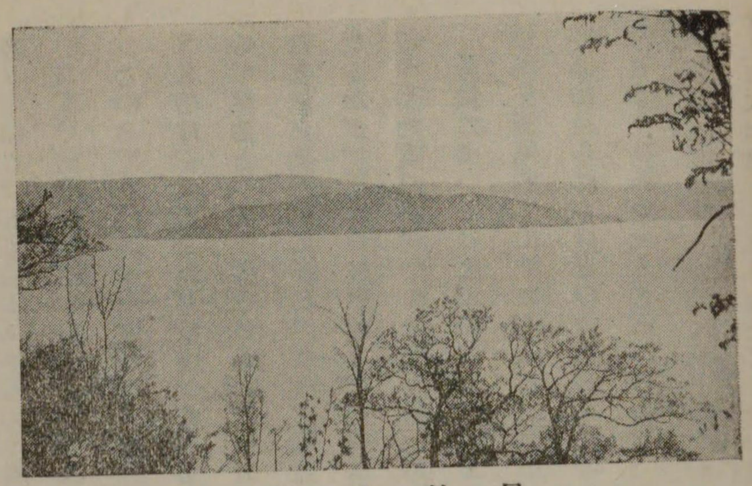
かうして名所を尋ねて見ると、なるほど春花秋月のたのしみは、十分に味はれる樣である。內地に居つて考へると、とかく北邊極地の淋しいところ、寒いところと思はれるが、來て見れば、此處もまた住み得るところである。

急ぎの旅をたどる私共は、早朝から自動車を驅つて、市街を一巡し近郊を尋ねめぐつた。天都山から桂ヶ岡公園に下ると、道ばたに熊の子が一匹飼はれて居る。近所の山でとつたのだといふ。子供が二三人集まつて、いろ〳〵食はせて居た。すべて子供は可愛いもの、猛獸でも、熊の子は特に可愛い。眞ッ黑な毛の中から、小さい目をパチ〳〵させて甘へるところなど、殊にさうだ。でも一年もたつと、もうあぶない。時には橫目でジロリと睨む樣になるとか。

六七、屈斜路湖畔を指して

早朝網走の大觀を終つた私共は、七月六日その午前八時十五分といふに、網走本線により、その終點札鶴（サッツル）へと向つた。

北濱驛あたりからは、列車は再びオホツク海岸を走つて行く。平砂眞直遠くに連なつた波打際、あたりには樹といふ木はなく、たゞカンザウやハマナスやの草花が、今をさかりと咲き亂れて居るのであつた。



屈斜路湖

六七、屈斜路湖畔を指して

行手の磯浪を遠く見やると、そのつきるところに、高く斜里岳が聳えて居る。これもまたその形狀が富士とほとんどかはらない。天都山から望む時には、特に秀麗であるので、或は網走富士などゝもいはれて居る。

流石に日本は景勝の國、何處にいつても、かうした勝地がある。殺風景なスコットランドの山地などを、天下第一と思つて、やたらに案內がしたる英人があはれであるなどと、坐ろに思ひ出される。

或る小さい驛からであつた、年の頃六十前後と覺しき一人の老人が乘つたと思ふと、忽ち威丈高の態度をとり大音聲にて演說を始めた。隨分醉つて居るらしい。まはらぬ舌を無理にまはしての大氣焰。諸君！此不景氣を何と思ふ。誰がかうしたのか、と妙な結論に及ぶ。側の人

評して曰く、お前が飲助だから、だめなのだ。人をとがめることはないと。醉ひどれも、また日本の名物、何處の國にもあんまりないものが、日本では何處にいつても見られるのは、なさけない。

このあたりは北見の中でも、特に耕地が廣く、開けて居るところであつた。ステーションで昇降する客は、大抵身なりのいやしくないもの、相當裕福に暮して居るのであらう。試みに出身地を聞いて見ると、佐賀縣といふ女、秋田縣といふ男、岐阜縣といふ老人、青森縣といふ青年などがある。なるほど全國的である。偶々北海道に生れたといふものもあるが、問はれると低い聲で、此處に生れましたが、國は山口縣だなどゝいふ。併もその樣子に、一種の恥かしさを含んで居るらしいのは、どうしたものか、今の北海道は、勿論昔ながらのエゾ地ではないのに。

札鶴についたのは、午前十一時であつた。此處から川湯まで、自動車が來往する。約二時間程。耕地を横斷して山地に入ると、數里に亘り、壯觀を極めた自然大森林がある。カラフトにおいても容易に見られぬほどの大木が天を摩し、併も極めて密生して居る。溫泉場は、實にこの密林中の盆地を切りひらいたところにある。

六八、幽邃無比のクツチヤロ湖

網走本線の終驛札鶴から、自動車凡そ二時間ばかり、鬱蒼たる自然大森林を通りぬけ、釧路の國境を越えると、間もなく川湯溫泉場につく。此處には、對岳館、紅葉館などといふ旅館がある。設備もよく、溫泉も非常に美しい。

とにかく遠く人域を脫した、山中の盆地であるから、幽玄の氣分を滿喫することが出來る。それでも文化設備に、何等の缺けるところもない。眞に三伏の候における仙境である。

北見釧路の國境附近は、北海道においても、最も豪宕幽深なる地域である。東から摩周（周回六里）屈斜路（周回十二里）阿寒（周回七里）その他の湖水が、眞ッ青に清澄なる水を湛へて居り、山としてはアトサヌプリ（跡佐登、千五百尺）雄阿寒（四九九九尺）雌阿寒（五三三六尺）等の諸峯が聳え、千古斧鉞を入れざる大森林が、これ等を抱擁して居り、然もその間隨所に豐富なる溫泉が、湧出して居るのである。

恐らくは內地においてもこれほど雄大壯麗な地域はあるまい。地方人士が、國立公園候補地と稱して居るのは、誠に尤ものことである。

ともかくも川湯溫泉地についた私共は、先づ對岳館に落付き、そのまゝ旅裝をも解かずに、直にアトサヌプリの探勝に出かけたのであつた。山はそれほど高くはないが、珍らしくも、全山悉く硫

黄色をして居る奇峰である。またその名を硫黄山といふのは、げにもとうなづかれる。山の中腹周圍數箇所から、噴煙濛々異臭を放つて鼻をつき、近づくことすらむつかしい。

麓には廣い平地が展開し、一面イゾツツジの白い花が、毛氈の様に咲きみだれ、その上に深緑の偃松が、あちらこちらにどつしりと腰を下ろし、その間にまた清楚な白樺が、スツキリしたスタイルを以て、程よくそこここに立つて居るといふ圖である。

屈斜路湖の幽邃なる風趣は、容易に類例があるまい。北方は國境の連山によつて抱かれ、南方湖畔の平地には、僅の耕地はあるが、四周はほとんど皆鬱蒼たる自然林を以て蔽はれて居り、人跡未到の幽域である。水邊近く仆れかゝつてゐる曲りくねつた大木が、其の影を暗く水面にうつしつゝ或は大蛇の蟠るが如く、或は猛獸のきほひかゝるが如き、坐ろにおそろしくもなる。山中の火口原湖として、これだけ大きいものは、我が國には滅多にあるまい。

旅裝を解き、一浴して、山容水態に眺め入ると、いつしか完全に天地自然の懷にいだかれ、我を忘れて、たゞ恍惚たらしめるものがある。夏ながら、あつさなど思ひ出しすらしない。正に七月初旬の眞夏の候であるのに、華氏六十度。私は坐ろに、スカンヂナビヤ山嶺中の夏の旅を、憶出さざるを得なかつた。

併しながらこの處女仙境が、果して何時まで、その靈性を保つて居ることが出來るであらうか。既にあちこちには、怪しい妖魔の、シヤナリ〳〵とした姿も見えて居る。

六九、釧路の一瞥

思ひがけない仙境に、心ゆくばかり幽深の氣を味はつたが、今日（七月七日）は釧路を經て、根室まで行かねばならぬ。

朝まだき川湯を出た自動車は、今日も亦大森林の中を走つて、弟子屈（テシカガ）といふところに着いた。摩周湖畔に位し、此處にも溫泉はある。川湯の如く奥地ではないが、それでも脫俗の風致に富み、都人士の一遊に値するところである。

午前九時半、弟子屈發。一路釧路へと向ふ。間もなく行手に茫々三十方里、極めて緩傾斜を以て次第に海に向ふ釧路平野が展開する。その間を、釧路川が澤山の支流を集めて、南に流れて居る。併し、何故かこの平野は、北見の如くに耕やされては居ない。見渡す限りの農牧適地、人跡未到の大森林、豐富なる埋藏石炭は、皆今後の問題となつて居る。平野がつくるところの海岸に釧路港がある。弟子屈から三時間程。

港といつても、海灣の乏しいところ、纜に釧路川の口を、利用してあるに過ぎない。

附近一帶に、ほとんど樹木はない。ただ殺風景な海岸の雜草が、生ひしげつて居るのみである。稻なども、海岸を距る二三里の奥地でなければ、生育しない。これは時々嚴寒を伴ふ濃霧が襲來するためであるといふ。概して本道の太平洋沿岸は、かうである。

これからは全くの一人旅、長谷川校長と分れて、先づ釧路中學校を訪ひ、渡邊校長に東道せられ市内の要所を視察した。何といつても、人口四萬五千の大都會、本道東部の關門港として、大切のところである。その防波堤は、一千五百萬圓の巨費を投じて、出來たものである。併し外國輸出は割合に少なく、約一百萬圓位、内國移出は、七千萬圓にも達するといふことである。その中富士製紙會社の製品があるので、工業品は一千七百萬圓、これに次ぐ農産五百萬圓、水産四百萬圓、林産鑛産各三百五十萬圓等が、主なるものである。

市の東部春採（ハルトリ）といふ處に、アイヌ人の學校がある。これはまた我が國では珍らしい官立小學校、現在生徒は、三十七名の單級組織、中には目の惡いもの、何となくぼんやりして、表情のないものなどが比較的多いが、相當優秀なるものも居るといふ。

ポロチヤシといふのも、有名なものである。ポロは大、チヤシは砦の意、アイヌ人の造つた城砦の遺跡である。市内茂尻矢（モシリア）にあり、現在は公園となつて居る。高さは十間位、周圍は三四町位もあらうか。

最後に、これもまた有名な河岸の魚市場を見る。折から不漁の爲め淋しいといふが、それでも魚類は、山の如く積まれてゐる。「時しらず」といふマグロが主である。長さは一間から二間位、無殘にも大きな頸部を切斷され、鮮血にまみれて横たはつて居る有樣など、あまり愉快な眺めではない。マスその他樣々のものもある。

七〇、根室にて（一）

釧路を午後五時頃出た列車は、その十時頃根室についた。これもまた北海道の一尖端、美しい景色が展開するであらうが、今はたゞ黑暗々の中、ひたぱしりに自動車を飛ばし、二美喜（ニビキ）といふ旅館に入る。

明くれば（七月八日）我が身は、海岸の港間近の高樓の上に、立つて居た。前には辨天島が、低く長く横たはつて、しつかりと根室港を抱いて居る。港内には、支那行の大きな汽船が一隻、烟を吐いて居る。海産物を輸出するものである。景氣のよい時には、かゝるものが常に五六隻宛居るの

だといふ。クナジリ島はと望んでも、今日は水面近く烟霧漠々、夏の中は何時もかうであるといふ。その霧の中に、千島列島は、ずーッと連らなつて、カムチャッカに及んで居るであらう。東の方は、何處までいつても、たゞ茫然たる太平洋、一髪の山かげだにないのだ。

根室は現在人口一萬六千、海岸の高臺上にある。元來根室は、ネモロである。舊時は、根諸と書いたこともある。アイヌの原名においては、ニムオロである。樹木鬱蒼の義であるといふが、今日はほとんど森はない。周圍にはたゞ牧場が、何處までも續いて居るのみである。何となく、イギリスの田舍や、デムマークあたりが聯想される。

根室は、比較的に富んで居る都會であるとか。それは、主として千島を控へ、その產物の集散地と、なつて居るからであらう。何といつても、水產が第一、昆布二百四十萬圓、鱈、帆立貝各二百卅萬圓宛などを筆頭として、鱒、鮭、鯨、蟹、その他、一千七百萬圓に達する。これについでは工產物、といつても水產物の加工品が多く、六百萬圓に近い。次は農業、百八十萬圓もある。全產物の價額は實に二千數百萬圓にも達するといふ。

水產加工の工場としては、帆立貝の貝柱を、罐詰にするところがある。その原料は、國後や色丹などの島々の近海からで、毎日四萬個位は採集する。それを丁寧に、一々割つては貝柱のみをとり罐詰とするのである。年產額二十萬圓位。日魯漁業會社の經營で、主として米國に輸出する。工場員の言によるに、此處の製品は、極めて優良であるが、米人はこのものゝ市場價額を、強いて彼の地の製品より、非常に安く見積るのである。これは一種の排日貨である。この爲めに、この事業は、可なりに困難なものとなつて居る。若しさうでなければ、大いに米國に進出し、彼の地の食卓を獨占することが出來るのにと、扼腕して居た。

七一、根室にて（二）（七月八日）

根室の名所といはゞ、先づ第一に縣社**金刀比羅神社**を擧げることが出來る。市街の東北端海岸、斷崖の上に鎭座して居る。これは文化三年、高田屋嘉兵衞の創建にかゝり、讃岐の琴平山より、神體を奉請したものであるといふ。

處は近く根室港を見下ろし、遠くは國後島などを、展望することが出來るといふが、今日は、千島はことゞく**霧の中**にかくれてたゞ濛々。

落石無線電信局も、忘れることは出來ぬ。根室町の東南約十町にある。大正十二年、工費三十四萬六千圓を投じて、出來たものである。その通信距離は、晝間二千浬、夜間は五千浬に達するといふ。

根室港内（女生徒の氷上遊戯）

落石無電局の名は、實は明治四十一年から、知られて居る。その年、根室の東南和田村の落石岬附近に設けられたからである。併し今日それは、たゞ發信事務のみを取扱つて居る。大正十二年以後はその一部を根室に移し、受發共に取扱ふことになつた。

思ひめぐらすと、昨年の十二月であつた。ハワイを出ると間もなく、故國からの第一電が、乘船コレア丸に來た。四顧茫々、全く一髪の山かげもない大洋の眞ン中にて、直接この情報に接した時は、好奇と希望と安心と、實に様々の感懷に驅られたものであつた。それは實に此處からであつたと思ふと、興趣の殊に深いものがある。

私は次に貝柱罐詰工場を訪ひ、根室高等女學校を視察し、根室支廳、町役場等を尋ねたのであつた。

根室は今日北邊の鎖鑰として、堂々たる市街を形成して居るが、これまでには、種々なる苦心の歴史のあつたことを、忘れてはならぬ。

此處もまたロシアと、久しく繋爭地點であつた。寛政十一年には、露人はエトロフに來寇し、松前藩は、これを防ぐことが出來ず、一時幕府直轄として、奉行廳舍を根室に置き、防禦の策をめぐらしたのであつた。彼の最上徳内、近藤重藏、高田屋嘉兵衛等英傑の士の活躍をも、忘れることは出來ぬ。

エゾの反亂も、また北邊史において、忘れることの出來ぬものであらう。それは寛政元年のことであつた、國後島の夷人マメキリといふものが首長となつて、總勢二百人、日本人の商店民家を襲ひ、七十一人を虐殺したのであつた。後彼等自らその不利を悟り、來降したので、首謀者三十七人を斬つて、これをゆるした。この爭亂は實に國史上における、最後の蝦夷征討史を飾る事實であらう。

根室はかへつて冬において面白いといふ。海も陸も、すつかり雪や氷に閉ざされて、たゞ白皚々何處までもと自由自在に、大海の沖合まで彷徨することが出來るといふが、それはこの眞夏の時には、望むべくもない。それでも今日すら肌寒い。少し落付いて居ると、火鉢が欲しくなる程度である。